
お・り・が・み ~ 神殺して戦女神な物語 ~

常識の外側

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

お・り・が・み　　く神殺しで戦女神な物語

【Nコード】

N 6 5 1 4 U

【作者名】

常識の外側

【あらすじ】

望まれて始まる物語と望まれずに始まる物語。その違いとは何だ？

A・難易度。

別にトラックに轢かれたわけでもなく寝て起きたら何故かあの世の一步手前。

周りには幽霊と魔神と骸骨と魔獣。早く家に帰りたいです。

似てるようで似てない二つの世界お・り・が・みと戦女神、地球とデイル＝リフィーナと言う二つの世界の世界観融合型クロス。

世界観が混ざった所にトリッパーオリ主をぶち込んでみました。
さて、チートも何もないただの一般人の行方は？

始まりに

初めに、当小説をお読みいただきありがとうございます。とう御座います。

当小説は林トモアキ氏のお・り・が・みと、

エウシュリー様より販売されている『戦女神』シリーズの世界、
デイル・リフィーナとの世界観融合型クロスです。

具体的に言いますと戦女神で登場したキャラクターが現れたり、
町や歴史的イベントが発生いたします。

比率としては8：2でお・り・が・み色の方を濃くしていますが、
最初のほうは時代的な問題もあって戦女神色のほうが強くなっております。

それでは、グロ、微エロなどの要素がありますけども、
そういうものが平気な方はおすすみください。

以下、用語などの解説になります

常識の外側：アウト名の通り常識では測れないような実力者や、技術的に
常識を凌駕したものに与えられる称号

魔王の円卓に属する者は皆アウトと呼ばれる。

魔導力：お・り・が・みの世界での魔力的存在。リッチ曰く、信じるこそが一番の力。

縮めて魔力と読んでもいいらしい。

冥き途：冥界や各種異世界へと通ずる門が存在する死者の通り道。
昔はナベリウス一人での門番だったが、現在はリタと共に
門を護っている。

ギュンギュスカー商会：ソフトハウスキャラの『巢作りドラゴン』
より登場、

ドラゴンでも人間でも、お金さえあれば何
処にでも現れ、

何処でも商売をする商会。従業員も『商品』
扱いだったり。

北華鏡の集落：戦女神V E R I T Aで冥き途が一番近い村。冥き途
へ行く前に2個ダンジョンがあるが、

それはご都合主義で消え去りました。

アラン・マクレガー少尉：お・り・が・みの天側の敵でリッチの親
友。異世界から地球に流れ着いた者で、

通称ラメ入りペ。シマンとも呼ばれるこ
とがある。全身に65536個のコアがあり、

そのコアを全て同時に破壊しなければマ
イクロ秒で互いに保管しあうコアの再生を超えれず、

破壊することはできないという鬼畜スペ
ック。

デスサイズ：お・り・が・み最終巻でリッチが使用した魔法の一つ
セギホノセギホノアヴェスタヴェスタ：壊れたペ。シマンがよく言
う言葉。意味不明。

第一話 流れ着いた先で（前書き）

感想をもらえれば嬉しいです

第一話 流れ着いた先で

—— ジュウ……と広い空間に焼くような音が響く。

同時に肉を焼くような匂いと脂肪が焼かれ蒸発する音もなる。

早い話、肉が焼かれているのだ。

「……ワクワク……」

石を積み上げ枯れ木を燃やし、

その上には若干不恰好なフライパンを乗せてある。

その上でじゅうじゅう音を鳴らし肉が焼け、脂肪が溶ける。

「まだかなあー」

食事は日々の楽しみであり、俺の趣味でもある。故にどんな状況でもそれは欠かさない。

「グルルルルウ」

巨大な犬の様な怪物がフライパンの上で焼かれる肉を見つめ涎を垂らす。

普通の精神なら卒倒モノの光景だが、

この生活になれた自分としては不思議と可愛く見えるから問題ない。

問題ないといったら問題ないのだ。

そして肉も既にバラバラになった状態で犬（？）に持ち込まれたため、

実は何の肉だか分からない。だが気にしてはいけない。

気にしだしたら色々と終わらないからである。

「ふむ、中々いい匂いがしてきたな」

そういうのは紳士服姿の骸骨。しゃれこうべとも言つ。

葉巻を銜えている姿が良く目撃されるが骸骨なのに意味があるのだからうか。

肉の様子を見ながら周りを見る。

暗い。

何か透明な白い影がいつぱい。

なんか『死にたくない……』とか『やっと逝ける……』とか良く聞こえる。

あの世に通じてるらしい。

金髪の無口系幼女がいる。

ふわふわ浮かぶ白髪の槍少女がいる。

紳士系骸骨もいる。

巨大系番犬もいる。

拝啓お父様、お母様。不肖の息子はとうやらあの世の一步前にいる

ようです。

どうしてこうなった。どうしてこうなった。

最後に、どうしてこうなった。

あ、肉が焼けた。

「いただきまーす」

「ん……いただきます」

「ガウガウガウガフガフガフ」

「は、は、は。涎がこちらまで飛んでいるから少し落ち着きなさい」

母さん、息子はあの世に最も近いところでがんばってます。帰るのはたぶんムリです。

●

—— 1週間ほど前

始まりは簡単である。

それはとある日の晩、高校を卒業して数日後、友達と祝うために適当に飲んで帰ってきた晩。

疲れたためにろくに着替えも靴もせずただ倒れこむように、親に無理を言つて一人で暮らしている小さいボロアパートの、自分のベッドに倒れる。

酔った頭では深く考えることはせずうつ伏せに倒れて寝る。

ただそれだけであつたはず。

次の日になつて、朝日が昇れば飲みすぎたことを後悔しながらも、なんで靴を脱がなかったんだと自分に愚痴る。

そのはずだつた。

だが自分の朝を知らしめたのは決して隣の部屋に住む元気な爺さんの声ではなく、

ましてや隣に住むフリーターのお姉さんの優しい声でもなく、

流れるような水の音であつた。

今時風呂は共通と言う古臭いボロアパートに住んでいる身分ではあるが、

流石に風呂場の水の音が伝わってくるほどまでにぼろくはなかったはずだ。

いや、そう信じたい。

耳を済ませれば静かに流れる水の音がするほかに、広い空間に風が流れる音がする。

……風？隙間風だよな？あ、でも隙間風ならこんなビュービューし

ねえよな？

そうか。ついに壁に大穴が空いたか。いつかはなると思っていたが、ついにその日が来たのか。また大家に金をせり取られるのか。

……よし、そろそろ現実逃避をやめよう。

分かってはいるのだ。自分の状態が明らかにおかしいと。

水の音は増したから聞こえるし、こんな大きな音を立てる隙間風などない。

春なのに若干寒さを感じるこの温度、

絶対自分の部屋ではない。

目を開ける前にいくつかの可能性を思考してみる。

A・友人が合鍵を使って自分を部屋から運び出した。

B・大家さんがついに狂って部屋の外へと投げ捨てられた。

C・俺は伝説の勇者で異世界に召還された。

よし！何でCが思いついたか知らんがいい加減に起きろ俺の頭！

状況を理解して受け入れるためにも体を起き上がらせる。

うつ伏せになった体を起き上がらせながら今までかたくなに閉じていた目を開ける。

周りは夜なのかかなり薄暗く、周りが良く見えない。

何回か目をぱちぱちしながら目を闇に慣らし声のする方向へと頭を向ける。

「いやあ、すいませんねえ、たぶん誰かの悪戯なんでしょうけ……」

ど……」

視線を向けた先、その先には骸骨がいた。白い骨に紳士服、葉巻を銜えてステッキを握った骸骨である。スケルトンともいえる。そしてその横に巨大なライオンとも言える肌色が青の猛獣がいる。しかもその背には黄色い髪の子女が座っている。

わけ分からん。

そしてこの二人+α、どこかで見たことがある気がする。

そして、そこまでが自分の意識を保てた限界でもある。再びベッドの上に倒れる瞬間に聞こえた骸骨の男の声、

「——●×▲ハ！/山××、——●？」

どこですかここおーっ！言葉が通じませんよおーっ！

意識を失う前に考えられた、最後のことである。

●

「ふむ、眠ったか」

正確には眠ったではなく眠らせた、である。正気を保たせるための応急処置とは言え若干乱暴だったかもしれない……とは思わない。

骸骨の男がカタカタと骨を鳴らして声を出す。

どういう原理でそれが成されているかは永遠の不思議ではあるが、それは今その場にいる者達にとってはどうでもいいこと。

骸骨の男の前には安物だと分かるベッドにうつ伏せに倒れる青年がおり、

黄泉の門近くの浅い水の上に鎮座している。

その周りにはその青年の所持品なのか様々な道具が錯乱しており、どれもこれも見たことがないようなものばかりである。

青年は悪戯と言われたが、悪戯程度でこれるような場所でもあるまい。

骸骨の男は軽くステッキに体を預けながら少し思案するようにそぶりを取り、

「放っておくかね？」

そう言つて魔獣の上に座る少女へと視線を向ける。

表情のない顔で青年を見つめて数秒、結論に達したのか頭を横へとふり、

「……………またされたら……………迷惑」

どちらも、青年の存在自体はどうでもいいことなのだろう。

珍しい服装と道具にはいささか興味があるが、それでも必要と言うわけではない。

この暗く深く霊の集まる世界では道具などほぼ何も要らず、必要なのは己のみを守る術のみぐらいである。

だから、青年自身にはまったくの興味も価値もない。

だが、何故此处にいるかというのはまた別の問題ではある。気づいたらここに居た。知らないうちに進入された。

片方はこの『場』の管理者であり門番とも言える存在。完全とは言わないが、

ここ、『冥き途』をかなりの精度で把握している。

なのに、進入を気づけなかった。それが問題である。

「起こすかね」

青年を起こすのに時間は要らない。ステッキで殴ったりすればそれで済む。

「記憶を読む」

その方が圧倒的に早いと、そう結論付ける。

寝てる間に実行されたのであればだれが犯人かは分からないが様子からしてどうだったか、

もしくは原因がなんだったかぐらいは分かるかもしれない。

それでもダメだったら捨て置けばいい。たったそれだけの認識。

だが、此处こそが始まりであつた。

「では始めるぞ、ナベリウス殿」

「ん……………やって……………リッチ……………」

ゆっくりとした幼い声でナベリウスと呼ばれた少女がゴーサインん

を出す。

それを受けてリッチと呼ばれた骸骨がステッキを振ると、ベッドを囲むように魔法陣が描かれる。

それが完成してステッキをもう一度振るう。

リッチがスツテキを掲げた状態で動きを停止し、ナベリウスがが瞳を閉じた状態で停止する。

少しだが、ナベリウスに驚愕の表情が生まれ、リッチの体の動きも停止する。

あたりを静寂が包む。

ナベリウスが騎乗している魔獣も空気を読んでいるのか静かにしており、

あたりを『何かが』漂う中あたたかき時間が過ぎてゆく。

真剣な顔をしてリッチとナベリウスが互いを見合う。

今の行動によって二人の仲での青年に対する興味、そして警戒度は上がっていた。

彼自身にはまったくの価値はないが、

彼の有する知識は世界を滅ぼす毒にもなりえるものだった。

「これは……どうしたものかね」

「……………危険？」

「それには違いないが、ふむ」

双方共に考えに耽る。

使い方によっては確実な毒になり、

それは確実に不幸しか呼ばないものだとはつきり二人には分かる。

「かの視姦魔人に見つかることは？」

「ない……………はず……………ここにいるうちは、平気」

「かと言ってそのままにしておくのも危険ではあるな」

人類が滅ぼうとどうということはない。

自分の命にもそこまで大きな価値を感じるようなものでもないが、それでも迷惑は嫌だ。世界に対する価値観はそれだけが青年の脳内の情報は、
そついう世界観を僅かにだが変える。

ほんの少しだけ、世界に興味と希望を与えるようなものであった。
だからこそ、このままにしては置けない。

「記憶を消すかね。もしくは封ずるとしよう」

「封じるほうが最善だと……………思う。全部じゃなくて……………」

「流石にまっさらにするのは酷だろう。『物語』に関する部分は消すでしょう」

「ん……………それがいいと、思う」

完全に消し去って捨てるのは簡単だが、

それでも『物語』と完全には合致しない世界の現状。

もし、それがシナリオどおりの世界であるのなら、遠い未来にその知識は必要とされるかもしれない。

それはただの可能性。だが無視は出来ない可能性。

頷いたリッチがステッキを振り回し魔法陣を新たに宙に描き始める。それに魔導力を……魔力を通して効果を発動させる。

10秒。たったそれだけの時間でリッチの施した術は完了した。

「あとは少年の処遇だが……」

「面白……そう」

「なるほど。手元においておく、と言う事か」

何かなるほどかは常人には理解しがたいが、ナベリウスの一言で大体を把握したのかそれだけでリッチは理解する。

つまりは、壮大な暇つぶし。

未来に起きうる壮大な物語を、それを先にネタバレされた感覚。だが、それ自体は問題ではない。その物語に自分がいなかったり自分がいたりするのではなく、それに巻き込まれ、そして被害をこうむると言うことがわかっていえると言ったことが、問題である。

ならば、回避は不要であり無用。

退屈こそ魔人やそれに類する者達を殺す毒であるのだ。

そんな風に真剣な雰囲気の中、一人の少女がふよふよ浮かびながらやってくる。

赤い槍をもった白髪黒い若干ゴシックな服装、
眠そうに瞼を擦りながらナベリウスとリッチの傍によると、

「あれ……お客さん？あ……ベッドだあ……おやすみー……」

青年がその上で失神していることを無視してその横に眠り始める。
リッチが一瞬止めようとするが、既に寝息を立てる幽霊の少女の姿を見て諦め、

「……これでいいか」

「……………うん」

リッチもナベリウスも二人を放置して去って行く。

だが、これこそが始まりだったと言うしかない。
間違った『物語』。存在しないはずの『登場人物』。交わることのなかった『世界』。

この青年の存在は、やがて、世界を動かす毒か、もしくは浄化する薬となりえる。

気まぐれと暇つぶしに生かされた青年の存在は未来を変えうる。
今はまだわからないことだが、

「zzzzz……」

「すうすう……」

交わることのなかった二つの世界、そこから生まれる物語。
青年の物語は、人の生が終わる場所から始まる。

●

目を覚ましたら横に美少女が寝てました。槍を持って。

「あ…ありのまま 今 起こった事を話すぜ！『俺は気絶してベッドに倒れて起きたと思ったら、
いつの間にか横に美少女が寝てた』な……何を言っているのかわからねーと思うが、

俺も何をされたのかわからなかった……

頭がどうにかなりそうだった……催眠術だとか超スピードだとか、
そんなチャチなもんじゃあ断じてねえもつと恐ろしいものの片鱗を
味わったぜ……」

起きて早々意味がわからないのでポルナレフに走る。

とりあえずネタに走ってみれば若干心の余裕ができる。考えるだけの
余裕が生まれる。

それをもって現状を再認識する。

気絶する前に見たこと感じたこと、そして現在の状況を整理する。

まず、自分は酔ったまま家へ帰ってきて着替えず靴を脱がずアメリカ
カンスタイルにベッドに倒れ、
そのまま眠ったはずである。二日酔いの成果頭が若干痛く、ジンジン
するがそこまでひどくはない。

で……寝て起きてみれば奇想天外な生き物が目の前にいて、意識がブラックアウト。

どんな生物を見たか思い出し、嫌な汗が背中を流れそうになるが持ち直す。

気絶する前の状況は何とか把握した。だからって何故ここにいるかは分からない。

先ほど一瞬だけ喋ったが、言語を理解することさえできなかったのはわかった。

とりあえず、周りを再び見渡す。

ベッドの足元には浅く水が流れており、流れる水の音が絶え間なく聞こえてくる。

それと同時に広い空間を風が流れるのも感じ、薄暗い世界を不気味さをかもし込んでいる。

ぶつちやけ場所がホラーっぽかった。

一瞬自分が死んであの世へきたのかと思ったが、それでも足は透けてないし、

まだ生きている感触はする。

……頬を抓ってみれば痛かった。

つまりこれは現実で夢ではない。もっと注意深く周りを見る。

浅く、広い……湖にも見える中に、自分のベッド以外にも色々とおちているものが見える。

靴下や下着、雑誌やカバン。どれもが足首程度の浅さの湖に没して

いる。

だとしたら、自分とこのベッドもその一部なんだろう。

湖を良く見てみればすぐ近くに陸地があり、それとは逆側に大きな門がある。

よく歩道に設置されている公衆電話…… といって携帯電話の復旧で
大分なくなったが、

その二倍ほどの高さを持ち、大型トラックを横に置いたような大
きさの門。

その前にどこかで見かけた姿が現れた。

青い猛獣の上に表現のし辛い服装の金髪の少女、
紳士服にステッキの骸骨。

自分が気絶した原因でもある組み合わせだ。

流石に精神的に余裕ができたのか、今回は何とか意識を失わずに済
む。

ノソノソと少女を乗せた猛獣とカタカタ音を鳴らせて近づいてくる。

さすがファンタジー、近づかれても現実味がない。まるでまだ夢を
見ているようだ。

「とりあえず、雰囲気を察するに危害を加える様子はなさそうだ…
…」

小さく自分に呟くと同時に、大きな問題に気がついた。

ベッドから立ち上がり背筋をピツシリ伸ばす。相手に悪い印象を与えるわけにはいかない。

目を真っ直ぐ相手に合わせるのが礼儀なのだろうが、猛獣は怖い、骸骨は目玉がない、

故に必然的に一番小さい幼女……少女に視線を合わせる。

「え、え……ーと、始めまして？」

「……D「……………x」

返事にと金髪の少女が言葉を出す、やはりその言葉は理解できない。

「○□「K6。は、は、は！」

カタカタ音を立てながら骸骨の男が声を上げる。

最後のは笑い声だと言っつのはわかった。笑い声だけは万国共通……たとえ異国だろうと、

相手が笑っているのは分かるのはどこか安心できる。

ただし猛獣のこちらを見る視線が依然として怖い。初心者の日本人にはあのデカサは怖いです。

言語が通じないのなら、とりあえず通じそうなことをしてみる。

自分を指差し、ゆっくりとだが発音をする。

「く、ろ、か、わ、く、ろ、う。黒川玖楼です。えーと、名前です……分かります……？」

自分を指差し何回か、ゆっくりと自分の名前を発音する。

ちなみにだが黒川と言う姓は割と多いほうだが、こんな変な名前を付けてくれた親には心底言いたい。

どうしてこんな名前をつけたのだと。小学校では名前を書くのに苦労し、

中学では厨二ネームで有名になり、高校では黒歴史だとひたすら頭を悩めた。

一生続く黒歴史である。親め、この恨みは絶対何時か晴らさせてもらう。

そのためにも、意思疎通を図る。

3回目あたりで意図に気づいたのか、骸骨がステッキをこちらへと向け、
カタカタ鳴らす口を動かしながら発音する。

「ク ダ、ク、ロウ」

「そうつす……です、玖楼です。名前がそうです」

「ク、ロウ……クロウ……クロウ……ク ダ」

自分の予想を遥かに越える速さで名前を覚えられた。

外国の言葉、特に名前は発音するのは難しいとよく言われるが、とりあえずこの骸骨はまるで初めから知っていたかのように流暢に名前を発音している。

若干ニュアンスが違ふような気もするが。

今度は逆に骸骨がステッキを自分に向け、ゆっくりとだが声を出す。

その発音はこちらの知っている言葉に近く、

「リッチ」

綺麗に、はつきりとその名前が聞こえた。まさかここまで対応が早いとなるとは。

そう思うのもつかの間、ステッキを横の少女と猛獣へと向け、

「ナベリウス、ケルベロス」

「あ、ナベリウスさんとケルベロスさんこんにちは」

めっちゃくちや地獄の番犬じゃねえかと、声を上げて叫びたかったが、

余計に状況を拗らせたくない一心でそれを押さえ込み、何とかギクシャクした笑みを浮かべる。

「……………よろしく」

「普通に喋られたんかい！！！」

流石にムリだった。

「ねえ何？俺が今まで道とのコンタクトをしようとしてがんばってた苦労って何？

必死に名前から始める事で少しずつ相互理解を深めようとしてた俺って何？

しってるか？言葉の通じない外国の軍事基地で絵を使ってコミュニケーションを取って、

言葉が通じないのに心を通じたと言ったい話を再現しようとした俺

の夢を返せええええ！！！」

「うる……………さい？」

「すいませんでした」

若干疑問系だったが、ケルベロスと言われる猛獣を従えられるほどの少女、

そんな生き物にとてもだが敵う気はしない。素直に謝ると、よこでカタカタ音を鳴らしながら骸骨が笑い始める。

「は、は、は。悪気はないんだ、すまないね。」

今のやり取りで言語の違いや共通を認識して通訳用の術を作り上げてたのだよ。

改めて名乗らせてもらおう。私の名前はリッチ、しがない骸骨紳士だよ」

骸骨に紳士も種類もあるのか。本日幾度目かの驚愕。

頭をステッキでコッソンと叩かれる。いきなりの衝撃に混乱しかけるが、

「すまないね、言語変換の術を打っただけだ。これで君の出す言葉は我々には我々の言葉に聞こえ、

我々の話す言葉は全て君の国の言葉に聞こえる。まだ完璧ではないから、

難しい言葉が偶に変換できないかもしれないが許したまえ」

若干えらそうな骸骨だが、いい骸骨らしい。イイヒト(?)デヨカッタナー！。

「そして此方が」

ステッキを再び少女のほうへと向ける。

「ここ、『冥き途』の門番をしているソロモン72柱の石柱、
『魔神』ナベリウスで、この管理人のような方だ。そしてその下に
いるのはペットのケルベロス」

ペットだったんですかそれ。

そう思うと可愛く見えてくる不思議。人間の認識する力は恐ろしい。
そして一番背の小さな少女がソロモンの魔神と言ふ事実には戦慄する。

ソロモンの中のナベリウスと言えば、

ケルベロスとも言われる悪魔であり、19の悪魔軍団を率いる侯爵。
その姿は黒い鶴か雄鶏などと言われており、人の姿を取ると三つ首
だったり、

鳥っぽい雰囲気を出す生き物らしいが、眼前のナベリウスを見る。

何処からどう見ても鳥には見えない。ケルベロスはその下にいるし。

「そんなに彼女を見てどうしたのかね？」

ジ、っとナベリウスを見る視線に疑問を感じたのかリッチが声をか
ける。

「いや……俺の知っているナベリウスより遥かにかわいいから、な
んだかなあーと」

「ほう、出会ったすぐに口説くとは中々だな」

ナベリウスがケルベロスの背の上で両手を頬に当て、
いやんと、横を向く、まったく無表情なのがアレだが、素直な気持ちで見れば可愛く見える。

「……ぽっ」

「いやいやいやいや、まってくれリッチ！俺はロリコンじゃない！」

「アレは30年……いや、40年前……私も彼女にあったときはまさに一目ぼれだったよ。」

寂れた村ではあったが彼女は村一の美女でな。私も少年だった頃に彼女であって、
まさに幸運とも言えるのだが……」

「誰が思い出を語れと言った！」

「アレは私が20歳だった頃、私は……」

「止まらないのかよこれ」

「……………無理」

リッチは放置する方向で落ち着いた。

閑話休題

リッチを放置したところで、ベッドを占拠したい姿がやっと起き上がる。

ふわぁ、と短く欠伸を出して起き上がるとナベリウスを見つけ、手を振りながらナベリウスへと向かう。ふよふよと浮かびながら。

流石に生きている骸骨にケルベロスとスーパー幼女を見るともう驚かない。

「ナベリウスおはようー」

「…もう、そんな時間じゃない」

物静かなナベリウスではあるが、起きたばかりの少女に対応するときだけ、僅かばかりだが言葉をしっかりとつなげて喋っているような印象を受ける。

たぶんだが、何らかの絆で結ばれている二人なのだろう。

そこで白髪の少女が視線を此方へと向ける。ジーっと此方へと視線を向けると、

「お客さん？」

「あ、お邪魔してます。黒川九郎っていいいます」

「始めまして、リタ・セミフです」

「いい槍っすね」

「そつでしょう?。」

そして会話が死んだ。

自慢ではないが自分はそこまで社交的な正確だとは思わない。

どちらかと言えば色々と溜め込んで最終的には爆発してしまうようなタイプだろう。

先ほどのツツコミ劇も溜まった分を吐き出したような感じではあった。

だから、会話を続けるとかそつというのは得意ではない。

見たところ、リッチ以外はそういうタイプの人……間……?なのだろう。

とりあえず、

「自分は……帰れるのか?。」

期待を込めてナベリウスにその言葉を投げかける。

だが、ナベリウスは求めていた返事をくれなかった。すこしだけ悲しそうな顔をして、

頭を横へ振ると、今まで脳内トリップしていたリッチも復帰し、

「すまないがね、私たちでも君が急に現れたなんて表現しかできないだよ。

術も魔力も検知なし。故に原因不明。まさにお手上げだよ。」

「そつ……っすか……。」

半ば、それは感じていた。と言うより覚悟はしていた。
何せいきなり変な場所に飛ばされてわけわからない状況で、
でもなんとなく雰囲気から分かる。

ああ、もう戻れないんだろうなあ、と。

それは居場所ではなく、昔の自分に。やけに冷静になれるのもたぶんそれがストンと来たのも、
基本的に自分が人生で置いて受身に生きてきたから……なのだろう。

でも、まあ、悲観ばかり……してられないよな？

同時にそうとも思う。もし生きることを許されるのなら生きるために何かをしなくてはならない。
基本的に人間が生きるためには食事、睡眠、そして住居が必要である。
幸いにもベッドがなぜかこっちにあるためにベッドをどうにかすればよし。

あ。

「あ、あのう……ナベリウスさん……？」

「さんは……いない……何？」

さんがいらないとかなんて謙虚なんだろう。
だったら言っちゃおう。

「俺、どこでどう暮らせばいいんすか」

「ここです……暮らせばいい」

「マジすか」

「まじ」

「死んだら仲間入りですね」

「やっぱりお前も死んでたんだな！人型の死人率50%なんだよここ」

これが青年、黒川玖楼がこの世界に現れた日の会話であり、そして約1週間前の会話である。

●

——生活において、自分が暮らす場所はかなり困難な場所だったと此処に報告しておこう。

一、風呂がない。

二、トイレがない。

三、食べ物なんてない。

四、周りに幽霊がいっぱい。

むしろ何故此処を提供したとさえ言いたくなった。

そして何故此処にすんでいられるのかとも疑問に思った。

幽霊と骸骨は人間的な生活が必要ない上、ナベリウスは食事をしないためにトイレも必要ないらしい。

なにここ怖い。

オブラートに包んだ俺の心の叫びだった。

とりわけ、この中での一番の問題は四であつた。なぜならそれ以外の問題はすぐに解決できたからだ。

まず風呂に関しては完全な趣味だが、リッチに話をしてみたところ、土から五右衛門風呂の様な大釜を作ってくれた。大魔導師を名乗るだけはあつた。

それでもナベリウスの魔法には余裕で勝てないらしい。さすが魔神さま。

二つ目のトイレも結構簡単に問題が解決された。

昔懐かしいつぼの中に捨てると言う方法があり、見られるのは恥ずかしいからこれも、

リッチが陸地の端っこに土を練成して小部屋を作ってくれた。

さすが骸骨紳士。格が違った。

そして食料に関してが一番不安だったのだが、ナベリウスがケルベロスの背から降りて視線だけを向けると、それを理解してかケルベロスが真っ直ぐに『冥き途』の外へと走って行き、

数分で口の中に熊や猪や、分けの分らない生物の肉を加えてくる。

やっぱり牙は鋭そうだった。

そしてあまりの対応の仕方に最初から最後まで驚愕の一言だった。

それにしてもリッチの使う魔法が万能すぎて感謝が止まらない。

料理するときにつける火も、

風呂に入るときの水も、

『冥き途』の端っこの自分の居住スペースも全てリッチの魔法である。

魔法万能説。

優しすぎて逆に怪しくなってくるが、

いきなりガブリと食われることもないだろう。

そして一番の問題である四、ご近所さんの幽霊であったが、

当初は強そうな死人s（言われるまでもなくリタ&リッチ）の傍にいれば平気だと思っていたが、

ナベリウスが言うにはそうではないらしい。

「私はここを……………管理してるだけ」

「別に死者の面倒を見ているわけじゃないんですよ。」

実際は死者の門を通って次の生へと移る人たちが安全に渡れるように見たり、

案内するお仕事なんですよね」

「だから、生きてる事に嫉妬する」

「私達もよく襲われますよ」

との事。つまりご近所付き合いは仲良くないらしい。

そんなわけで――

「魔法を教えて下さいリツチ先生！」

「無理だ」

「早い?! 1秒も掛からなかったぞ?!」

「ああ、言い方が悪かったかもしれない。魔法を覚えても君には使えないと私は言いたいのだよ」

魔法が使えない。それはつまり先天的な問題だとみえる。

「君には魔導力を……魔力を欠片も感じない。
故に魔法を使用しても、魔法の燃料である魔力がないから発動しない」

「……って事は魔法はつかえないんっすか……俺の生存ルートがまた一歩遠のいた……!」

その場で蹲って地面にの字を描き始める。
何時の時代も落ち込んだらこの体勢で『の』を地面に描くのが慣わし。

「ふむ……方法はないではないがな」

「マジすか!」

「……行動の移りが速いね」

「受身がモットーなので」

蹲っていた地面から立ち上がりリッチのほうを期待を込めてみる。
リッチがそれに喉を整えるような仕草（骨しかない喉）をとり、
そして口を開く。

「具体的に言えば私が知る限り方法は……二つある。
一つは使徒となることだ」

「使徒？」

「うむ。主に忠誠を尽くし主の為に生きる。
主に尽くす代わりにその力の一部を借りたり、主の力の一部を行使
できるようになるのだ」

「おお!」

「その代わりに年を取らなくなったりするがな。
使徒を取れるのは高位の魔人や魔神、神と言った存在だろう。ここ
ではナベリウスのみが可能だろう。」

リタもただの幽霊で魔人でもなんでもないからな」

「え、リッチ先生無理なの。意外なんだが」

「こう見えて私はまだ日が浅いのでね。まあ、使徒になりたければナベリウスに頼むといい。」

基本的な方法は性行為を通してになるが、問題ないだろう」

「はい却下で。まだ社会的に死にたくないです」

俺はロリコンじゃないし、そんな称号を背負うきもない！

どっかの旧神みたいにロリペドヤロウになる気はないんだ！

名前は似てても趣味は逆なんだよ！俺はどちらかと言えばおっぱい星人です！

……最近頭が若干アップー入るな……俺……。

余談だが、まだこの時代にはロリコンと言う概念はなかったらしい。

リッチが二、と指を二本上げる。二つ目の方法を示すためなのだろう。

ステッキに半身を預けるようにしながら、

「二つ目の方法だが、これは直接体に魔導力を生めることだ。

強くなる上に魔力も手に入る。ただこれは……そう、話で聞いただけのことだから、

私に同じようなことが出来るとは分からないし、成功率は多く見積もっても1割程度だろう」

「まだお仲間にはなりたくないです！はい！」

ははは、とリッチが苦笑を漏らす。だろうな、と言いながら指を下げる。

何処からともなく葉巻を取り出すとステッキの先端に炎が灯り、銜えた葉巻に火をともしとスパーと、吸い込み……吐き出す。

「結局のところ君にある選択肢とはかなり少ないのだよ。生き残る上でできることと言えば体を鍛えることぐらいだろう。そして私は魔導師だからそれを教えることはできない」

なんだそれ。つまりは独学で学べということなのか。

内心を読まれたのかリッチは違うと言って、頭を横に振る。

骸骨スマイルを浮かべながらステッキを別の方向へと、死者の門の前にいる二人のうち片方へと向ける。

「こう見えてリタは私の何倍も長く生きている上に、槍術の達人でもあるのだよ。抜けているようでもかなり強くてね、私の二倍以上の強さを有しているのだよ」

幽霊系魔槍美少女は強かった。

「具体的に言えばリッチさんどれくらいの強さ？」

「私かね？私は二人と比べればまだまだだよ。大体……レベル130ぐらいかね」

100を越えている時点で以上だと知って欲しい。
そしてリタがその二倍以上と言うことはつまり……最低でも260か、それ以上だということである。

そこでふと思いつきで聞いてみる。

「ちなみにナベリウスさんのレベルは？」

「400らしい」

うわようじょつよい。つかここまで来ると現実味がなくなるなあ……

第一話 流れ着いた先で（後書き）

名前：黒川玖楼

レベル：1

称号：流れ着いた異世界人？

武器：なし

防具：ドレスシャツ（魔導皮膜処置）、ダメージジーンズ（魔導皮膜処置）、スニーカー（魔導皮膜処置）

スキル：なし

HP：100 / 100

MP：0 / 0

TP：10 / 10

攻撃力：5

攻撃回数：1

防御力：30

防御回数：5

魔法攻撃：0

魔法防御：50

防御属性：物理

現在技を一発も打てない主人公の軟弱さ（

そういうわけで始めまして、常識の外側と申すものです。
アウト

今回はお・り・が・み×戦女神（デイルⅡリフィーナ）の世界観融合型クロスで、

お・り・が・みが8、戦女神が2と言った比率での世界観の融合です。

発想の元はセリカさんの神殺しって称号と、

そして名古屋川家の神殺しの家系って聞いたら、ああ、なんか一緒にかなあー。

なんて発想から生まれました。

そんなわけで今回第1話は主人公がお・り・が・みなデイルⅡリフィーナに到着、

そして現実を見据える感じですね。

本当ならこういう状況では混乱したりするのが通例ですが、リッチさんの魔法でなんとかまりました（笑）

それでは、色々と疑問があると思いますので、それに答えたいと思います。

まず、アウターの興味に関してです。

アウターという部類の生き物自体が人間にさほどの興味を持っておらず、

基本的に自分本位の人生を送っていますが、冥き途で出したこの三人組の性格を考えると、

リッチ——基本紳士で妻と娘を蘇らすことを考えている

リタ——ナベリウスと大人しく死者の門の万人してれば特に文句

なし

ナベリウス——五月蠅いのは嫌いだけど結構暇。

リッチとナベリウスは玖楼の持っていた未来と『原作』の知識に、未来の楽しみと可能性を感じた、って感じです。

まあ、鈴蘭さん最後は結構はっちゃけてたからね！

そんなわけで玖楼君の目標は帰る&or生き残ること、リッチ&ナベリウスの目的が暇つぶしです。

やっぱりアウターろくでもないですね。

リッチさんが導化獵兵の事を知っていたのも『原作』を玖楼の記憶を通して見たからです。

マリーチの起こす神々の戦争についてもこれで分かりましたが、回避するのが基本方針の二人です。

玖楼の頭にあつたお・り・が・み関係の知識と戦女神系の知識は全てリッチさんが封印してくれました。

良心的なアウターがリッチ以外思いつかなかったってどういうことなんでしょう……。

原作の大分前でまだまだリッチが修行時代っぽいですが、段々と進めるにあたって、出演アウターも魔神もどんどん増えてゆく予定です。

もちろんエロゲが元ネタなのでちよつとしたエロ表現入れたりもしますが、
自分の文章力でうまく表現できるか不安です。がんばりますけどね。
うん。

とりあえず、一番のネタバレですが、

この世界にセリカ・シルフィルはいませんよ！

うん。これを言えば大体玖楼君の未来が分かってくると思う。
とりあえずはしばらくはフラグをたてながら冥き途での生活＋修行
です。

それでは次回まで時間が空きそうですが、さよならさよならー。

第二話 冥き途での日々（前書き）

前回の半分ぐらいでゴメンネ。

第二話 冥き途での日々

玖楼の存在が現れてから1ヶ月が経った。
青年黒川玖楼は、

「4」

「5」

「6」

「ふむ……7」

「」「ダウト」「」

「何故分かったのかね?!」

トランプでダウトに興じてた。四人の中央に溜まっていたカードの山を、

リッチが骨の腕で纏めて集める。

骸骨なために表情は一切分らないが、それでも若干不満げなのはわかる。

手札が残り三枚から一気に十数枚へと上昇し、辺りを見回しながら一言。

「何故分かったのかね?」

「必要以上にカタカタしますからね」

「イカサマしてるから良く分かる」

「なんとなく……分かる」

「約一名自らの行いに弁解は？」

「なし！元々イカサマありのルールだしな！」

玖楼がイカサマ発言をした瞬間、リッチがステッキを振るう。
ステッキが振るわれると同時に辺りが若干暗くなり、
玖楼やナベリウス、リタの周りに気配が増える。

「ならば配下だ」

「こんなところでスケルトン召還してるんじゃないよ！イカサマ
じゃねえよそれは！
ただのズルだよズル！堂々と召還しすぎだろ！」

この上なく馴染んでいた。

●

1ヶ月と言う期間は黒川玖楼を新世界に馴染めさせるには十分すぎる時間であった。

元々、黒川玖楼は自らを流されやすい、
もしくは受け身なタイプだと己を説明する。

そしてそれは間違っではない。

基本的に玖楼は選択することを相手に任せその結果を受け入れることで、

判断することを『楽』にしているのだ。

良くも悪くも、玖楼と言う男は適応する。

それは置いておこう。

黒川のこの1ヶ月を短く説明するとすれば、
勉強。訓練。お買い物。そして来客。

この四つに分類されるとする。生きるためにも、そして生活するためにも、

玖楼の冥き途での生活はまだまだ始まったばかりである。

●

生きる上で知識とは非常に大事なものである。

冥き途から出ても衣玖宛もなく、帰る場所もない玖楼に世界の知識は不要だった。

だが興味がないと言われればそれは嘘である。

人間誰しも、好奇心が勝る。

そのため、リッチからは軽い説明を受けていた。

「君の世界は私が知っているのよりも遥かに平和でうらやましいこ

とだ。

外を歩けば魔物が人を遅い、町では人が人を襲う。

魔人が人を下に扱いそんな一位を神々が見守り加護を信仰の対価に与える」

それがこの世界であつた。

そしてこの世界にいる限り、魔物との争いは『冥き途』に居ようがかわりはしない。

幸い今まではリタやリッチがお守りをしてきているが二人が飽きるのもそう遠くはない。

故に、玖楼は早急に自衛の手段を手に入れる必要があつた。

そして1ヶ月と言う時間は玖楼にそれなりの変化を与えていた。

冥き途、魔物と貸した亡者が寄つて来にくい一角、

……つまりは死者の門近くの陸地に対峙する姿がある。

リッチと玖楼だ。

リッチはいつもどおりの格好だが、玖楼は最初現れた格好のほかに、その手の中に中型の剣を握っていた。

その握り方からしてまだまだ剣をかじり始めた程度の腕前とは分かるが、

それとは別に体からは若干の覇気を感じられた。

その傍で、居いつもどおり、リタとナベリウスが二人の姿を見る。その他にも、見慣れないメイド姿が居るが、それはさしたる問題ではなく、玖楼は集中する。

「では準備はいいかね？」

「うっす」

簡単に答え剣を正面に構える。最初は変にネタを再現しようとして筋を痛めたり、

派手に剣を振りすぎて筋肉痛になったりも下が、1ヶ月も経てば軽く分かる。

と言ってもその1ヶ月前までは完全に一般人であつたためにこうやって戦うことに違和感は拭えない。

「マテ。そこは普通は『軽く』だろうが」

だがそんな言葉をリッチを聞き入れず、ただ無情にもステッキが振るわれる。

その動きと同時に砂のような陸地から骨の手が突き出される。

他にも腐臭のような匂いを充満させながら腐った半身を地面から現す姿が出てくる。

「我配下のレベル40程度の集団だ」

リッチの発言が終わる頃にはスケルトンと呼べる魔物とどう見てもゾンビの集団が玖楼の前に現れ、

玖楼とリッチの間に壁を生み出す。玖楼の訓練はとても簡単なもの。

リッチが玖楼の強さにあわせて使役した（調達はここ）死者を玖楼が倒す。

リッチが用意する敵は常にアンデッド系だというのが若干玖楼のS
AN値を削ってはいるが、
常に玖楼よりはほんの少しだけ強い相手を用意されるために戦いが
いはある。

逆に言えば毎回超必死とも言える。

「がんばってくださいーい！」

「がんばれ……………クロウ」

「いよっしゃあー！」

「素直だね…………」

がつくりと仕草をとるが、別段着にした風な感じを玖楼は受ける。
基本的に、リッチも相手の様子を伺ったり気にすることのできるタ
イプではある。

リタが言うには、『常識の外側』^{アウト}に片足踏み込んでいる存在として
はかなり良心的で、
かなり珍しいとも言っていた。そう言われれば他の『常識の外側』
には会いたくない。

そんな思考をリッチの杖の動きがかき消す。

ゆっくりに見えた踏み込みの後に…………飛び掛るようにゾンビが襲っ
てくる。

その動きは映画などで見る足を引きずったような動きではなく獵犬
を思わせるような鋭敏さである。

それを認識しつつ玖楼が前へ踏み出す。

剣の威力を確かめるように縦に、飛び掛ってくるゾンビに合わせる様に剣を振るう。

ズバ、と綺麗な音を立ててゾンビが真つ二つに切れながら塵へと変わってゆく。

基本的にリッチが使役したアンデッドは、滅ばされても再利用が効くのだ。

そのため、真つ二つに裂かれようがあゾンビはリッチの意思次第では再び復活できる。

余分な考えを再び振り払う。どうしてか考えがわき道にそれてしまう。

そう思いつつも横へと体を動かし、再び一閃。

その動作でゾンビがもう一体塵になって消える。

だが次の瞬間左腕に熱いものを感じる。血だ。

深くはないが、浅く、腕に引つかかれたような傷の痕が出来ている。そちらを見ればいつの間にか横へと回り込んだスケルトンがいた。白骨の体は重力に逆らうように不自然に繋がっておりリッチ以上にカタカタ音を鳴らして動いている。

既にリッチで耐性の出来ていた玖楼には問題のない光景だった。

「邪魔、だ！」

裏拳の様に剣を振り回しスケルトンの背中を砕くように剣を叩きつける。

剣を振り回すこと自体は遠心力と勢いに任せるためにそこまで力は

要らないが、
体を止めるときには逆に力が少し多く必要である。

それが面倒なため、

スケルトンの体を背後から砕く感触と共に体をワルツのように踏み出しながら、
最寄のスケルトンへと向けて剣を上へと持ち上げ縦一文字に振り下ろす。

これならば力の消費は少なく、剣の動きを止めるのは地面であると。
スケルトンが二体ほど崩れたところでゾンビをあわせて倒したリッチの配下が4体になる。

「ふむ、やはりこの程度ではもう相手にはならないか」

「いえ、十分俺の精神を」

「よし、ならば次だ」

「人の話を聞けよ。おい」

リッチが新たにステッキを振るう。

場に残っていた全てのゾンビとスケルトンが塵になり、それが集まっ
つてゆく。

やがて、リッチの前で集まった塵一つのスケルトンを生み出す。

今までのと違いがあるとすれば、それは骨が赤く、盾と剣を装備していたことである。

「すみません。どうみえても同格に見えません。と言うか俺を指差して笑ってるんだがコイツ。
ねえ殴っていい？殴っていいよな？殴らせてプリーズ」

「勝てればな」

「ひよ」

「レベル50だ。行け」

「おい、ちょ——」

玖楼はその先を言うことはなかった。

リッチが行けと言った瞬間、鋭い動きで一気に玖楼の懐へと潜り込む。

同時に右腕についている盾……バックラーを殴るように突き出す。

これは騎士とかが使っている技の中でも基本的な動きで、『バツシユ』と言われる技である。

それを始めて見、そして受けたために対処もできず玖楼の肺から空気がたたき出され、

大きく後方へと弾き飛ばされる。だが無様に尻から着地することはせずなんとか体を前へと倒し、

剣を地面に刺しそれに寄りかかるように体を着地させる。

「「「おおー」」」

「げほっげほっ、他人事だなあ！」

「槍で一撃ですから」

「魔法で……………簡単」

「強いやつはうらやましいなちくしょお！」

剣を手に、再び赤いスケルトンへと向かって突っ込む。

「ぜいつ！」

軽い飛び上がりから上から叩きつけるように剣を下ろす。だがその動作をバックラーにより受け止められる。

僅かに赤いスケルトンの体が軋むが、それだけだった。バックラーで剣を防いだまま、

左手のカトラスで玖楼の胴目掛けて横薙ぎに払う。

それを玖楼は受けた。

「根、性」

根性の一言で、赤いスケルトンの攻撃を耐え切る。

スケルトンのカトラスは確かに鎧の付いている古い武器ではあるが、それでも実力からして十分に、

人一人を真つ二つにするには十分な得物である。それが成功しなかったのは単に玖楼の装備、

つまりは彼が身につけている衣服に秘密がある。

魔導皮膜。

それは高位の魔術師にできる特殊な魔導処置であり、

服や防具に魔法によって魔力のコーティングを施し素材とかは関係なくその耐久力防御力、あらゆる属性に対する耐性などを付与する魔法である。そのためその魔法が使える者は大変重要視されるのだが、ナベリウスもリッチもそう簡単に死んでは困ると言う考えで処置したものだ。

現代火器で言えば、ショットガン程度なら完全に防げる代物だ。

それを分かってか、カトラスの一撃が完全に体に沈むのを待ってから手を剣から放す。

同時に放した手はカトラスを握るスケルトンの手首へと、そして足を蹴り上げる。目標はスケルトンの股関節。

何回もスケルトンと戦えば理解する。弱点がどこかぐらい。そう言わんばかりにけりが真っ直ぐへと玖楼の狙った場所へと伸びて行き——外れた。

「んな?!」

カタカタカタ。

そんな音を立てて玖楼の目の前でスケルトンが玖楼に掴まれた手首を残して全てが崩れる。

スケルトンが崩れてたために玖楼の蹴りは命中する事無く空を蹴ったところで、

骨が浮かび上がり再び人の形を取る。

玖楼は蹴りぬいた形。

赤いスケルトンはバックラーを付けた腕を引く形で静止。

「り、理不尽だぁー！」

カタカタカタ。

玖楼、ダメージをあまり与えられず敗北。

●

「なにあれ反則臭いんだが……痛つつつ」

「は、は、は。まだまだだね、クロウ。まだ10レベル上の相手は無理か」

「普通に無理だろ！脳みそ腐ってるだろお前？！」

「脳みそなどもうないよ」

「そういう意味じゃねえよ！」

戦闘が終わってすぐにスケルトンは還され、玖楼も治療を施される。基本的な玖楼の戦闘訓練とはこういう形である。

一日の大体が暇であるリッチが使役した配下と戦い経験値を溜めてゆく。

レベルも最初は眉唾物ではあったが確実に身体能力が上昇してるのを感じるため、そういうものなのだろうと、

玖楼は深く考えることを思いっきり放棄していた。

砂地に胡坐をかきながら座り込み剣を握り、それを戦闘を終始眺めていたメイドへと渡そうと、柄のほうを相手へ向ける。

「良く分からんが前使ってたやつよりは使いやすかった。
バラバラにしようとしたら何故か骨を砕けたし前のよりは強かった
……と思う」

「あ、それはとって置いて下さい。以外に人間のテスターってのは
珍しいそうなので、
それはお礼代わりに、だそうなんです」

それをメイドがやんわりと断る。
とんがり耳に目まで隠す髪とメイド服。この姿は社則だそうで、個
人的に社長に会ってみたいが、
そうともいえずただ頷いて剣を横の地面にさす。

異次元にしまう人外スキルを玖楼は習得してない。と言うよりした
くない。

「それでは『ゆりかごから墓場まで』のギョングユスカー商会を是非
ご贖いをお願いしますね。
お金のにおいする場所がある場所ならどこにでも我々は現れますか
ら。」

今回は事前に連絡を入れますので〜それでは〜」

ギョングユスカー商会。人間にも魔人にも神をも商売相手にする凄
まじい商会。

数年に一度のペースで冥き途にも商売できていたが、偶然玖楼が現れた数日後に来たために玖楼と接触、そのままテストやアイデアの提供をする関係となっている。

ドリルについて説明した次の日に開発主任からメイドを通して大量の金貨を送られたのはまだ記憶に新しい。

考えている間に言いたいことを言って消えて行くメイド。ちなみに会社が違うとかそんなことを考えてはいけけないのだ。

「……あれ。気にしちゃいけないことが多いような気がする」

「どうしたのかね？」

「いや、なんでもない」

気にしたところで何もできないのなら気にするだけ無駄だと言っとなのだ。

剣を杖代わりに立ち上がりながら額に付いていた汗をぬぐう。

これで本日の訓練は終了と行かずに、このあともまたリッチに召還される配下と戦い、

実践方式の戦闘によって経験と能力を鍛える。遊んでないときはこれが基本的な日常である。

そして戦い終わった後は総じてそのまま反省会へと突入する。

そんなわけで、

「それでは今回は何が悪かったと思う」

「あの赤い骸骨の動きが反則だったこと」

スパンツ！

いつの間にか背後に回りこんだリタが持っているハリセンによって頭をはたかれる。

予想外の威力に後頭部がジンジンと痛みを訴えるが、それを飲み込む。

「んー。やっぱり火力不足？」

「いや、動きに無駄が多すぎることだ」

どうやらまったく違ったようだ。

「そもそも動きが初心者丸出しなのだよ。１ヶ月でそこまで期待するのは酷かも知れぬが、

王国の一般兵には勝てても近衛騎士クラスには圧敗するほどの弱さだぞ」

「最初の30レベルは弱らせたのを俺がトドメを刺しただけだしな！」

スパンツ！

「威張らないでください」

「すみません」

ふたたびハリセンで叩かれ大人しくする。

だが事実、初期の玖楼は酷かった。
一撃喰らえばそれだけで血まみれの瀕死状態になりまさにヤ。チャ
状態だったり、
今では避けられるゾンビの攻撃もまったく避けられないほどの弱さ。
リッチが適当に作り出した剣を握ろうとしたら1回ふっただけで重
すぎて肩が脱臼。

本当に酷かったのである。

そのため一撃で倒せる状態にまでリタが追い込み、それに玖楼が止
めを刺した。

今居る死者の門前付近から移動すればはぐれ幽霊や怨霊の素靴とな
っているエリアに居るものは、
今でも玖楼の二倍の強さを持っているために一人で戦える程度にレ
ベルが上がるのは早かった。

と言ってもレベルとかなんだか言われても未だしっくりこない。

良くも悪くも玖楼は現代人である、と言うことなのだろう。

「まあ、純粋な体術や剣術は仕方がないと言おう。この世界の住人
ならだれもが小さい頃から見たりするが、

クロウの言っていたような世界では剣を見たりしないのだろう。

動きと言うものは一日や二日で身につくものではない。それこそ何
度も何度も反復し覚えなくてはいけない。

……だからと言って負けたことに対する免罪符にはならぬが」

「あ、やっぱりですか」

「そんなわけでそろそろクロウにも必殺技を覚えてもらおうと思う」
どうしてそうなる。

「む、嫌そうな顔だな？」

「ぶっちゃけ厨二病は嫌です！剣振り回してるだけでも、ちょｗｗ
おまｗｗ痛えｗｗな、
状況なので技名前叫んだりする、痛い人たちの仲間入りは激しく嫌
だ」

スパンツ！かちこん！びりびりびり！

今度はリタのハリセンだけではなく、リッチのステッキとナベリウ
スの電撃による攻撃まで襲ってくる。
もちろんそれを避けたり防ぐ手立てはなく、大人しく体力を１だけ
残して黒焦げになる。

三人は明らかにオーバーキルの攻撃を放っているが、それを喰らっ
ても玖楼は死なない。

様子は明らかに瀕死だがそれでも死なない。

玖楼と付き合って行く中で、どこことなく加減を覚えたのだ。

……といっても加減一つ間違えれば死んでしまうので、『手加減の
指輪』と言う装備を付け、

どんな攻撃をしても絶対体力が１だけ残ると言う状態にしてから、
容赦なく攻撃するのが大半である。

でなければ１０回は軽く死んでいる。

ため息を吐くようなそぶりを取りながらリッチがステッキを握りな

おす。

「いいかね？技を使えるのと使えないのでは戦闘による火力がまったく違うのだよ？

治療するときだって傷薬を使って治すのとそのまま放置して自然に治す、

それぐらいの違いさ。どんなに剣の技術を鍛えてもそれは剣の技術であり、

決して『技』として使える技術ではない」

「どっちも同じに見えるけどなあ」

「それは初心者にありがちな意見ですよ」

事実初心者なのだが、とは言わない。流石にふざけすぎたと反省しているため大人しく話に耳を傾ける。

「槍を効率的に振るうことと、槍をふるって斬撃を飛ばすと言うのは大きな違いですよね？

槍を無駄になく振るう事が決して槍から斬撃を飛ばすと言う行為についてプラスになると言うわけではありません。

だからいくら武器の腕前を鍛えても武器の扱いがうまくなっても、それはそれだけ。別に武器で与える威力が飛躍的に上昇するわけじゃないんですよ。

……と言っても剣技を教えられるような人はいないんですけどね」

そう、何かをしようとしても結局はそこだ。

真に効率を求めるなら剣をたしなむものに教えを請うのが一番なのだろうが、

何故か冥き途から出させてもらえない玖楼では教えてもらえる人材

と言つものがない。

リッチは魔術と死霊術。

リタは槍術。

ナベリウスは多くの魔法を習得している。

が、初心者扱いやすいと言う理由で始めた剣では師になれる相手が居ないのだ。

こうなったら剣を捨てて槍を取りリタに教えてもらつと言つのも手だが……。

「そんなときこそギュンギュスカー商会！あなたの悩みをお金で解決しましょう！」

「おわっ?!」

先ほど転移で消えたはずのメイドが再びすぐ傍に立っていた。ナベリウスとリッチは基本的に、感情や驚きと言った表情が見にくいが、少なくともリタは驚いたようで、

玖楼はいきなりの接近に驚いたのは自分だけではないようだ。

そんな周囲を他所に、メイドの手の中には古めかしい本が一冊握られていた。

それを見せびらかしながらグイグイつと玖楼のほうへと寄ってゆく。それに対する玖楼の言は一つ。

「どっから沸いた」

「沸いたとはヒドイですねえ。ギョングユスカー商会社員たるもの、常に商売のチャンスを逃してはいけないと社則に乗ってますよ！」

社則なら仕方がない。

「それより今クロウ様は剣術書をお探しですよね？ですよね？だつたらでーん！」

東方の剣術に関して書かれている秘伝書ですよ秘伝書！文字が読めなくて正直イラネーとか、そんな扱いをされていたものですがなんとなーく売りつけに来ましたよ！」

「色々と待てよ。オイ」

「さあさあ、そんなことを言わずにほらほら！」

メイドが強引に秘伝書と言われたボロボロ本を玖楼へと押し付ける。それを玖楼が嫌な顔をしながら受け取るとニコニコ圧力をかけてくるメイドに負け表紙を見る。

そこには日本語で、

「…………飛燕乃書？…………あ」

読めちゃった。そう公開したときには既に遅く、メイドが玖楼の腰についている全財産（雑魚退治で稼いだ）を、それをサイフごとひったくると中のお金を取り出し勘定し、玖楼の所持金の9割を懐へと収めて財布を返す。

「これで今月のノルマ達成！あ、それでは今後もギョングユスカ―商會をご贔屓に」

「もう使わねえよ！！」

消えて行くメイドの姿にそうしか叫べない、玖楼であつた。

第二話 冥き途での日々（後書き）

名前：黒川玖楼

レベル：43

称号：修行中の異邦人

主武器：パラディウム

予備1：なし

予備2：なし

防具：

ドレスシャツ（魔導皮膜処置）

ダメージジーンズ（魔導皮膜処置）

スニーカー（魔導皮膜処置）

装備：なし

戦闘スキル：

必殺・飛燕——Rank F

必殺・我流——Rank F

中型剣——Rank E

HP：1 / 260

MP：0 / 0

TP：40 / 40

FS：25 / 50

攻撃力：113

攻撃回数：1

防御力：83

防御回数：10

魔法攻撃：0

魔法防御：70

肉体速度：15

精神速度：5

攻撃属性：万能

防御属性：万能

発動スキル：

努力家I——戦闘経験地上昇

臆病——回避率上昇

乗り気でない——回避率上昇、戦意大幅低下

Rank Fなので一番最初の技すら使えない（

どんなに鍛えようが貧弱一般人がベースなので、

基本的にステータスは低めの設定です。

ついでにレベルが一気に上昇しましたけどよくRPGモノで、

レベルの高い仲間と一緒にレベル上げをするアレです。

ここからはちゃんと一人でレベルを上げるのでレベルが上がるペー
スはゆっくりになります。

今のところは。

名前：リッチ

レベル：137

称号：若き不死王

主武器：ぼろぼろのステッキ

予備1：なし

予備2：なし

防具：ぼろぼろのマント

装備：手加減の指輪

戦闘スキル：

魔術・電撃	Rank C
魔術・強化	Rank D
魔術・純粹	Rank C
魔術・火炎	Rank B
魔術・暗黒	Rank B
魔術・死霊	Rank A
杖	Rank B

HP：2590 / 2590

MP：690 / 690

TP：10 / 10

FS：50 / 100

攻撃力：246

攻撃回数：25

防御力：140

防御回数：30

魔法攻撃：510

魔法防御：210

肉体速度：25

精神速度：40

攻撃属性：万能

防御属性：不死+

発動スキル：

霊体破壊Ⅰ——敵が『霊体』属性の場合攻撃力が上昇する
 不死破壊Ⅰ——敵が『不死』属性の場合攻撃力が上昇する
 暗黒の守護者Ⅰ——防具の属性に左右されずに常に『不死+』の
 防御属性になる

手加減——攻撃時に常に発動し、相手のHPが必ず1残る

イメージとしては若干撃たれ強い骸骨……なのかな？

高速で魔方阵を描く姿から杖さばきは中々だと判断する。

ギュンギュスカー商会——ソフトウェアスキヤラの『巢作りドラゴン』より登場、

は何処にでも現れ、

ドラゴンでも人間でも、お金さえあれ

何処でも商売をする商会。従業員も『

商品』扱いだったり。

（『始まりに』に追加されました）

玖楼のステ更新と、リッチのステータスです。

まだまだリッチは百歳以下です（と言っても玖楼君の3倍以上は年が……）

お・り・が・みキャラを戦女神風に当てはめるのも結構楽しいですねw

WIKIのレベル500のステータスチャートを参考に、

こんな風能力を作ったりします。

前回抜けていた肉体速度に精神速度、そして戦意を改めて追加しました。

これでキャラが戦女神っぽくなってきましたよ！

そういえば勇者翔希がレベル19でディアブロ（車）を真つ二つにできるらしいですから、

既に玖楼君も人外への第一歩を踏み出し始めてるんだろうなあ。
玖楼ちゃんがんばって！すごくがんばって！

そして今回は前回の半分ぐらいの長さでごめんなさい。

実は第1部、2部、そして3部までは構想が完成してたりします。
で、一番苦手なのが日常描写なんですよ。イベント関係だったらス
ラストラ筆が進むのに、
修行とか遊びになったとたんに筆が進まなくなるのろいでもあるん
でしょうか。怖いです……

余談ですが、

名前：レッドスケルトン

レベル：57

称号：リツチの配下

主武器：錆びたカトラス

予備1：なし

予備2：なし

防具：なし

盾：バックラー

装備：なし

ちゃんと雑魚にも設定を考えてたり。

いない……ですか？

今回は短かったお詫びに、ちょっと冥き途の場所説明です。

> i 2 7 1 0 3 — 3 5 3 0 <

投稿する数分前にやつつけて作成。

とりあえず冥き途と言われえもパっと思い出せる方がいてもいなくても、

なんとなーくイメージしやすいような感じに、です。

ステータスもやっぱり、綺麗にGIMP2で作成したほうが皆さんは嬉しいですか？

その場合はいろいろと手の込んだステータス画面になりますが。

それでは今回は短かったです、
次回から戦女神サイド、お・り・が・みサイド共に激しく動き始めるので、

次回をお楽しみにしてて下さい。

それでは感想を心待ちにしながらもさようならさようなら。

第三話 来客（前書き）

感想を何時でもお待ちしております

第三話 来客

玖楼が異世界に流れ着いてから約半年が経過した。

その間にも玖楼はもう殆どこの世界の常識について学び、そして住人と化していた。

まだまだ小さなことで常識の違い等が見えるが、それは些細なことである。

目の前の状況と比べれば。

「セギホノセギホノアヴェスタアヴェスタ！」

ずどどん！

轟音を立てて水が爆発するように吹き飛び、宙を待った水が雨のように降り注ぐ。

ありえない姿をした生物がまるで意味のわからない言葉を継げながら、

その軟体のような体を動かし攻撃してくる。

それを玖楼は……戦いもせず死者の門のある部屋の隅で体育座りしていた。

その横にはリタとナベリウス以外に普段はここに居ないもう一人の姿が見えた。

「す、すすすすごい光景ですね」

「そうね」

必要以上に噛んでいる玖楼の言葉に相槌が打たれる。

玖楼と女性の目線の先には覇気を漲らせたリッチがステッキをバトンの様に回しながら魔法を撃つ光景、

人型軟体生物が玖楼の目では追いつけない速さで攻撃している姿、そしてリッチを応援するリタとナベリウスの姿が座る二人の横ある。

リッチも軟体人間に負けず劣らず、あらゆる場所から大量のアンデッドを召還し、

それを盾にしたり自爆特攻させたりと、様々な方法で攻撃する。

「フハハハハハ！此処へ流れ着いて数十年！私と同格のものと出会えるとはな！

この出会いに感謝するぞアラン・マクレガー！さあ、全力を持ってかかってくるが良い！」

「セギホノセギホノアヴェスタアヴェスタアアアアアアア！！！！！！！！」

ずどーん。

がががーん。

ずしーん。

ばばーん。

どかーん。

ラメ入りペ。シマンは傷つくような姿を見せず、

リッチは命のストック（配下）が万単位でいるため死なない。

今度はやや落ち着いた感じに、

「え、えつと……すごい光景っすね！」

「そうね」

激しくテンパってる玖楼にはそれしか言えず、
未だ中々状況が飲み込めない赤髪の女性もそれしか返事ができなかった。

事の発端は時間をさかのぼり、約数日前の話である。

●

「本当に行くのかい？やめておいた方がいいと思うけど……。結構距離があるし女性には辛いと思うよ？」

「ありがとう。でも、見れるものはすべて見て回りたいから。それに、いざとなれば飛翔の首飾りで脱出できるし、ね」

飛翔の首飾りとは多少値が張るも、冒険者の間では重宝されている道具である。

見た目は宝石の付いた首飾りではあるが、それでも使用すれば即座にその場から使用者を飛ばし、
ダンジョンの中にいる場合は即座にダンジョンから脱出させてくれる優れものだ。

平原や街道の場合は最後に立ち寄った村まで返してくれる高性能なものもある。

「そうかい……それでは無事をバリハルト様にお祈りしてるよ」

「ありがとう」

長い、赤い髪的女性が両腕を天に向けて、体を伸ばしながら宿から出てくる。

青緑と白のツートーンに統一された服を着用しながら頭をすっぱり隠す帽子を被り、

その姿はまさに美女と呼べる美貌の持ち主である。

優しい風が彼女の髪を軽く揺らし、燃えるように赤い髪をさらに魅せる。

「うん、分かってる。無茶はしないわ」

彼女の前には誰もいないが、それでも彼女には何かが見えるかのよう
に虚空へと向けて声を投げかける。

返事の変わりに新たに風が彼女の髪を揺らす。両手を下げて歩き出
そうとすると、

彼女の姿を見つけたのか村の子供達が彼女へと寄ってくる。

ここ数日の滞在で彼女が遊び相手をしたり話し相手になったりした、
小さな村の少ない子供達だ。

「おねーちゃん！」

大声を上げながら少年を先頭に数人の子供がやってくる。

それを笑みを浮かべながら迎えると膝を折り目線を合わせるように
する。

駆けつけた子供達が、彼女が腰にポーチをつけてたりと普段は見な
い装備をつけているのを見て、

「おねーちゃん……もう村を出てっちゃうの？」

リーダー格の少年が声を漏らすと不安が伝染したのか周りの居る数人の子供達も、不安そうな顔で彼女を見上げる。だがそれでも彼女は笑みを崩さず片手を少年の頭に乗せ、優しく硬めの髪をなでる。

「大丈夫。少し遠出をするだけでまたすぐに帰ってくるから。少なくとも今月にはね」

「本当に？」

「ええ、本当よ」

我が子を見るような慈母の笑みを浮かばせ、子供達を安心させると立ち上がり、

手を振りながらも村の外へと目指して歩き始める。

一度だけ止まり、後ろへと振り返り、

「いい子にしてるのよ？」

「またねサティアおねーちゃん！」

赤髪の子、サティアは北華鏡の集落をでた。

●

冥途と言う場所は基本的には知られてはいない。

それもその存在自体はとても神聖ではあるが内部が危険であり、死者に介入することはどの神々をもが止めているからだ。

死者は死んでいくべきであるとは自明の理であり、必要以上の干渉を受けないように極僅かな書物と存在を除いてその存在が隠蔽、もしくは忘れ去られているのは当たり前である。

だが、例外とは何時の世にも存在する。

北華鏡の集落がその例外とも言える。

口伝としてだが昔から場所自体は伝わっているが同時に絶対近寄ってはいけない等と、

その危険性を訴える内容でもあった。旅を続け多くの知識を取り込んできたサティアにとって口伝の内容は十分すぎるヒントであった。

世界を見回り、人の世の流れを見る。

そのために多くのモノを見てきた彼女だが、それでもまだ冥き途へ行った事はなかった。

冥き途とは死者の通り道、来世への入り口。

冥き途を通り死者の門をくぐって次の世へと移り行く前に確実に死者たちは冥き途を通る。

この世界の死者たちは確実にそこに集まるのだ。

故に、サティアは見たかったのだ。

今の世の、死んだ人たちの心を。

サティアは聞きたかったのだ。

今の世の、死んだ人たちの声を。

それが可能であるかどうかは別の問題として冥き途自体は大いに好奇心と、

そして知識欲をくすぐる場所である。

そこに門番として存在するソロモンの魔神も悠久のときを生きているはず。

ならば多くの事を知っているはず。少し話をしてみるのも悪くはない。そういう考えだ。

だがその考えは入り口に立って少しなりを潜めた。

「……これは……」

北華鏡の集落のから歩いて数日、森の中にあつた旧時代の転送装置。その上に乗って外部の者用の入り口から冥き途へと入ると、まず感じられたのは思念だった。

何十何百何千と言う人の思いと想いが集まり辺りに渦巻いていた。それだけではなく、気配を感じてみれば、

「不死者まで居るのね……」

生きることを諦め切れなかったもの、外法に手を染めたもの。

そういう者が辿る末路、不死者。

その死に塗れた不浄の気配が入り口からはヒシヒシと感じられた。

サティアの頬を新しい、此处にある空気とはまた別の風がなでる。

「大丈夫よ。この程度なら平気」

村でやっていたように虚空へとそう言っていると風は弱まるが、それでも心配そうに纏わり付く。

自分の『同行者』の過保護っぷりに若干呆れを覚えるが、悪いことだとは思わないために、

それを煩わしくは思わない。足を進める。

足音の反響から広い空間で出来ているという事は分かる。

なるべく足音を立てないように歩きながら暗い洞窟のような空間の中を進んでゆく。

転送装置の少し先を進んだ先に水の流れを見つける。若干ボロボロだが、橋もその上にはかかっている。

どこまでも透き通るような透明な川。底の白い砂まで見えてくるほどに透明だが、

北華鏡の集落にあった川のように決して飲もうとは思えない。どこか寒気を覚える川である。

「ん……」

橋を涉ろうと橋の上に乗ると、古くはあるがどこか真新しい修繕箇所が見える。

特に中央に関しては材質が新しくなっている。劣化防止の魔術も使用されている。

と言うことは極最近誰かが此処へ来て修復したと言うことだ。

「これは管理人がしたのかしら？」

そう口に出してみるがその言葉に現実味はない。

聞いた話だが冥き途の門番は基本的に不干渉で興味を持たない、自己完結タイプの人らしい。そのため、修理なんて面倒なことはいらないだろう。

と言うことは門番以外にも誰かが居る、と言うわけだ。

橋を涉り切り、再び砂地のような大地に足を下ろす。

砂地を歩くたびに足元で砂が擦れジャリジャリ音を鳴らす。橋を涉ってからサティアは違うことを心配している。

……なんにもこない？

そう、何もこないことだった。

大人しく死ぬことを選ばず体は腐ったまま、もしくは魂だけになっても抗う者、

不死者としてはいかいしてたりしてもおかしくない気配であり、普段はそうであるはずなのだ。

生きていることに嫉妬する彼らはサティアの気配を感じればすぐさまやってくるはずだが、

なのに此处へ来て以来気配は感じれども、何もやってこない。

そのことを怪訝に思いながらも武器である『戦意喪失の投石紐』を手取る。

投石紐とは相手に傷をつけることが目的ではなく、戦意を強制的に奪う武器である。

どんな相手でも戦意だけは鍛えることができないため、肉体が強い相手でも良く効き、

相手を撤退に追いやることのできる優れた武器である。

その代わりに、一部の存在にはまったく言っていないほど通用しな

い武器でもある。

だが、殺生を嫌うサティアとしては一番頼りになる武器である。

その武器を握りながら歩き進むと暗闇の中に階段が見えてくる。

見たところ上と下へと行くことができるが、死者の門は地中不覚に存在すると聞いた。

そのために迷わず下へと、階段を下り始める。

……が、それは長く続かなかった。

タタタタタ……

足音がする。それも歩くようではなく、階段を駆け上がるような速度で。

今まで現れなかったのが今かと思い、投石紐を構える。だが、それは期待していたものではなく、

必死の形相で階段を駆け上がる人間の男だった。

黒髪黒目の青年で、服装は見たこともないようなものを着ている。

髪の毛を伸ばしているのか、目にかかる程度に髪が伸びて癖毛が小さく跳ねている。

だがその青年は、階段を駆け上がりながら此方を見つけた瞬間必死に手を動かし、

此処から立ち去るように示している。

邪悪な気配も不浄の気配もない、魔力すら感じられない普通の人間。

此処にいるのは到底正気とは思えないが、

それでも此処にいると言うことはそれなりの理由があるのだろう。

話の通ずる相手だと思い声をかけてみようとするが、

「あの、すみま」○×Kゝ!」……?」

初めて聞く言語で言葉を遮られた。遮られたこと事態に嫌悪感を感じるほど人が小さいつもりはないが、

それでも物凄く焦っているところを見るとどこか不安に思える。体を止めているその一瞬にも青年は近寄ってくる。

焦ったような、必死な表情を浮かべ此方へと走ってくる。

「○!×!K!!!」

やはり、言葉が分からない。聴いたことのない言葉だが、なんとなくニュアンスから分かる。

「逃……げろ?」

ブンブンと頭が取れそうなほどの勢いで青年が頭を振るう。それを確認した瞬間、

ずがーん!

冥き途全体に響くような爆発音が鳴り響く。

それだけではなく、青年が駆け上がる階段、その後方から炎の波が吹き上がる。

さすがのサティアも何から逃げるべきかこの時点で理解できた。

青年の少し後ろで炎の進撃は止まり、なりを潜める。

その事に安堵した表情を見せた青年が足を止めようとするが、冥き途の底から声が響く。

「デスサイズ」

「キャツ！」

次の瞬間、青年が上からサティアを押し倒していた。

●

ウン。

そんな音だけを残して先ほどまでサティアの胸があつた位置を黒い線が抜けた。

階段には鋭利な刃物で割断されたような痕が残り、明らかにその場に居たら大事になった、それを表す痕だけが残されていた。

「あ、危ねえ……！」

リッチはテンションが上がると偶に周りが見えなくなるときがある。それをどうにかして欲しいと思う。

「ん……助かった……の？」

下敷きになっている女性から声が漏れる。

冥き途に来る外の人間で始めての人間だが、リッチの使った通訳の

魔法はまだ効いている。

なんとか彼女の言葉が分かる。体を起き上がらせようと指と腕に力を込め、

自分の手が何処にあるかを見る。

がっちり女性の胸を鷲掴みしてた。

「ぎゃあああ！すすすすすいません！ごごごご、ごめんなさい！ごめんなさい！ごめんなさい！」

へたれ。

童貞。

過去に作った彼女の数0。

玖楼にはいろんな意味で刺激が強すぎた。

バックへ飛びながら土下座の体勢のまま土下座へと移行……まさに無駄のない謝罪の完璧な形。

しかし決して頭は上に上げず、ひたすら許しを請うように「ごめんなさいを言い続ける。

「え、あの……気にしてないわよ？えーと……どうしよう。話し通じてるのかしら……」

……もしかして言葉通じてない？

そこはとなく会話がなっていないことをリアクションから認識する。そういえばリッチのまあ方は自分が聞こえる分を翻訳するだけだと言っていた。

つまりは日本語では会話が通じない、と。

そこで軽くだが習ったこっちの言葉を話してみる。

「えっと、す、すみません……ごめんなさい？」

なぜか疑問符が付いているのは置いておいて、今度はちゃんと言葉が通じたのか手を振ってを見せて、

「いえ、危ないことを助けてくれたから大丈夫よ」

村で子供達に見せていたような、同じような笑みを玖楼へと向ける。

ここであえて言い直そう。

へたれ。

童貞。

過去に作った彼女の数0。

一発で魅せられてしまった。

玖楼が、自分の顔が急に赤く、熱くなっていくのを自覚する。いわゆる一目惚れ状態だと気づいても何とかできず、

視線を即座にサティアから逸らす。その行動に心配したのか、

「あの……なにか不快なことでもしましたか？」

即座に視線をサティアへと戻す。頭を超高速でブンブン振り、

「ち、違います！違いますよ！何でもありません！ええ、何でもありません！」

決して恥ずかしくて顔が見れないとかそんなことじゃありませんからね！違いますからね！」

自分で暴露してしまうほどには焦っていた。

そんな違う意味での必死な玖楼の形相を見ると、不意にサティアが小さくくすくすと笑い出す。

玖楼の様が面白かったのだろう。その行動に玖楼が困惑しですがサティアが手を前に出し、

「ごめんなさい。焦ってる姿が面白くてね。始めまして、私はサティアと言っの」

「あ、はは、はい！く、黒川玖楼って言います！知り合いにはクロウとかクロって呼ばれてます！
さ、さささ、サティアさん！」

すばあんっ！

「流石にどもりすぎです。しかも私と対応が違いすぎて若干ムカつきます」

ハリセン装備リタが現れる。

「……リタっつあん無防備すぎるし？、初登場がアレだしっつーか今にでもベッドにやってくるし、
そしてなによりも一番にやっぱり胸が残ね——」

すばあんすばあんっ！すばばばばばあんっ！

「何か言いましたか」

「イエ。ナニモイツテナイデス。リタサンハスバラシイデス」

「それだけ素直ならいいです。ナベリウスが結界を張ったからもう降りてきて大丈夫ですよ。

少なくとも被害はこっちまで来ないでしょう」

そう言つて現れたときのようにリタが階段を抜けるように透過して下層へと戻つてゆく。

唐突の登場にサティアは驚いてたのか、驚愕の表情を浮かべてた。

「今のは……」

「あ、今ですか？ここの門番の片割れでリタなんとかつてやつですよ。

何か既に死んでるらしいですけどそこらの人間よりは元気そうですね」

「いえ、そういうことじゃなくて……」

「あ、それでは下へ向かいましょうか。家が無事かどうかは分かりませんが、お茶ぐらいは出しますよ」

「い、家？」

「あ、自分ここに住んでるんですよ」

たぶんだが、これこそがサティアが一番驚愕した事なのだろう。

●

そして冒頭に戻る。

最下層でハッスルする骸骨と暴走する軟体生物を眺める四人。
砂地の上に座りながらもその手の中には紅茶の入ったカップが握られている。

それを飲んでやっと落ち着いたのか、サティアが口を開く。

「……ここ、冥き途よね？」

サティアの知っている冥き途は静かで死者を除けば門番しか存在せず、

決して槍を持った幽霊が片手にハリセンを構えてたり、

高笑いする骸骨が魔法を乱射しながらラメ入りペ。シマンとハイレベルな戦いを見せる、

そんな力オスな場所ではない。

ついでに言えば人間が普通に平気に暮らしていることにも疑問が思える。

人間なら良くて発狂、最悪、喰われるかもしれない環境なのに、横に座っている青年は平気そうに存在するどころか家さえ建てて暮らしている。あまりに非常識だ。

「ティルワンの闇界よ！」

「オアアアアアアアアアアアアアア！オア！オア！オアアアアアアア

アアアア！！！！」

非常識だ。

混乱から脱するためにも、横の青年に、クロウに声をかけてみる。
発音的に東方の訛が聞こえたから、たぶん東方の出身者なのだろう。

「クロウ？ちよつといいかしら」

「は、はい！ななな、なんでせうかサティアさん！」

「私のことはさん付けでなくともいいわよ？敬語も止めてくれると嬉しいんだけど……」

「ははは、はい！」

青年に対して物凄く可哀想なものを見るような視線が青年の横の二人、

リタ・セミフとナベリウス……冥途の門番の二人から注がれるが、サティアはその意味を理解できず、頭に疑問符を浮かべながらきつと玖楼が緊張しているのを呆れていると、解釈する。

「……………クロウ……………がんばれ」

「おお……………ナベリウスが応援しましたよ！」

「相手は分かってもいない……………流石に……………哀れ」

「無駄に緊張のし過ぎですね」

その言葉に玖楼が横へと振り返りギロリと目を光らす、
リタとナベリウスは我存ぜぬと視線を思いつきり逸らしリッチの戦いに集中している振りをする。

「クロウさん？」

「あ、自分も玖楼でいいよ」

「あ、はい」

先ほどの二人との会話の成果が、若干緊張がほぐれた様子の玖楼が今度はまともに話す。

今度こそちゃんとコミュニケーションが取れると思い、

「ここって冥き途よね？」

「そうだよ。ここ以外にあるのならまた話は別なのかも知れないんだろうけど」

つまり、自分の探していた場所は此处であり、

入り口で感じていたいろいろなものは一体なんだっただろうとさえ感じてくるが、

暗くなるよりは明るくあったほうがまだ言いと思ひ話を続ける。

「クロウはここに住んでいるの？」

「ああ。約半年前に此处に流れ着いてね。気がついたら部屋の物と一緒に此处にいたんだ。

ナベリウスによれば元の世界に通じる『門』が見つからないからこ

ここに住めだつて。

リッチ（ステッキを振り回しながら炎を振りまく骸骨を指差す）が魔法で家とか作ってくれた」

「異世界人？」

そこで玖楼の着ている見たこともない服装にやっと見当が付く。

彼が着ている服はおそらく彼の世界のものなのだろう。

そう思うと彼の世界に興味を持ち始める。

「ちなみにあそこで戦っているアラン・マクレガー少尉も異世界人だつて」

「彼も？」

「そう。今朝、死者を通すために死者の門を開けたら水に流されながら向こう側から流れ着いたんだ。

最初のうちは混乱してたけどしばらくすると落ち着いてね。これがまた、いい人（？）でさ、

国のために人体改造を受けた軍人だつて分かって、楽しく談笑してたんだけど……」

「してただけど？」

「軽く頭を叩いたら奇声を上げながら暴れ始めた」

「……」

死者の門前の戦いを見る。

ナベリウスが張ったとされる結界の中でリッチがマシンガンの如く

魔法を乱射してゆく中、

銀色の体、アラン・マクレガーと呼ばれる機械化兵が両腕を見えない速度で振るい魔法を殴ると同時に、体に絡み付く亡者の波を薙ぎ払う。アレだけの戦闘力を見て余裕ということは止める方法がなんらかあるのだろう。

だから気にしないことにする。気にしてはいけない。

ともかく、落ち着くまでアレは放置するとして、

「クロウ」

「なんだい？」

「もっと、貴方のこと知りたいなあ」

「なっ／＼／」

「（あれ、脈あり？）」

「（……………それはそれで、……………つまらない）」

もつと青年について知りたいと思った。

異世界と言うのはどんな世界なのか。どんな風に人は暮らしているのか。どんなことをしているのか。

毎朝、朝食にはどんなものを食べて、晩御飯には何を食べるのか。そこには此処のようにいろんな種類の種族が住んでいるのか。どういう神々が存在するのか。

短い時間だが、隣の青年が、玖楼の存在が悪いとは思わない。アイドスは見つからず世が乱れ始めるのを僅かに感じ始めるが、そ

れでもこの出会いは悪くはない。

そう思ったところでそれは始まった。

「——ならば、私も全力で答えよう……！」

今まで結界の中で一進一退の戦闘を繰り返していたリッチがステッキで高速で魔陣を描くと、完成直後にリッチのステッキに大量の炎が集まりつつ有る。

「私も玖楼の訓練相手でただ召還しているわけではない！私も魔法、実力共にちゃんと腕を磨いていたのだよ。喰らいたまえ、今できる最高の一撃を……！」

リッチのステッキに集まりだす炎は今までの使っていた魔法の比ではなく、

結界越しにその熱を感じられるほどの威力をとめている。

それに対して動きが止まったアラン・マクレガーも目のない顔でリッチを見ると、

背中を大きく逸らして天井へと向けて叫びだす。

「リッチイイイイイイイイイイイイ！！セギホノセギホノアヴェスタアヴェスタ！」

言語は完全に理解不能だがやる気だけは漲っている事が分かる。その様子を見てナベリウスが言葉をポツリと漏らす。

「無理」

「ひょ？」

「結果………得意じゃないから……無理」

「おいしいいいい？！俺ならともかく今はサティアまでいるんだぞ？！」

「死んだらお仲間入りですね」

「お仲間以前に即昇天だよ！」

「あ、魔剣がないから定着できないんですね」

「そういう問題じゃねえよ！」

右往左往する玖楼に対してサティアが手を握る。その行動に玖楼が驚き、顔を赤くする。

それを気にせずサティアが胸元の首飾りを取り出す。

「安心して下さい。この飛翔の首飾りを使えばダンジョンならば何処からでも脱出できますから」

「え、あ、あ、はい。そんじゃ、俺とサティアで先に「駄目」……え？」

今までにない真剣な声でナベリウスが玖楼の言葉をさえぎる。

同時に射抜くような視線をサティアへと向けて、まるで余計なことをするなとばかりの気配をだす。

ナベリウスが今まで見せた事のない剣呑な気配に玖楼も驚きが隠せない。

「いや、ナベリウス？俺達ちよいと避難を「クロウはでちゃ駄目」……」

ピシリと、譲らない強さでそれをナベリウスが言い放つ。

「ごめんなさいねクロウ。悪いけどクロウは此処から出せないの」

「……いやまあ、前々から外に出してもらえないからなんか理由があるんだと思うけど、それでも今回は……」

ばつが悪そうな顔をして玖楼が話す。サティアもナベリウスの気配に押され、飛翔の首飾りから手を放している。

玖楼の姿を見るに、ナベリウスが今までこんな態度をとったことがなくて驚いているのは分かるが、

それでも何故此处まで外に出すのを嫌がるかを分らない。

「でも俺死にたくな「止めるから大丈夫」……そっすか」

ナベリウスが小さな体を立たせると、広間の隅で座っていた魔獣がやってきてナベリウスがその背に乗る。

何処からともなくも小型の杖を取り出すとそれをリッチとアランに向け、

「二人とも……そろそろ……仕事の邪魔」

そいつた後に警告なく魔法を放った。

「滅びの暗礁壁」

リッチとアランのいた存在そのものが暗闇に包み込まれて、うねる。大量の魔力と共に発せられた魔法が容赦なくアランとリッチの体を襲うが、

それを気にせずにナベリウスが追撃をかける。

「審判の轟雷、メルカーナの轟炎、死愛の魔槍」

どれもAランク以上の超高等魔法を詠唱もそこその時間で連続を放つ姿には驚愕を隠せなかった。

両者が戦っていたとき張られた決壊は既に一撃目で破壊されており、こちら側に被害が来ないように計算されて放たれているものでもあった。

何度も何度も軍隊を一つ滅ぼすには余すほどの大魔法を連続で放ち、まるで塵も残さないように殲滅魔法を放つ。

「さて！待つんだナベリウス！もうリッチもアランもライフは0だ明らかにオーバーキルだ！」

玖楼が魔法の轟音に負けぬように必死にナベリウスに声を投げかけるが、

ナベリウスは振り返りながら親指を立てながら、

「手加減の……………指輪してるから……………大丈夫。……………たぶん。ティルワンの死磔」

視線をリッチとアランの方向へと戻す。そしてトドメとばかりにさらに魔法を放つ。

闇が辺りの水を根こそぎ消滅させながら消えるとその場に残ったのは地面に突っ伏すリッチと、

体が漫画のように平べったくなったアランであった。

二人に動く気配はない。

それを確認したリタが額の汗を拭う様な仕草を取り、

「いい……………仕事した」

「明らかにやりすぎだよ！」

納得せざるを得なかった。

●

リッチとアランを潰し終わってからしばらくしてサティアはすぐに帰ってしまった。

冥き途には時計がないから分からないが時刻は既に夜に入るところであり、

サティアも今日一日で全て見たり聞いたりできるとは思ってたなかったとの言。

冥き途に一番近い『北華鏡の集落』と言う村をしばらくは拠点にしているからまた来るとの話。

そう、また逢えるのだ。

うん。また逢えるんだ……………。

「青春だなあ……………いや、これも若さか……………羨ましいものだ」

「ジジクサイよ少尉……」

ついでに冥き途に住み着く人外もさらに一人増えた。もちろんアラン・マクレガー少尉。

行き場所はないので結局は玖楼と一緒に冥き途へ住み着くことに決定した。

実はあの攻撃を喰らっても正気に戻らなかったアランだが、玖楼の『機械は叩けば直る』発言でリタが槍でアランを串刺しにして動きを止めているうちに、ナベリウスがひたすらアランの頭を蹴り続けることで直ってしまった。

「はぁ……サティア……」

そして玖楼はどツボにはまるくらいにサティアにべた惚れだった。

「若さ故か……」

「私が妻と初めて出逢った頃も感じだった。あれは何時だったか……」

リッチもトリップ突入。

それをアランは若さだといいながら、リタとナベリウスが呆れる。

冥き途での生活は続く。物語に新たな役者を加え物語は続く。

舞台の上に現れる役者もいれば一時的にいなくなる役者もいる。

玖楼の物語は時がつれるにして段々とその規模を大きなものとして役者を増やしてゆく。

「つぶつぶ。くすくす。みーつけた」

どの役者がLOWかCHAOS、どちらかに傾いてようが、それでも『玖楼』と言う名の物語は続いて行き、段々と規模を大きくしてゆくのだった。

第三話 来客（後書き）

> i 2 7 3 7 9 — 3 5 3 0 <

名前：サティア・セイルーン

レベル：59

称号：放浪の探求者

主武器：戦意喪失の投石紐

予備1：なし

予備2：なし

防具：麻の衣服

装備：なし

戦闘スキル：

魔術・戦意 — Rank A

魔術・強化 — Rank C

魔術・治癒 — Rank A

魔術・召還 — Rank B

HP：380 / 420

MP：120 / 120

TP：50 / 50

FS：40 / 80

攻撃力：73

攻撃回数：1

防御力：53

防御回数：10

魔法攻撃：114

魔法防御：71

肉体速度：10

精神速度：15

攻撃属性：万能
防御属性：万能

発動スキル：

MP再生？——戦闘時は一定フレーム毎に、移動時は一定歩数毎にMPが回復する。

賢者の魔力？——消費MPが10%軽減。習得レベルで軽減量が高くなる。

神力遮断？——神力の力が遮られ、能力全般が25%低下。

たぶんスキルが最大のネタバレなんじゃないかな。

これと呼んでいる人たちが戦女神ZEROのプレイヤーだと思いますから、

隠す必要もなさそうですね。熟練度が無駄に高いのも仕様です。

名前：アラン・マクレガー

レベル：149

称号：異世界の機械化兵

主武器：なし

予備1：なし

予備2：なし

防具：コア

装備：なし

戦闘スキル：

必殺・連撃——Rank A

HP：3170 / 3170
MP：100 / 100
TP：350 / 350
FS：50 / 100
攻撃力：390
攻撃回数：30
防御力：213
防御回数：15
魔法攻撃：40
魔法防御：154
肉体速度：20
精神速度：9
攻撃属性：万能
防御属性：万能

発動スキル：

HP再生？——戦闘時は一定フレーム毎に、移動時は一定歩数毎にHPが回復する。

俊足転移？——戦闘開始時に確率で発動。『肉速5』『精速5』が付加される。

壊れやすい——不安定なせいか軽い衝撃で偶に暴走を始める。

自分としては紙だが超再生キャラってイメージです。
防御はなくてもその分回復すればいいって感じです。

もうVERTICAのレベル500制限を無視して最終的には天元突破する予定ですがね（

オリジナルスキルは気にしないでください（

> i 2 7 3 8 3 — 3 5 3 0 <

名前：ナベリウス

レベル：4 3 9

称号：刹那の冥門侯

主武器：クアルディニア

予備1：なし

予備2：なし

防具： 冥界の戦衣

装備：手加減の指輪

戦闘スキル：

魔術・雷撃 — R a n k S

魔術・火炎 — R a n k S

魔術・暗黒 — R a n k M

H P : 4 1 1 0 / 4 1 1 0

M P : 1 8 2 0 / 1 8 2 0

T P : 1 0 0 / 1 0 0

F S : 5 0 / 1 0 0

攻撃力：7 5 3

攻撃回数：7 4

防御力：5 5 1

防御回数：8 8

魔法攻撃：1 4 7 4

魔法防御：8 9 6

肉体速度：5 9

精神速度：8 2

攻撃属性：冷却
防御属性：魔神

発動スキル：

MP再生？——戦闘時は一定フレーム毎に、移動時は一定歩数毎にMPが回復する。

賢者の魔力？——消費MPが30%軽減。習得レベルで軽減量が高くなる。

オーバーキル——攻撃時に常に発動し、ダメージMAX桁が一桁上昇。

リタが大好き——戦闘メンバーに『リタ』がいる場合、攻撃力と防御力が10%上昇する。

北華鏡の集落：戦女神VERITAで冥き途が一番近い村。冥き途へ行く前に2個ダンジョンがあるが、

それはご都合主義で消え去りました。

アラン・マクレガー少尉：お・り・が・みの天側の敵でリッチの親友。異世界から地球に流れ着いた者で、

通称ラメ入りペ。シマンとも呼ばれることがある。全身に65536個のコアがあり、

そのコアを全て同時に破壊しなければマイクロ秒で互いに保管しあうコアの再生を超えず、

破壊することはできないという鬼畜スペック。

デスサイズ：お・り・が・み最終巻でリッチが使用した魔法の一つ

セギホノセギホノアヴェスタヴェスタ：壊れたぺ。シマンがよく言う言葉。意味不明

使用魔法スペックリスト

ランク	名称	効果	消費	属性
B	ティルワンの闇界	魔法攻撃+2500、魔法威力11、		
束縛2	MP60	暗黒		
S	滅びの暗礁壁	魔法攻撃+10000、魔法威力50、強		
酸4	MP95	暗黒2		
S	審判の轟雷	魔法攻撃+9500、魔法威力40、命中+		
30、麻痺3	MP130	電撃2		
A	メルカーナの轟炎	魔法攻撃+7000、魔法威力30、		
命中+10	MP75	火炎1		

そんなわけでぺ。シマンとサティアさん登場の回でした。

ついでに最後の最後でかなり不吉な発言が聞こえましたが、この章で一番のキーパーソンじゃないかと。

というか正体バレバレですよ。

もうちょい第1章の、戦女神パートが進みます。いや、次回はお・り・が・みサイドかな？

とにかく一番働いて欲しくない人が動き出します。

そういうわけで、玖楼の物語も動き始めます。

そんなわけで次回をお待ち下さい。それでhそれではー。

第四話 友達とは（前書き）

あとがきにてアンケートがありますのでご協力いただけたら幸いです。

第四話 友達とは

唐突に、そこに彼女は現れた。

姿は大体十代後半、白いローブに全身をすっぽり隠しながらもフー
ドの下から長い、

白髪を見せる美女と言っても差し支えない美貌の持ち主。

雪のように白い肌がローブの隙間から伺えるがただ一つ、首もとの
カウベルのみが黄色と言う、

違う色がアクセントとして存在していた。

まるで神話から抜き出されたような美しさを持つ女が、いきなり現
れた。

それだけで驚きであったが、何より驚かされたのは彼女の雰囲気だ
った。

カリスマとでも言うのか、頭を下げてひれ伏したくなる様なオーラ
を持っていた彼女だが、

自分の中の何かが、彼女だけには『流されて』はいけないと、全力
で叫んでいた。

場所は冥き途の最下層、死者の門がある広間から一つ上の階層、
底の見えない湖と砂地がある場所。そこで悪霊となった死者の魂を
滅しながら鍛えている中、

白いローブの『天使』は現れた。

目を閉じたまま剣を構えているこちらを見ると、ニコリと笑みを浮
かべて口を開く。

「こんにちは」

「……こ、こんにちわ」

あまりに普通の挨拶に若干毒気を抜かれる。今まで冥き途であった生き物と言えばロリ門番、

伝説系魔獣、貧乳幽霊美少女、紳士系骸骨、守銭奴メイド、ラメ入りペ。シマンと超最高美少女（俺の）女神。

非常に軽く言えばまともなのが一人もない。最後のを抜いて。

どのメンバーとの出会いも決してまともと言えない中、突如現れていった言葉が『こんにちわ』だった。

それは毒気も抜かれるわ、俺。

戦闘を続けていたために持ち上げていた剣の切っ先を下げる。

否、下げてしまった。今、確実に流されかけていた。警戒を引き上げると同時に剣を構えなおす。

「ふふ、そんな警戒しないでいいわよ。私は別に戦うために来たわけじゃないし、ね」

最後のね、と言う部分に若干力が入れている。だがそれでも剣の切っ先を動かさない。

なによりも目の前の存在には現実味がなさすぎる。周りにいる人外達よりも現実味がない感じがした。

あまりにも、『綺麗すぎる』と、そう表現するのがしっくり来る感じである。

そんな玖楼の内心を知ってか知らないでか、白の女はゆっくりとした足取りで少しずつ玖楼へ近寄り、

玖楼の近くにある折れた石柱に腰を下ろす。再び玖楼のほうへと目を閉じたまま顔を向けるとおもむろに口を開く。

「マリーちゃん」

「？」

「私のことはマリーちゃんとも呼んで」

「……黒川玖楼……です」

「ふふふ、無理に敬語で喋る必要なんてないわ。だって貴方敬語苦手でしょう？せっかく言葉が通じるのに他人行儀つてのもつまらないじゃない」

「……今、この女はなんていった？」

無理に敬語で喋る必要がない？違う。

敬語が苦手？違う

なぜ、言葉が通じている。

その事実には悪寒を感じる。同時に、何故自分の個人的な情報が知られているか、それすらも薄気味悪く感じる。

リッチやナベリウス等高位の存在でも自分と言語をあわせるのにはほんの少しの間だけだが言葉を聞き、

法則性や規則性、類似点などを聞いて覚える必要があった。

なのにこの女はそれら全てを無視して『日本語でいきなり喋ってき

た』のだ。

そして、一度もしゃべったことのない事まで知られている。

異常と言う状態ではない。相手に対する評価が『警戒すべき対象』から、『底の知れない化け物』へと変わった。

「ヒドイわねえ、こんな美女をとって化け物なんて言うなんて。

こう見えて私はちゃんとした天使よ。聖四天と言う天使の中でもかなーり偉い天使なのよ？」

「ッ！」

「安心して、『見る』つもりはないから。あまりに見すぎて詰まらないし」

『読む』ではなく『見る』と言う表現と言うことは相手は内側を見れる、

一種の透視能力者なのだろう。いや、天使という存在の出鱈目さは話に聞いている。

だとしたら予知ぐらいやっててもおかしくはない。

警戒はしたまま、剣を下げる。

「で、マリーちゃんはこの超一般人である俺に何の用かな。ちなみに俺のことは玖楼ちゃんでもいいぜ」

「ふふふ、マリーちゃんに玖楼ちゃんね。ふふふ。悪くはないわね。度胸がいいというか、いや、やっぱり馬鹿と言うほうね」

「それは酷いぜ（腹黒天使）マリーちゃん」

「うふうふ。くすくす。腹黒天使だから仕方がないわよ」

「しっかり見てるじゃないか」

突然の登場に驚きはしたものの、対応する。それが自分のスタイルだと言い聞かせて。

どんな状況も受け入れて対応する。流されないで流れに乗る。それが自分の処世術。

「くすくす。ごめんなさいね。玖楼ちゃん（の中身）があまりに面白くてね」

「いやいや、マリーちゃん（の腹黒さ）には負けますよ」

「うふうふ。くすくす」「くつくつくつく」

段々と空気が張り詰めていくのが分かる。

先に緊張感を表したのは自分だが空気を掌握しているのは確実にマリーちゃんだ。

リタ……最低でもリツチの援護が全力で欲しいところだ。相手の意図がまったく分からない上読めない。

これほどやっかいな状況は此方へ来る前に何故か朝起きたら枕が洗面所の石鹸に摩り替わっていたときぐらいのピンチだ。

あの時はガチで首が痛かった。そして髪が石鹸臭かった。

先に口を動かしたのはやはりと言っべきか、マリーちゃんだった。

「実はね玖楼ちゃん。貴方とお話がしたかっただけなのよ」

話したい。ただそれだけ。

「それだけ？」

「それだけ」

「あんな登場をして？」

「あんな登場をして」

…… ああ、なるほど。

唐突に理解する。いや、理解したような気がする。

こいつは今まで自分が考えて多様な存在じゃあない。厄介さでは依然に自分の知り合いの中ではダントツのトップだ。

だけど、こいつはそうじゃあないんだ。そう、『そういう存在』じゃあないんだ。

美しく、理性を感じさせ、その動き一つ一つに意味を感じさせ、森羅万象を支配しそうな威圧を発し、

全てを統べる様な神々しさを持ち合わせ、そしてなによりもこいつは――

剣を握っていた指の力を完全に抜き、剣を砂地に突き刺す。

その動作だけで此方に興味を持ったのかわくわくと、表情が簡単に見て取れる。

たっぷりタメを作りマリーちゃんに話しかける。

「なあ、マリーちゃん」

「なあに？」

——こいつは、

「マリーちゃんさ」

——たぶん、

「友達いないだろ」

——確実に天然ッ！

次の瞬間マリーちゃんが腹を抱えながら大声を上げて砂地を叩きながら笑っていた。

はて？何かへんな事を言っただけかな、自分。

●

「は、ははは……あはははは！や、はははやめて、わ、笑い死ぬ……あはははははは！」

最初に見せていた上品さなどはすべて消し飛んでいた。
今玖楼の前にいるのは年の割には若干テンションの高い天使っぽい女性だった。

「あれえー？自分、何かおかしなことを言ったかな？」

「ど、どうしてぶふっ……天然だって決め付けるのよ！」

あれだけでもったいぶって考えたことが天然！しかも友達がいなくてか！ちゃんというわよ」

「一人？」

「……」

「おい、そっぽ向いてどうした。どうしたんだまりいちゃあーん。なあーんでそっぽむいてるのかなあ？かなあ？

あれえ？お友達いいないのかなあ？いないのかなあ？一人だけなのかなあ？」

「い、いるわよ！私の仕事をしてくれる後輩が！」

「あ、雑用とか部下とか同僚とかはなしで」

「……」

「まりいちゃあーん。目を開けてないから分からないけど確実に目が泳いでるよー。」

たぶん確実に泳いでるよー。まりいちゃあーん」

玖楼の目の前ではただただ狼狽し続けるマリーちゃんがいた。

ただ、その狼狽はすぐさま収まり、ニヤッと嫌な気配漂う笑みを浮かべると、

「……ここ数日、夜のオカズに——」「はいストップ！ストップ！悪かった！俺が悪かった！」
そう、分かればいいのよ分かれば」

マリーちゃんが上機嫌な笑みを浮かべ玖楼がゲンナリとした表情を見せる。

この状態にて、両者の立場は完全に逆転していた。玖楼が藪をつつきすぎたとも言える状況、

玖楼が右手をマリーちゃんのほうへ出す。その手が何のためのものかマリーちゃんは分からず、

ただ玖楼の差し出した手を見つめる。

「マリーちゃん友達少ないだろ？だから俺が友達になってやんよ」

「うふうふ。くすくす。本当に、本当に予想外の動きばかりね」

差し出した手をマリーちゃんがゆっくりとだが手に取り、しっかりと手を握る。

「ハジメマシテ。黒川玖楼です。異世界から漂流人なんかやってます」

「ハジメマシテ。マリーチです。『天』で聖四天なんてものをやらせてもらってます」

手を握り自己紹介し友好を結ぶ。

「あら」

「？」

同時に、

「結構掌硬いのね」

「まあ、それなりに鍛えてますから」

長い、長い腐れ縁の始まりでもあった。

●

「そうそう、あまりに楽しくて忘れるところだったわ」

握手をしてから十数分、つたないことを語り合いながら時間を平和に過ごす。

その最中に、急に本来の目的を思い出したのかマリーチが話し出す。

「私お話ついでに聞きたいことがあったのよ」

「聞きたいこと？」

「そう。聞きたいこと」

「フレンドのためならミィはなんでも聞いてやんぜ」

「あら、嬉しいことを言うわね。なら」

貴方は神様を信じられるかしら？

マリーチはそういった。神の存在を信じるのでもなく、神を信仰しているかでもなく、その存在を『信じる』ことができるかどうかをマリーチは問うた。それはつまり、

「俺が神様がいるって確信してるから聞いてるんだよな？」

「そう。私は聞きたいのよ。神が姿を現さない時代、神への信仰が極端に薄れた世界、

神なんていなくても存在していつて緩やかに滅びてゆく世界の住人そんな世界からやってきた貴方が、

この世界にやってきて神を信じられるかどうかを私は知りたいの。ねえ、貴方の『目』は神様を信じられる？」

マリーチは何かを期待するように玖楼を見る。

それは玖楼は一息置いてからすぐさまマリーチに答えを出した。

「いるんじゃない？目の前には美女な天使もいるんだし」

「あらありがとう」

「友達は二人しかいないけどな」

「……」

「悪い。悪かったから無言でにらむのは止めてくれ。」

……うんそうだな。真剣な話、やっぱり神様は『いる』と言つか信

じられると思うよ。

俺が暮らしていたところでは爺さんや婆さんを除けば俺の世代では神様を信じるやつなんてほとんどいない。

家が宗教関係でそういう教育を受けたって話なら別だろうけど、少なくとも俺は中流家系の超一般人。運動が苦手なほうの人間だったはずだ。

今ではこんな風に若干人外染みた強さを手に入れたけどそれでも神様の存在なんて信じちゃ居なかったけど、
うん。この世界で暮らしてればわかるよ」

未だ実際に『神』に出会ったわけではないと思う。

目の前の『天使』がそうであるか、魔『神』を神としてカウントしていいのか、

そういう細かいことは置いておいて、やっぱり神の存在は信じられると思う。

「だって、実際に不可能を可能にしてるじゃないか」

現代科学では実現可能でも同じプロセスを通してまったく同じことをできるかと問えば、

確実に無理と答えられるだろう。元の時代での達人や金メダリストほどの修練をしてなくても、

彼らを遥かに越える力を手に入れてすらいる。

それだけで信じる？いいや、そういうわけではない。

昔どこかで、どっかの本に書かれていた気がする。

出会いの一つ一つが奇跡で、出会いと別れには意味があるんだって。運命を信じるわけではないが、

それでも出会いには意味があると信じたい。だから、出会いに感謝

するならそれを引き合わせた者にも感謝したい。
とりあえず、それを思いつける存在が――

「神なのね？」

「人が、自分や他人以外で『何か』を埋めるときに神を頼るのは常套手段でしょう？」

神は人の心にこそ宿ると言う言葉がある歩であるし。

「昔、先生がこんなことをクラスに聞いてきたんだ」

「どんなこと？」

「『神を信じて本当に神がいなかった場合と、神を信じなくて神がいた場合、

本当に残念なのはいったいどちらなんだろう』って。クラスで話し合った結果、

結局は皆神を信じないほうにかけたんだけど、答えは逆で信じて裏切られるほうだったんだ。

なんとなーくだけでも俺にも分かるよ。こう、言葉にできるようなことじゃないけど」

玖楼の言葉を受けてマリーチが俯くように黙り込む。

折れた石柱に腰を下ろしたまま考え込むような仕草をとり何かを見つめるようにしている。

玖楼にはまったく分からないだろうが、その様子からはマリーチが何かを真摯に見つめていると言うことはわかる。

マリーチが考え出してから数秒後、閉じたままの目を再び玖楼へと向ける。

「……なるほどね。と言うことは希望はあるのかしら」

「希望？」

「ええ、未来の希望よ」

「さっきの質問と何か関係が？」

「大いに。丁度迷ってたからいい意見になったわ」

「マリーちゃんが悩む？」

「完璧な私でも、こう見えて中々に悩むことは多いのよ。
私の完璧さに比べて世界は不完全すぎるからね」

「へえ、へえ、へえー」

「……まあ、細かいことは置いて、貴方が言ったように貴方の時代には神を本当に信じるような人間は、
もう殆ど絶滅したもいい所よ。今の時代は生活の大半を信仰により得られる魔法と、
そして優れた資質を持つ王による統治、そして教会による介入によって成ってるわ」

玖楼もこの時代については大体をリッチに習っている。
生活の基本水準は玖楼が知る『中世』頃のレベルであり、この状態で停滞しているのは分かっている。
生活の中でも魔法の力が使われており、魔法は信仰する神によって授けられそれを行使するため、

神と人のつながりができている。

だが遠い未来、玖楼が生きていた様な時代では魔法は必要とされない。
燃やすのに魔力を使って疲れるのならライターで燃やしたほうが早い。

水が必要なら水を生み出さずに蛇口を捻ればすぐに水を出すことができる。

将来、科学は神の奇跡をその『利便さ』で凌駕してしまう。

科学が発達してゆき神の奇跡が、魔法が必要とされなければ信仰もそれに応じて減ってゆく。

人は信仰を捨て科学をえる。それが玖楼の『歴史』が証明してくれている事実でもある。

「私は見た、信仰を必要とせず人が住む未来を」

マリーチに影が挿す。何処となく不安で、そしてやるせない感じを表しながら、

軽く肩を振って陰の気を振り払う。マリーチの唇がかすかに動き、そうね、

その一言のみが玖楼の耳に引つかかった。

完全に吹っ切れたのか、マリーチの顔に最初にあつたような微笑が浮かぶ。

「———ありがとう玖楼ちゃん。貴方のおかげで私も決心が付いたわ」

「ほーかほーか、そりゃあよかった。全国の美女美少女美幼女の味

方だからね」

「うふうふ。くすくす。そうね。私の『友達』だものね。この程度はできて当たり前よね」

マリーチが音もなく折れた石柱から立ち上がる。もう用事は終わったと言うことだろう。

自分の部屋から流れてきたもので数少ない実用性のある代物、腕に巻いてある腕時計を見ると、

もう既に結構な時間がたっていることに気がつく。

少なくとも、普段なら既に夕飯の準備を始めている時間だ。

「こりゃケルベロスに齧られるな……」

「齧られる？」

そう言った玖楼を眺めて数秒、マリーチが笑い出す。

「あは、あはははははは！なにそれ！なにそれ、涎塗れじゃない！頭からがりがりって、

うわ、瀕死に、ぷく、あはははははは！……」

「おい？！勝手に人のトラウマで笑わないでくれないか？！」

「あはははは……ははは、はあ、本当に面白い……面白い。

ああ、帰らなくちゃいけないのが本当に惜しいぐらいね」

腹を抱えて笑っていたマリーチが目元の涙を拭くと、真っ直ぐ玖楼のほうへと向く。

「送ろうか？」

「いい、その必要ないわ。今貴方が見ている姿は展開から映し出された虚構のようなものだから」

「ならばここで胸を揉んでも問題はないのだな……！」

「普通に焼き殺すわ」

「すみませんでしたあ！」

「ふふふ、許すわ」

会話が途切れる。居心地の悪い静寂ではなく、ただ話す言葉がないだけ。

それだけの静寂。手を頭に回してがしと頭をかきマリーチのほうを見る。

変わらぬ微笑を携えたまま彼女は、

「じゃあね、玖楼ちゃん」

閉じていた目を開けた。赤い、宝石の様に輝いて血の様に赤い瞳がそこに見えた。

●

キィ——ン。

その音が響いたのは一瞬。だがその音が響くまでに感じた時間はまるで永遠だった。

気づいた時には片膝を地面に付きながら肩で息をしており、必死に肺に空気を送ろうとしていた。

「……つくう、はあ、はあ」

目の前を見れば自分より背の低い少女が浮かびながら赤い魔槍を構える姿が見える。

少女……リタからは馬鹿でも分かるほどの濃密な殺気を発しマリイチを完全に敵対視していた。

マリイチの赤い瞳は既に閉じられ目にはすることはできる。

それを玖楼は惜しいと思いつつも安堵していた。

「……マリイチ」

リタの声には怒りの色が見て取れる。

「うふうふ。くすくす。ちょっとした悪戯じゃない。怒っちゃだめじゃない。」

そう、友達に対するちょっとしたプレゼントよ。くすくす」

「御託はいいです。さっさと消えないのなら本気で殺ります」

リタの構えは少々特殊なものがあり、リタが体を構えるのと同時に、得物である魔槍がともに横で浮かぶというスタイルだ。だがその槍にはしっかりと様々な『呪い』が付いており、

たとえ相手が魔神や天使であろうと容赦なく傷つけられると、リタが前に豪語していたことを玖楼は今になって思い出した。

くすくすくすくす。

リタをこばかにするようなマリーチの笑い声が漏れ、リタの不機嫌が増す。

「くすくす、まるで弟を護るお姉さんのようね。愛されているわね、玖楼ちゃん」

「感謝しても仕切れない程度には俺も愛し返してるけどな」

軽口を叩きながら玖楼が立ち上がる。

「クロウ」

「大丈夫だよ、リタつつあん。だからリタつつあんはそのナイムネを――」

すぱんっ！

「くすくすくす。本当に仲がいいわね。それじゃ怖いお姉さんがきちゃったし、

私は帰るわねクロウちゃん。ばいばい」

リタが視線をマリーチへ戻したときには既にマリーチは闇に溶けるように消えていた。

まるで最初からそこには誰もいないように。あれがマリーチの写し身だと分かっているにも、

それでもリタは警戒を怠らない。玖楼の無事に安堵しつつも、ため息を吐く。

「……厄介な事になってしまいました」

玖楼には聞こえないほどの大きさを放たれた言葉はリタにのみ聞こえる言葉だが、

だがそれはナベリウスとリツチにも同意ができる言葉である。

事実、『天』のある程度の事は『タルタロス』を通して必要最低限の事は分かっている。

聖四天の構成員、『天』の状況……そして留意すべき存在。

厄介さで言えば、マリーチはダントツに抜きん出ていた。

視姦魔人マリーチ。過去も未来も人の心も『見る』事のできる天使。

これから玖楼に降りかかるであろう災難を考えるとため息しか出ないが、

それでも気に入った隣人のためだとリタは気合を入れなおし――

「あれ、リタつつあんなにげんなりしてんの？」

すぱんっ！

容赦ないハリセンの一撃を玖楼に叩き込んだ。

第四話 友達とは（後書き）

> i 2 7 6 1 6 — 3 5 3 0 <

名前：マリーチ

レベル：491

称号：聖四天に座する魔人

主武器：崩壊の鐘

予備1：なし

予備2：なし

防具：白のローブ

装備：なし

戦闘スキル：魔術・戦意 — Rank M

魔術・純粹 — Rank S

魔術・神聖 — Rank S

HP：4350 / 4350

MP：1690 / 1690

TP：80 / 80

FS：50 / 100

攻撃力：1183

攻撃回数：85

防御力：631

防御回数：90

魔法攻撃：1394

魔法防御：856

肉体速度：50

精神速度：80

攻撃属性：万能

防御属性：神格＋

発動スキル：

反万破壊？——敵が『反万能』属性の場合、攻撃力が上昇する。

MP再生？——戦闘時は一定フレーム毎に、移動時は一定歩数毎にMPが回復する。

オーバーキル——攻撃時に常に発動し、ダメージMAX桁が一桁上昇

お・り・が・みやミスマルカでお馴染み、ラスボスの人。

まだマリーチが若い（？）頃で、若干天然ぽかったり翼をもぎ取る前の彼女です。

今回の彼女の話は原作を読めば何か分かってくるはず。

主人公は終末のスイッチをおしたのかなあ、と。

> i 2 7 6 1 5 — 3 5 3 0 <

名前：リタ・セミフ

レベル：273

称号：滅殺の守護霊

主武器：封霊の魔槍

予備1：ハリセン

予備2：なし

防具： 漆黒の霊衣

装備：なし

戦闘スキル：必殺・一撃——Rank M

魔術・冷却——Rank A

HP：2730/2730

MP：580/5800

TP：680/680

FS：50/100

攻撃力：523

攻撃回数：85

防御力：456

防御回数：40

魔法攻撃：471

魔法防御：401

肉体速度：50

精神速度：80

攻撃属性：万能

防御属性：霊体＋

発動スキル：

即死？——攻撃時に確率で発動。敵を即死させる。

英雄殺し？——敵が『神格』属性の場合、攻撃力が上昇する。

霊体破壊？——敵が『霊体』属性の場合、攻撃力が上昇する。

不死破壊？——敵が『不死』属性の場合、攻撃力が上昇する。

反万破壊？——敵が『反万能』属性の場合、攻撃力が上昇する。

ステルス？——回避率が常に5%～25%上昇。

霊体の守護者？——防具の属性に左右されず、常に『霊体＋』の
防御属性になる。

ナベリウスが好き——戦闘メンバーに『ナベリウス』がいる場合、

攻撃力と防御力が5%上昇する

戦女神ZERO、VERITA共に登場したロリ(?)っ子コンビの片割れです。

リタが再登場すると聞いて喜んだのは自分だけじゃないはず。

物理メインでサブ魔法って感じですが、リタって基本的に火力不足なんですよね。

オーバーキル取得後は輝きますけどね。ええ、輝かせました。リタ大好きです。

しかしメインヒロインではないのであしからず(笑)

そんなわけで玖楼ちゃんマリーちゃんと話し合う回でした。

これが後に大きな騒動の発端となるわけですが、だれもまだ何が起きるかは知りません。

「マリーチがこんなところ来るかよ!」

「マリーチが人間に興味を持つかよ!」

なんて方にお説明を。

マリーチは玖楼に興味を持ったわけではなく、玖楼の『背景』に興味を持ったのです。

既に信仰がなくなり神を必要としない時代の到来を予知したマリーチが、

信仰を失った世界に再び進行をもたらすことが可能か、

それを見て確かめるために赴いたのが今回の回でした。ですがマリーチの予想を超える変人っぷりで、マリーチもそれなりの収穫がありました。たぶん。

マリーチが登場して悲劇以外の終わりが用意されてるとは思わないですけどね。

次回からはキャツキャウフフ要素かなあと。

少しずつエロゲらしくさせていきたいと……これってエロゲですよ？

うん。たぶんそうだ。エロゲですよ。

そういうわけで段々と暗雲立ち込めてくる1章ですが、ここでアンケートをとりたいと思います。

一つは戦女神恒例の武器、『ハイシエラソード』の存在です。

戦女神と言えばかせない主人公セリカの相棒ハイシエラの宿った剣ですが、

A・やっぱり戦女神クロスならだす

B・別にいらなと思う

C・それクラスの装備を出していいと思う

この三つのどれかをお選び下さい。

個人的にはAでハイシエラソードをやりたいとは思ってますけどね；

次に、

エクリアさんを出すかどうかで一番迷ってます。

正直幻燐は長すぎて国も色々ごちゃごちゃしすぎてお・り・が・みと合わせるのがハードだったりするので、

こつ、エクリアさんを仲間にすると少しお・り・が・みサイドからそれるかもしれないですけど、

A・やっぱりエクリアさんは必須

B・エクリア？誰それ？知ってる？メイドさん？

片方をお選び下さい。自分はエクリアさんだしたいです。だってメイドなもの。

色々とプロット練ったますが、

男の仲間が入ったり、別エロゲの技キャラが出てきそうになったり、少しカオスになってますが、

それでもスーッと飲み込めるような感じに仕上げたいと思っています。

それでは本日はこちら辺で。

さようならさようなら。

第五話 外の世界（前書き）

感想増えろッ！……露骨ですかね。

第五話 外の世界

ひたすら地平線の彼方まで続く道路と、それ以外には土と草と、遠くを飛ぶモンスターや木々が見える。

RPGで言えば定番の地形だが、『現代』で言えばほぼ確実に見られない光景。

モンスターは抜いたとしてもこういう光景はせいぜいドのつく田舎に行かなければ見つかりはしない。

そして、なによりも空気が美味しいと玖楼は思う。

「んー、あー！」

体を大きく伸ばしながら空を見上げる。

曇り一つない早急には燦々と太陽が輝いており大地を照らしていた。暖かい太陽の光が少し肌寒く感じるのはこの地域の癒しなのだろうとくだらないことを考えながら、

ひたすら地平の彼方へと続く道路を歩き続ける。

それなりに広い道路は、高速道路ほどの大きさではないが、トラックが十分に通ることのできる大きさでありその中央を一人で歩く気分は爽快である。

残念なことに、度のお供が居ないことが一番悔やまれることなのだがそれは仕方がない。

リッチは成仏しそう、アランは人に見せられない姿、ナベリウスとリタはお仕事、

ケルベロスは寂しそうな顔をしてたがたぶんアレは焼肉が食えない寂しさだろう。

なによりケルベロスには冥き途勢最弱でありマスコットと言う仕事

がある。あれをつれてきたらダメだ。

「さて」

歩き続けながら前を見る。

未だ、地平には目的の場所は見えないが方角も道もあっているはずだ。

あと1日、1日半も歩けば到着できるはずだと貰った地図には描かれている。

だから目的地を目指して歩く。

「グルウウウ……」

「キエエエ！」

「……」

空から玖楼の行く手を阻むように三匹の魔物が現れる。

それなりに大きい極彩色の怪鳥が2匹と、その足につかまって現れた木の形をした魔物。

合計三体。本日数度目のお客。辟易しながらも腰に挿してある剣を抜く。

「さあて、愛しのサティアに逢うためにも今日も頑張るぜ」

旅は道連れ世は情け。ただしファンタジーの場合は妨害もあり。

そして本人の思考が若干ストーリーカーよりだと言っ事を彼はまだ理解していない。

●

外出許可が出ました。

人外三人衆に拾われてから約七ヶ月、初めての外出許可を貰った。と言うのも、元々外に出してもらえなかったのは存在をマリーチに知られないためらしい。

なんでもマリーチは性質がかなり酷く、巻き込まれて無事な目にはあえないだとか、

かなり評判は悪い。そのため確実にターゲットになりえる自分を冥き途と言う、

『天』でも排除ができない強大な力を持った『タルタルロス』って古神の元に居れば、

そう簡単にはばれないと思ったそうだ。

結果ばれたけど。

自分はマリーちゃんをそこまで悪いとは思わないけどね。良くも悪くも純粹だと思った。

外に出るにあたって外は冥き途よりもさらに危険だと言われて、それで訓練と言うのは拷問が激しくなったのはここでは黙っておこう。

とりあえず、黒川玖楼19歳（冥き途で年を取りました）。この世界初めての外出ウ！テンションが超アップ中。

「剣は持った？飛翔の首飾りは？治療の水も持ちましたよね？」

「まるで心配性の姉のようだな」

「そこ、五月蠅いです」

リタの槍が閃きリッチが壁に半ば陥没する。そしてそのまま俯く。玖楼が現れた事によって一番変化が大きいのはたぶんリタだろう。ナベリウスでさえ過保護になったと、

そして同時に最近結構容赦がなくなったと言っている。

やはり、外見上は同年代に見える相手が違うのだらうと判断されているが、

「リッチ……」

「いいのだ友よ……いいのだ私はどうせ……どうせ……」

アランとリッチも友情をしっかりと確かめ合っていたり、冥き途の賑やかさに変わりはない。

アランもノリに慣れたのか最近のリッチと共に居ることが多い。言えバナベリウスとリタのコンビ、
のような存在だろう。

「えつとタオル……着替え……」

「本当に姉のようなんだが」

「まだまだ未熟で弱いから心配するのは当たり前です」

「あ、そっすか……」

四次元ポケット並みに何でも入る道具袋にドンドンものがつめ込め

られてゆき、

その中身をリタが一つ一つを確認してゆく。

ナベリウスも道具袋の中が気になるのかリタの横でそれを確かめている。

状況を説明すれば簡単である。

たった七ヶ月だが、やっと外出の許しを得た玖楼が、

一番近い村である北華鏡の集落へと数ヶ月住み込むことに決めた。

その理由は本当に簡単なものであり『外も見たい』と言う玖楼の意思からである。

……と言うのは建前であり、実際の想いは『サティアにもう一度逢いたい』である。

この1ヶ月間の間に2、3回ほど来て、その際少し喋ったが、

それでも逢うたびにまた逢いたいと思えてくる気持ちがあることを玖楼は感じていた。

しかし外へ出られない手前ただ鍛えながら待つことしかできなかったが……その制限も今はない。

北華鏡の集落を拠点にしていると云われたのは約半月ほど前。今もまだ集落にいるかどうかは分からないが、

それでもやらないで後悔するよりはやって後悔しよう、と言う気持ちが出てくる。

その結果がこれである。

現在、北華鏡の集落へと行く当日である中、荷物の最終点検の最中であつた。

リタが満足したのか荷物のチェックを終えると、ナベリウスがどこから腕輪を取り出し、

それを玖楼へと渡す。それはかなりのレアアイテムで、マルウエンの腕輪と言う、

装備すると修行による効率を上昇させるアイテムである。

「いなくても……ちゃんと修行……がんばって」

「サボったら今度あったときに鍛えなおします」

恐怖の発言だった。早速マルウエンの腕輪を装備し、北華鏡の集落の周りにも、

冥き途クラスのモンスターが存在することをひたすら祈る。

リッチも体を壁の中から脱出し、アランと共に玖楼の周りに集まる。

たった七ヶ月されど七ヶ月。それが現在の玖楼にとっての『全て』である。

七ヶ月で玖楼の持つ常識は大きく覆されたと言うべきである。

剣を握ることはできるようになった。魔法は使えないが必殺技もできるようになった。

ある程度常識を投げ捨てることもできるようになったし、

多少グロイ生物でも偏見に囚われずに殴ることもできるようになった。

どれもこれも日本で生活していれば絶対にできないことであった。

冥き途の浅い階層へと一団と共に向かう。

冥き途の現在の出入り口は一つしかなく、前サティアが侵入してきたような転送装置のみで、

昔はまだまだ何個かあったが今では一番浅い部分にある一つしか稼

動していない。

その前にまで来ると玖楼が乗り込み、その前で他のメンバーが止まる。

「そんじゃ、ちよいと軽く『普通』つてのを見てくるよ」

「……それは案に私達が普通じゃないって言ってますよね……？」

「あ、いや、でも、……ここ普通じゃないよね？良く考えたら死者と一緒に暮らす生活とかおかしいよね？」

「「別にな？」」

「いや、私はおかしいと思うぞ」

「一番人外な姿してる少尉には言われたくない」

「ラメ入りペ。シマン……」

少尉は自分と同様この世界よりかなり科学の発達した世界から来たのは話し合ってすぐに分かり、

コカ。ーラや、ペ。シマンの話が分かったときは喜んだものだ。

そして同時にラメ入りペ。シマンと表現した時はかなり落ち込まれた。

そんなアランを放置しつつシュタ、っと片手を上げる。

「そんじゃ行つて来ます」

「うむ。行つて来るがいい」

「ちゃんとするんですよ？」

「ご飯係……………」

「ナベリウスさんだけ何か違うんですけど」

「気にしちゃだめ」

まあ、仕方がないね。料理って文明の行動が焼く半年ほど前まではなかったんだしね。胡椒を手に入れるためだけになんで戦争が起きたのか今では分かるよ。

ギユンギユスカーに連絡がつくまでは本当に生臭かったり色々足りなかった。

素晴らしいね。調味料。

くだらないことを考えているうちに転送装置に光が灯り始める。転移の前触れだ。

手を振りながら別れを告げる。飛翔の首飾りを使用すれば何時でも戻ってこれるので、

もう二度と会えないわけではない。そのためか若干心が軽く感じる。

「あばよダチ公……………」

その一言共に視界が完全に光に塗りつぶされる。

光の中でリタがバイバイと手を振っていると場所が見え、リッチとアランがカタカタしているのが見える。

リタもしっかり手を振っており、仲間意識はあるんだなと思ってい

るうちに完全に光に染まる。

それから数秒、

光に塗りつぶされた光景が元に戻ると。同じなのは筒状の石でできた転送装置。

それ以外は青空の下、隠すように装置を囲む木々。まったく別の場所に存在していた。

「眩しっ……」

目に影がかかるように手を持ち上げていささか眩しすぎると感じる太陽の光をさえぎる。

「あー。今まで地下だったからなあ……」

環境がガラツと変わるのも仕方がないと思いつつも手を下げずに歩き始める。

サティアの話を聞くかぎり北華鏡の集落から冥き途までは数日かかり、

古い街道へと出るまでには約数時間かかると言う話であった。

「たしか道に出るまで真っ直ぐ西だっけ……」

道具袋の中からコンパスを取り出し、方角を確かめる。

この世界は広く、人間が住む場所より魔物の生息しているエリアのほうが大きい。

故に、迷えばすぐに餌食になって生きて帰れることはないため、コンパスなどの方角を示す道具はかなり重要である。……とは冒険のいろはを教えたリッチの言。

歩き出しながら木を見ると、木の枝に紐がくくりつけられているのが数本あるのが分かる。

「これが目印だったから、こっちで大丈夫、っと」

これも先輩冒険者のサティアがやったことで、森が深そうなところでは景色が似てしまい、

ループや迷子にならないように定期的に目印を作るものだが、これを辿ってサティアは冥き途へと、何回かやってきているのである。

「頭いいよなあ」

少し足のペースを上げながら木々の間を抜ける。

リタに何度も「暗くなる前に開けた場所を見つけて野営の準備をするんですよ」ときつく言われているため、

なるべく早く開けた場所を見つける。睡眠中に教われないためにも

魔物避けの陣を張る必要があるため、

それなりの準備は必要だとわかっている。

「……うし。行くぜ」

誰もいない木々を、一人歩き続ける。

●

そうして道にたどり着いて歩き始めて既に3日が経過している。

旅の熟練者のサティアは2日ほどあれば到着できると言っていたが、

それは熟練者としての言葉だと改めて思い知らされる。テントの設置に戸惑ったりと、色々と不慣れな行動で早めに野営準備を始めたりと色々と行動が遅いので、

本来のスケジュールより遅れての行動であつた。なによりも、

どた、ばた、ずた。

魔物の存在が一番読めないために、たまに空に飛んだままの鳥型の魔物を打ち落とすのに偉い時間がかかったりする。

襲つてきた魔物を三体全て切り伏せると道具袋の中から布を取り出し、

怪鳥を切つたときに付いた血を剣から拭いながら歩き始める。

こういう武器の手入れは冥き途に居るときは必要なかったが、武器を錆びさせる訳にもいかず、

こつやつて手入れの仕方も習つた。

本当に自分は変わったと、玖楼は思う。

自分は元来何かを始めようとする人間じゃなかったはずだし、めんどくさがりやなはずだ。

なのに今では一人で冒険して一人で戦えて、そして誰かを追っかけるまでにはハツチャケている。

変わったなあ、と。そう呟く玖楼の背後から新たな音が聞こえ始める。

パカラパカラと馬の蹄が大地を蹴り、ガタガタと木組みの何かが揺れる音。

足の歩みを止めずに後ろを振り返ると、西部劇でみるような馬車を2頭の馬が引っ張る姿があつた。

馬の手綱を握る男の目が藁帽子のした大きくなるのが見える。

此方を見かけると馬車の速度を上げて近寄ってくる。それを見かけて玖楼が体を街道の中央から動かし端の方へと寄る。

そのまま玖楼まで追いついた場所が玖楼の横で速度を落とし玖楼に平行するように動く。

「よう！兄さん、冒険者かい？」

気さくに男が話しかけてくる。麦藁帽子にチュニツク、革のズボンにベストと、

この時代としては中々の服装からしてそれなりにお金のある身なりだとは分かる。

麦藁帽子を脱いで片手に持ちながら玖楼を見てくる男に対して、

「あ、や、はい。そんなもんです」

村につくまでは誰も会うことがないと安心してたゆえにすこし緊張する。

ついでに言葉が通じたことにも安堵する。サティアとの件のあと、言葉はさらに練習した。

へえ、と声を漏らしたあとに辺りを見回し、再び玖楼に視線を戻す。

「つー事は何だ、一人か？」

「ええ、そうです」

「……うつひゃあ、そりやまたすごいなあ……」

「？」

なんだか良く分かんが……褒められた？いや、普通に驚かれてるよな。

……いやまて、このリアクションからして激しく嫌な予感がする。

「つつー事はなんだ兄さん、さっき見かけた魔物の死骸、あれ兄さんが殺ったのか？」

「そ、そうですね……」

「人は見かけによらないものだなあ」

馬車を動かす男はしきりに頷きながら尊敬の眼差しで玖楼をみる。人生この方尊敬とは縁遠い生活をしていた玖楼はその眼差しを受けてさらに緊張してしまう。

まさか知らぬうちに何かをやってしまったのではないかと。

その心情を理解できたのか、麦藁帽子の男が笑いながら手を振り、

「あ、いやいやいや悪い悪い。ここの魔物って結構強くてさ、あんなふうに綺麗に真つ二つになってるところは見たことないから感心しちゃったよ。」

な乗り遅れたな。ウィル、行商人のウィリアム・バンガナムだ」

「あ、黒川玖楼って言います」

「クロカワ・クロウ？こりやまた聞いた事のない名前だなあ。顔立ちも珍しいし、

兄さんまさか遠いところからやってきた？もしかして東方とかから？」

口が裂けてもすぐ近くあの世からとかはいえないため、適当にこまかしながら答える。

玖楼の答えに満足したのかウィルはしきりに頷くと、

「で、兄さんもこの先の村を目指してるんかい」

「そ。先の村でちよいと人探しを」

「ふーん。じゃあ、乗ってけよ」

顎で馬車の荷台を指しながら言う。
それに玖楼が驚く。

「いいのか？」

「いいんだよ。兄さんみたいな強い人がいれば村までの道のりが安全に終わりそうだしな。乗ってけ乗ってけ。」

「悪いな、よつと！」

小走りで馬車の裏に回ると馬車裏から一気に飛び上がって荷台に乗り込む。

荷台の中には少量の荷物と共に男が一人剣を抱えるように座っていた。

装飾の凝った鎧を着飾っており、剣にもそれなりの装飾が見える。

「話は此処から聞こえてました。はじめまして、神殿教会の騎士フェヴナンド・ミスカトルです」

優しそうな顔立ちに短くそろえられた金髪は女の子受けしそうな優

男で、

それとなく人懐っこそうな雰囲気を出す青年にも見える男だった。

「おつす。黒革玖楼つす。あ、こつち風に言えば玖楼黒川なのかな？
ウイルさんもフェヴナンドさんも玖楼つて気軽に読んでください」

「では自分も愛称のフェヴをお願いします」

「俺もウイルで十分だ。あと敬語をどうかしろ。ムズムズするぜ」

「おう、分かったぜウイル」

「対応早いな！」

「自分柔軟に生きてるんで」

そのあと静寂一瞬、三人で大笑いする。馬車も歩きよりは早い、
それでもまったりとした速度で歩みを続ける。馬車を新鮮な風が駆
け抜け頬をなでる。

その気持ちよさに笑みを浮かべると、玖楼が質問をフェヴに投げか
ける。

「そっぴゃフェヴ」

「なんですか？」

「神殿教会つてなあに」

ガタ、ドタ、ヒヒーン。

馬車が急停止しその衝撃で玖楼とフェヴが馬車の床に倒れこむ。

「わ、悪い。あまりに予想外の質問で手が滑っちゃった」

「う、ごめん。……で、神殿教会ってなんなの？」

その言葉にフェヴが激しく狼狽し、

「し、神殿教会を知らないんですか?!」

「え、いや、……ハイ」

「……おめえさん、本当に今まで何処で暮らしてきた？洞窟の中つて言われても俺は驚かないぜ」

それは間違っていないぞウィル。

だがリツチから聞いた常識の中には一言も神殿協会については語られていないため、

玖楼には神殿協会と言う存在を知る方法はない。

フェヴが軽いため息を吐くと説明を始める。

「神殿教会とはマーステリア様、そして『預言者』様を神として迎え、

国境を越えてこの大陸で一番広く知れ渡っている宗教です。

我等の教義は弱き者を護り、平和と正義を愛すことにあり、そのために日々鍛錬を続け、

世界の平和と魔物の排除のために日夜努力しているのです。

騎士や神官戦士を育ててはそれを人手の少ない村や魔物の出やすい

町に派遣したりして、

多くの人々を守ることに成功している、素晴らしいものです！

各村や町にある教会の大半は神殿教会の物で、少々お布施を貰う必要はありますがそれと引き換えに、

聖水や治療の水、部屋を借りることができます。

輩出される騎士はどれも強く、神殿教会の騎士と言えばエリート中のエリートです！」

フェヴが誇らしげに胸を張りながら神殿教会について話す。

玖楼が自分でまとめるに、この世界での警察のような存在なのだと納得する。

たしかに力の無いものが暮らす小さな村では一匹の魔物が脅威になりえるから、

こうやってほぼ無償？で派遣するのはすごいことだと。

……あ、お布施を貰ってたっけ。やっぱりお金がないと生きていけないのね。

そんなことを思いつつも、フェヴが自らを『騎士』だと名乗ったことを思い出す。

「ってことはフェヴもエリート中のエリートなのか？」

そういった瞬間フェヴが若干項垂れる。

「あ、いえ……私はまだ騎士と言っても下っ端、言わば見習いのようなものです。」

騎士の中にも色々位や上下関係がありまして……その……私はまだ……」

「下から数えたほうが早いのか」

「偉くはつきり言いますね?!」

「自分正直に生きてるので」

そして三人で再び大声を上げて笑いあう。話すのが楽しいのか三人の顔には笑顔が浮かんでいる。

「一応高見えてもレベル50はあるんですけどね」

「レベル50っていやあ見習い騎士としてはかなりの高レベルじゃねえか！」

レベル。レベルの話は赤骨隊長（玖楼勝手に命名）のレベル50のを相手にして以来、

まったく話に出てこないの自分は何レベルとか判断する手段はないが、

男の子としては自分がどれくらい強いかに興味はある。

「でもクロウもこちらの魔物をアンナに綺麗にぶった切れるんだ。そこそこ強いんだろう？」

「いや、まあ、俺……自分が何レベルとかは知らないんで……」

「へ？そりやあもつたいないぜ！死骸しか確認してないがアレだけの腕前なんだ、

数値にして確認したほうがいいぞ。レベル一つで仕事の報酬とかがかわってくるからな」

「あ、でしたら私が調べましょうか？」

その言葉に驚く。冥き途でもレベルを調べることが出来るような人間（？）はいなかった。

「え、できるの？」

「はい。本来は教会で神の信託を受けてレベルのお告げを受けるのですが、敬謙な信者になりますと略式ですが信託を受けることができるのですよ。

こう見えて私、主席ですから」

えっほんと、誇らしげに胸を張るフェヴに対する玖楼の印象派情けないエリートから、
なんだか便利なエリートにランクアップした。

「おー。そんじゃいっちょ頼むわ。ここらで自分がどれくらい強くなったか調べるのも悪くはないと思う。

何気にどれくらい強くなったか知らないで戦い続けるのってのも結構不安だし」

そういうと早速と、フェヴが横においてある道具袋から本を一冊取り出す。

装飾の施された若干古そうな本であり、大事に扱われているのが分かる物である。

それに視線を合わせていると、

「あ、これは聖典です。まだまだ未熟なので媒体がないと少し大変です。

あ、お手をお借りしますね」

「あ、どぞ」

玖楼の片手を掴むともう片手を聖典に乗せて、ブツブツと呪文を唱えるように喋る。

傍からみれば完全に関わりたくない危ない人間一直線なのだろうが事情を知っているだけ、

離れることは許されなかったため、諦めて大人しくする。

手をつないでから数秒後、フェヴが驚いたような表情を見せて、

「す、すごいですよ！レベル71なんてすごいです！」

「ひゃあ、こりゃまたすごいなあ！」

未だレベルのすごさを理解できず、玖楼頭をかしげる。

「……そんなのすごいのか？」

「70と言ったら一流の冒険者クラスの強さですよ！」

他にも神殿教会でも中堅クラスの騎士の実力はありますよ！ここら一体の魔物でしたら問題なく無双できるほどですよ！」

まさかそこまでとは思わなかった。

実際冥き途にいる間は自分の数倍の強さを持った人外しか存在しなかったため、

玖楼の強さの基準というものがどれだけ狂っていたか気づく。そしてまた、外に出てよかったとも考える。

「ちなみに150で超一流、220になれば英雄などといわれる人々、
神格保持者が250、それ以上は魔人や人を超えた、私達のような存在が届かない領域の存在ですよ」

ナベリウスさんとリタの強さに今更ながら絶望した。伝説クラスの門番ってなんなんだあんなら。
リッチとアランも此処数ヶ月で強くなってたしなんなんだあんなら。マジでなんなんだ。

その後も、フェヴ、ウィル、玖楼の三人での雑談は続く。
玖楼の初めてのたびであり、リッチが教えたこと以外にも知るべき事は多くある。
そのため、玖楼は貪欲に知識を欲した。

結局、馬車が北華鏡の集落に到着するのは暗くなってからであった。

●

ガタゴトガタゴトパカラパカラパカラ……。

馬の蹄の音と揺れる馬車の音が静かに夜の闇に響く。

先ほどまではランプの炎と月の光を除いては完全に真っ暗だった世界も、

今では村の明かりである程度の明るさを保っていた。

ゆっくりとすすんでいた馬車がカタ、と音を立てて停止する。
村の入り口に到着したのだ。村の入り口に警備兵などおらず、簡単な柵しか置かれてないために、

その間を通ることが入った事になる。大きな町のような面倒なル―ルは存在しない。

「到着したぜお二人さんよ」

「助かったぜウィル」

「此処まで運んで下さりありがとう御座いました」

玖楼に続いてフェヴが馬車から降りる。

辺りを見渡すと家から明かりが見え、他の家より大きな建築物が二つほど見える。

「お前さんたち二人はどうするんだい？」

「私は教会への報告義務があるのでこのまま教会へ行きます。寝泊りも教会でできますので」

「俺は……宿かなあ」

RPGでよく出てくる宿屋はリアルに存在しかなり安い値段で一晩借りれるそうなので、

今日はもう遅いので宿に止まって眠っちまおう、と言うのは玖楼の考えである。

「宿ならすぐそこにあるぜ。教会は村の奥、こっから見て右側だ。俺も世話になつてる農家に挨拶したら宿に行くから、またあとであえるかもな」

カタカタお音を立てながら馬車が動き出す。

「それでは私も。しばらくこの村にいますと言っのならまた明日にでも逢えるでしょう。では、おやすみなさい」

フェヴも一度頭を下げてから教会のほうへと去ってゆく。

玖楼も一人でボーっとしているわけにもいかず、ウィルに教えられた宿の方向へと向かう。

宿自体は見える範囲にあるのでそう遠くはない。

木で出来た2階建ての大きな建物、と言うイメージだ。中世ベースのRPGにできそうだなあ、

と言っのが玖楼の率直な意見だった。

小さな声で失礼しますと言いながらドアを押し開ける。

宿の1階はまるで酒場かレストランを思わせる様子で、奥のカウンターに店主と思わしき男が見える。

他にも意外と酒場自体はにぎわっており、冒険者姿の男もいれば、酒を飲みに来た軽い服装の村人も見える。ドアが開いたことを見て一瞬玖楼へと視線が行くが、

一瞬見ただけであり、ただそれだけだ。それ以上の興味はない。

玖楼の服装は最初と変わらぬドレスシャツとジーンズだが、

その上から旅人が着るようなマントを装備して首から下をすっぽり隠しているため、

早々目に留まるような格好ではないのだ。しいて言えば顔立ちぐらいなものだろう。

意外と賑わっている酒場部分を抜けてカウンターへと到着する。

ヒゲを生やした、いかにも『俺がボスだ』っぽい店主の元へ行くとさっそく声をかける。

「おういらっしやい。こんな時間まで冒険か？それとも仕事か？見ない顔だな」

「あ、はじめまして。自分たった今到着したばかりなんですけど、しばらく此処に泊まりたいんですが部屋を一つ借りませんか？」

「了解。ちよいとまってな」

ヒゲ面の店主がカウンターの下に手を伸ばすと紙の束を取り出す。その紙を一枚一枚めくりながら確かめてゆくと、最後のページで顔をしかめる。

「あー……部屋……空いてません？」

「すまんな兄ちゃん。実は今日来るやつが一人いてな、そいつのために部屋を一つとってあるんだがそのために今ある部屋は全部埋まっちゃってるんだ。

つっても此処みたいな田舎の宿には全部で4部屋ぐらいしかねえんだがな。悪いな」

困った風に店主が頭をかく。

玖楼の表情にも困ったと言う色が浮かぶ。

「あー、どうすりゃいいんだろ。村のどっかで野宿かなあ……」

できれば全力で回避したい結末ではある。

店主の前で頭を抱えだす玖楼に予想外のところから援護射撃が入る。

「それじゃ、私と相部屋でいいわよ」

「え？」

後ろに振り返るとそこには笑顔で玖楼を見る赤髪の女性がいた。

「え、え、ええ？」

まさかこんな風に逢うとは予想もせず、混乱しだす玖楼に対して玖楼の後ろで店主が口笛を吹き、

「やるな兄ちゃん」と言うがそれを玖楼が全力で無視する。

「さささ、さ、サティアさん?!」

「さんはいらないって前言ったはずよ。ふふ」

玖楼の狼狽っぷりが面白いのか、くす、っと可愛い笑いをサティアがこぼす。

くすくす笑うサティアを見て落ち着いたのか、玖楼が若干呆れた感じにため息を吐きながら、

「からかったな？」

「いえ、本気よ？」

「ひょ？」

そして完全にフリーズした。玖楼には理解できなかった。

「それでいいのかい姉ちゃん？」

「私は玖楼の事嫌いじゃないし、まったく問題ないわ」

「そうかい。料金は……あー、兄ちゃん？おーい。ダメだこりゃ。頭から煙ふいてやがる。」

料金に関しては気にするな。朝食の時間も変わらねえから、明日の朝に払ってくれればいいぜ」

「ありがとう。玖楼？」

「へい。どういうことだぜこれはステイステイ。これなんてエロゲ？違つだろ落ち着け俺。夢、ドリーム。そうさ。夢なんだ。」

こんな美女と同じ部屋で眠れるとか夢に違いないだろ常識的に。テンション上がって来たアー！

って状況じゃない！いい加減に夢なら覚める！いや、その前に落ち着くんだ玖楼！こういうときこそ……計算だ！

数学の成績が壊滅的だった俺が数学の問題をやればすぐに落ち着くはず！ $1\ 2\ 6\ 8\ 3 + 9\ 4\ 6\ 2\ 1$ は……って、

数字がなんだったか覚えてN E E E E E！ダメだ！余計に混乱し始めた！」

玖楼の脳は限界に近づいていた。

「何かブツブツ言ってるわね？」

「……姉ちゃん。悪いことは言わない。そいつ置いていけ」

「これはこれで可愛いと思うわよ？」

「……もう俺は何も言わないぜ」

「ふふ、ありがとう。それじゃ行くわよ玖楼?」

未だに軽いトリップ状態の玖楼は返事をせず、サティアが玖楼の腕に自分の腕を通し、

玖楼を引きずる様に2階へと上がってゆく。

宿の1階部分、酒場にいる村人はやるなあ、若いなあ、等とコメントを出し合いながらも、

全員そろって、

「へたれか」

「へたれだな」

その共通認識を持つようになった。

そして結局、玖楼は次の日の朝まで一睡する事無く過ごした。

「あははは、あはははははははは！！！！ナニアレ！さ、流石私の友達を名乗るだけはあるわね！」

ここ数日つまらないと思っ たら最後の最後でアレって！あは、あは
ははははははは！！！！

あーやだ、面白すぎて腹が痛い！だ、ダメ！笑い死ぬ！あはははははははははは！！」

「笑うのもいいですが書類仕事を他人に全て押し付けないでください」

「あははははは、ははは、はあ、悪いわね。でも……まだまだね。この程度じゃダメよ。」

私の友達を名乗るならもつと喜劇で悲劇で、強くなきゃダメよ。そうね。少しお節介をしようかしら。そう、どんな料理にもスパイスは必要ね」

「……マリーチ？今がどれだけ大事な時期だかわかっているのですか？」

「だからこそよ。だからこそ責任の一端を彼に持たせるのよ」

「『持たせる』ですか」

「そう。だって、——私達『トモダチ』でしょ？うふうふ。クスクス」

第五話 外の世界（後書き）

名前：黒川玖楼

レベル：71

称号：旅する異邦人

主武器：パラディウム

予備1：なし

予備2：なし

防具：

ドレスシャツ（魔導皮膜処置）

ダメージジーンズ（魔導皮膜処置）

旅人の衣（魔導皮膜処置）

装備：マルウエンの腕輪

戦闘スキル：

必殺・飛燕——Rank E

必殺・我流——Rank D

中型剣——Rank D

状態：混乱2

HP：380 / 380

MP：0 / 0

TP：64 / 64

FS：50 / 100

攻撃力：193

攻撃回数：5

防御力：108

防御回数：15

魔法攻撃：0

魔法防御：98
肉体速度：20
精神速度：9
攻撃属性：万能
防御属性：万能

発動スキル：

努力家？—— 迷宮時は1歩毎に経験値獲得。戦闘時は獲得経験値が上昇する。

見切り？—— 攻撃を受ける際に、確率で発動。敵の攻撃を完全回避する。

先手？—— 戦闘開始時に確率で発動。開始時の硬直フレームを0にする。

サティアが好き—— 戦闘メンバーに『サティア』がいる場合、攻撃力と防御力が5%上昇する。

ついにサティアが好き実装。

今現在はステータス異常にかかってますね。さあて何でしょう。

そんなわけでマルウエン装備でレベルアップした玖楼さん、この世界での強さは一流冒険者ですが、

熟練度を見ると駆け出し初心者もいいところです。やっぱり時間がないですねえ。

名前：フェヴナンド・ミスカトル
レベル：50
称号：神殿教会の見習い騎士
主武器：祝福済みロングソード
予備1：なし
予備2：なし
防具：神殿騎士の鎧
盾：神殿騎士の盾
装備：聖典
戦闘スキル：
魔術・神聖——RankD
魔術・治癒——RankD
中型剣——RankD
HP：352/352
MP：80/80
TP：30/30
FS：50/100
攻撃力：133
攻撃回数：3
防御力：87
防御回数：10
魔法攻撃：74
魔法防御：81
肉体速度：13
精神速度：12
攻撃属性：神聖
防御属性：神聖+

発動スキル：

神聖の守護者？——防具の属性に左右されず、常に『神聖+』の防御属性になる。

復活？——戦闘不能になった際に、確率で発動。HP & amp; FSが一定の状態で復活する。

連携？——味方の攻撃に続けて攻撃すると、ダメージが増加する。悪魔殺し？——敵が『暗黒』属性の場合、攻撃力が上昇する。

神殿教会からの初登場キャラっす。

感じとしてはエリート、ただし見習い的な感じです。熟練度は玖楼よりも上、

そして基礎能力も玖楼より上だけど装備とレベルで負ける感じです。どんなに鍛えても玖楼のほうは体がファンタジーではなく一般日本人なので、

体自体は身体能力が上がってもインフレできない……のかな……？
そういうわけでなんとなく使えそうな神殿騎士さん。

こついうわけで、1章のメインスポットである北華鏡の集落に到着です。

マリーチさんも動き出して、サティアさんと合流。なんだか展開が強引なきもしますけど、

原作のサティアさんもエッチ突入までそんな時間がかからなかった

なあ、とか思い出しつつ執筆。

レベルのアレこれは自分の捏造です。

リッチとアラン少尉も玖楼鍛えているうちにレベルアップしてますよ！

冥き途勢は段々と、と言うか既に人外の巢窟でしたね。

さてさて、次回からはゆっくりスローライフなんでしょうか？

目的であるサティアさん発見、そしてあとは『普通』を体験することなのかな？

まあ、イベントは色々と用意してあるのでお楽しみ下さい。

リタ達の性格が違うのはこれがお・り・が・み時空だからですよ？
決してリタの性格を忘れたからじゃないですよ？！

前回に引き続きアンケート実施中です。

ハイシエラソードとエクリアさんに付いてです。

A・必要

B・いらない

C・なしだけどそれクラスか似た物を用意

流石にアンケート答えたのが二人だけだと自分……

そんなわけで次回はまた1週間後か土曜日目指してます。
それではさようならさようなら。

第六話 告白（前書き）

遅れて申し訳ありません。

イチヤイチヤってやっぱり難しいですね。

第六話 告白

温かい気配を感じ、それを抱き寄せると同時にもっと感じようと顔を押し付ける。

もっともっとと、優しいぬくもりを感じようと目を閉じたまま回した手に少しだけ力を入れる。

「ん……」

圧を感じると同時に近くから女性の声が聞こえる。

鈴の音のような、美しく頭に残る声。もっと聞きたいと思う声。もうすこし、あと少しだけ聞きたい、そう思っ——

「——えっ」

目を覚ます。

現状把握。ベッドの中。サティアに抱きついている。胸に顔をうずめる。

サティアこっちを笑顔で見てる。放心なう。

「おはよう、玖楼」

笑顔で挨拶するサティアとは別に玖楼のテンパリは最高潮に達していた。

何故だホワイWHY！どうしてこうなった。自分は確か床で眠ったはずと言わずと起きてたはず！

眠らないで我慢してたのに何故気がいたら抱きついてたなんて状

況なんだっつーかなんてエロゲ。

エロゲつつたらもう半年以上もやってないな。A.L.O.C.Eソフトの新作出るって話だったけど遊びたかったなあって、

そんなことを考えている状況じゃないサティアさんかわいいよサティアさん。イヤッフーウ！

とりあえず、

「お」

「お？」

「お、お、お、お……」

「お？」

「オアアアアアアアアアアアアアアアアア！」

玖楼^{ヘタル}の結論：少尉の如く暴走する。

ベッドから体を横に回転しながら飛んで脱出すると真っ直ぐに窓へと向かい窓を思いっきり上げ、

「アイキャンフアラアアアイツ!!!」

「玖楼？！」

テンションに任せたまま体を窓から投げる。

頭から地面に激突する瞬間、玖楼の頭によぎったことは一つ。

……いい匂いしてたなあ……。

●

玖楼の奇行から1時間、玖楼は完全に復帰して宿屋の1階、酒場部分にいた。

まだ時間が早いのか、酒場は咲夜のような賑わいを見せず広々としており、ポツポツと朝食をとる人間の姿が見て取れた。

その例に漏れず、玖楼とサティアも並ぶように木の椅子に座っていた。

同じく木で出来たテーブルの上にはできたての料理が並んでおり、冥き途では見たこともないような料理が並んでいた。

理解できたのはベーコンのような肉とパンと目玉焼きまで、透き通った色のスープや見たことのない野菜の入ったサラダも出ており、

大いに食欲を刺激していた。

だがその前に、

「いい加減笑うのを止めてくれよ……」

「ごめんね……ふふふ、だって……ふふふ……アレぐらい気にしないのに、いきなり窓から飛び降りるんだもの。ふふふ」

「もう許して下さい」

「許しはしてるわよ？ただ面白いだけよ。ふふふ」

「じゃあ勘弁してくれよ……」

「ごめんごめん……ふふふ」

「止まらないじゃないか」

慣れたのか玖楼の動きには硬さがなく、自然と笑えている。サティアも未だに面白いのか、

玖楼の飛び出す姿を思い出しては上品に笑う。それをなんとか聞き流しながら、木のスプーンでスープを一口口へと運び飲む。

そしてスプーンを口に銜えたままで固まる。

その様子が心配だったのか、サティアが玖楼の顔を覗き込む。

「大丈夫？私は美味しいと思うんだけど……」

朝食のオススメはサティアが手配したもののため、それが玖楼の口に合わなかったのかと心配したのだ。

そしてスプーンを口に銜えたまま涙を流しながらスプーンを飲み続ける。

「く、玖楼?!」

流石にこの豹変には驚かざるを得なかった。だが玖楼本人は涙を流しながらも、しきりにうまいうまい言いながら食べ続ける。

「だ、大丈夫？」

「うめえよう……スープとかまともに調理された物を食うのなんて超久しぶりだよ……」

玖楼が今までいた場所を考えればそれも当たり前だ。

食べ物基本的な魚か肉、それも焼いて塩か胡椒をかけるだけのシンプルな男の料理。

旅を始めても食べているのは用意した干し肉。最後にスープなどのまともな料理を食べたのは日本にいた頃。

玖楼、約半年振りの文明的な食事である。

彼は今、心から料理に感謝し、まともな料理に感動していた。

「食べ物には逃げないのだから、もっとゆっくり食べなさいよ」

「はむはむはむはむ」

男女が二人で食事を取っているというのに、その食事風景には色気が一切存在しなかった。

●

「んっー！つく、ふぁー」

宿からサティアと並んで、体を大きく伸ばしながら出てくる。昨夜は夜の闇で暗い時間に到着したためにまったく周りが見えなかったが、日の光が当たる今では違う。

全体的に小さな村だが、中央を整備されただけの平らな土の道路があり、

そこから枝分かれするように村の各所へと続いている。宿が存在するのは比較的入り口近くで、

奥のほうの少し高い位置に教会が立っているのが見える。

宿も横を覗けば馬小屋などがあるのが見え、昨日乗ったウィルの馬車共々置かれているのが見える。

簡潔的に言えば、のどかで平和な何もない村、と言うのが一番当てはまる表現である。

ウィルに言わせれば此处で手に入る羊毛はかなりの高級品だと言うことで、

なるほど、こんな自然いっぱいのところで暮らせばいい羊も育つな、と納得する。

そんなキヨロキヨロ見渡す玖楼の前にサティアが進み出てくる。

「そんなに珍しい？」

「うん。見るもの全てが新しいよ」

冥き途から出てきてよかったと思う。もしあのまま冥き途にこもっていれば決してこういう景色は見れず、

終始ゾンビと人外がお友達なんて明らかにおかしい人生を送ること

だった。

うん。それはない。絶対ない。

どう考えてもナベリウスルートかリタルート直行。確実にロリコンの烙印は押される。

そんな考えを即行で投げ捨てる。今は目の前にいる美女の存在を魂に刻もうと。

そんな玖楼の内心を知らずサティアは笑顔を浮かべ、玖楼も答えるように笑顔を浮かべる。

「それで、どうする？」

「出来たら此処らへんを見て回りたい」

元々、そのためにあの穴倉を出たのだ、と。とりあえずまず行くべき場所は分かっている。

「私はここに何ヶ月も滞在しているし、案内が必要なら案内するわよ？」

「え、マジ?!」

「……まじ?」

「え、あ、んーと、『本当に』? ってのを俗っぽくした感じの言葉だよ。

……サティアには言ったよね? 自分が何処から来たか。そこでは割と良く使われている言葉なんだけど、

この世界には存在しない言葉なのかなあ」

余談だが玖楼の過去を覗いた冥き途組はそれなりにヲタ知識が増えたりする。

「うん。まあ、ありがたくお願いするけど……そのまあ、前に行きたい場所があるんだ」

「行きたい場所？」

「とりあえず、教会へ行きたいんだ」

「……？玖楼って信仰する神を持つてたっけ」

「いや、神様の存在は信じるけど、生憎信仰するほど信心深くはないよ。と言つても、祈りさえすれば奇跡を起こしたり、魔力を使えるようになるのは非常に魅力的だけどね。魔力のない人間としては」

この世界に存在する神殿協会は基本的に神殿教会の主神であるマーステリアを信奉し、

そしてその言葉を伝えたり巫女の役目をする『預言者』の存在を最上に構えてはいるが、

『現神』を信仰する信者であればどの神を信じようと仕えていようと教会で祈ることを許されているのだ。

それゆえ、この世界の大半の人間は教会を頻繁利用していることがわかる。冒険者達もその例には漏れ冒険者達の神である、バリハルトを信仰するものが多い。

だが玖楼は信仰する神がない。『現代』から来た彼は神を信じられても、信仰する気に離れない。そこまでは、信心深くはない。

「じゃあ、何で教会に？治療の水とか？」

その言葉にいや、と頭を横に振りながら足を教会へ向ける。

「教会にダチがいるんだ」

「だち？」

「そ、ダチ」

そうつげた後、足を動かし宿からそう遠くない教会へと向かい始める。

場所だけならば昨夜ウィルが説明していたことを聞いているからなんとかなるはず。

そもそも小さな村であるため、探すまでもなく見えてくるはず。

歩き出した玖楼に追いつくようにサティアが小走りで玖楼に追いつくとその横を共に歩き始める。

宿から歩いて数秒、教会が視界に入るのにはそう時間は必要なかった。

その建物の大きさは宿に続く大きさであり、そうそう逃せるものはなかった。

北華鏡の集落にある教会は、さほど大きいものではなかった。

田舎の協会と言われればイメージしやすいそう、そんな概観の教会である。

建築からそれほど年月がたっていないのか、所々汚れた場所が見えるがそこまでは酷くなく、

全体的に白い清潔感を思わせる姿だった。教会の前まで行くと臆せ

ずそのまま扉を開けて中へと入る。

教会の中は外よりも綺麗になっており、毎日掃除されていることが伺える。

ぼつぼつと、習慣なのか村人が熱心に祈っている姿もあれば冒険者の服装の人たちが祈る姿もある。

奥に桃色の髪色をしたシスター服の女性が居り、中に入ってくる姿を見かけるとゆったりとした歩みで近づいてくる。

「神の家へようこそ。本日はどのような用事でしょうか？」

「昨夜ここへ来たフェヴナンドって騎士にちよつと挨拶したくて来たんだけど、今いるかな？」

「騎士様でしたら既に村長様の所へ着任の報告へ行ってしまうれました」

「あちゃー……まあ、逢えないのなら仕方がないや」

昨夜言われたように、同じ小さな村にいるのだからまた逢える可能性は高いのだ。

その時になつたらまた逢えばいい。急を要することがあるわけでもないのだ。

そんなことを考えていると、ふと今まで横にいたサティアの姿が消えていることに気づく。

「サティア？」

そついいながら辺りを見回すと、教会の外、入り口で手を振るサテ

イアの姿があつた。それに安堵しつつ、
シスターにそれではと、挨拶をしてから教会の外へと小走りに出て
ゆく。

「待たせた？」

「ううん。そんなに待ってないよ」

頭を横へと振りながら笑顔で玖楼を迎えると、出てきた玖楼の腕を
引いて村の裏側へとその体を引っ張ってゆく。
その急な行動に体が倒れそうになるが、体を即座に引っ張り上げて
なんとか持ち直しながら前へと進む。

「どこへつれてってくれるんだ？」

そう問いかける玖楼に、

「内緒！」

笑顔でサティアはそう答えた。

●

北華鏡の集落は大きさ自体はそれほどではない。

だがあくまでもそれは『生活圈』だけであり、牧場などの土地を入
ればそれなりの大きさを有する。

だが牧場や農場はあくまでもそれであり、村からは少しはなれた村
の裏側に存在している。

サティアに連れられ玖楼がやってきたのはそこであった。

目の前には川が流れ、それに沿うように道が通っている。回りには木々がそこらに生えており、動物のいななきが近くから聞こえてくる。

本当に遠くへ来たんだなあ……。

改めて都会の生活で見ていた景色と大幅に違い、この自然に感動する。

同時に、時代が進めばこういう自然が少なくなってゆくと考えるとどこか寂しさが湧いてくる。
その気持ちを紛らわすためにも川まで歩くと片手を川の中にへと突っ込ませる。

「冷たっ」

「ここらはどの季節でも涼しいからね。この季節は比較的にマシだけれどそれでも冷たいわよ」

「へえー……」

そのまま水を掬い上げて透明な、綺麗な水を口の中へと運ぶ。
喉を潤す冷たい水がどこか甘く感じ、美味いと思う。

「冥き途の川の水とは大違いだな……」

「え」

「あ、聞こえてた？」

「……ええ。……まさか……」

「うん。飲んだことあるよ」

「……よ、よく無事だったわね」

サティアが驚愕の表情を浮かべる。それも仕方がないことだろう。冥き途の水は基本的に死者の魂を運び、死者の門を通すための道のようなもの。死者の魂やら穢れやら不浄やら、激しく人体に悪いものしかない。それをこの異邦人は飲んだと言ったのだ。明らかにおかしい。

「流石に腹痛で数日寝込んだよ……それ以来水は濾過してから飲むことに決まったよ」

「そういう問題?!」

事実濾過して飲んだら何にも問題なかったために、玖楼自身若干常識の外側にはみ出ているとしか言いようがない。

取り留めのない事を話し合いながらサティアを先頭に道に沿って歩いてゆく。

川に沿って歩いて数分、やがて若干開けた場所へ、川に囲まれた陸地のような場所へたどり着く。

今までの川幅はそれほどなかったが、ここを囲む川幅はしっかり太く、底も深そうであった。

「つれてきたかったのって此处?」

「まず最初にね」

と言うことは次があるのか。

そう思いながらもこの光景をよく見る。澄んだ水。魚がいっぱい。木陰で涼しく。いい環境。

「釣りでも出来たら楽しいんだろうなあ」

「釣り、できるの？」

「まあ、なんと云うか、少ない趣味の一つだよ」

道具袋に手をつ突っ込むと、その中から木で出来た釣竿を取り出す。

竿には『リッチ作』と、

この世界の言語で書かれておりリールがついていることを抜けば何処でも見れる釣竿だ。

無論、リールは玖楼の記憶の中のものをリッチが再現して作ってくれたものだ。

「自分は都会っ子だったけど、小さい頃は家族でよくキャンプとかに行ってたなあ……その時は川で釣り系たらしで釣った魚を焼いて、それを炊いたご飯と一緒に食べたりしたもんだよ。育って一人で暮らし始めても中々捨てられなくて、

こういう綺麗な場所ではもうできなかったけど、町の中にある釣堀……ああ、釣堀ってのは釣りをさせてくれる店ね？

そこへ暇なときや落ち込んだときは釣り系をたらしてたよ」

そこで苦笑しながら釣竿を戻す。

「と言ってもサティアにはつまらない話だよな」

そう結論付けた玖楼の手をサティアが握る。

「いえ、十分も楽しいわよ。こうやって話すたびに玖楼の知らないこと、新しいところがドンドン見えてくるの。」

私はそれが見れるだけで十分に満足してるわ……………ねえ、だったらさ、ちょっと釣りをしてみない？」

「え？」

釣竿をしまおうとしていた玖楼の手を引っ張り上げて後ろに回りこむと、後ろから抱くように釣竿を構えさせる。突然の行動に驚くと同時に背中の感触にドキドキします。

『もげる』

「……………ん？」

「どうしたの玖楼？」

「いや……………今、なんか天から『もげる』って聞こえた気がするんだけど……………」

「……………？私は何も聞こえなかったわよ？歩きつかれたんじゃないかしら？」

ほら、そんな時は座ってゆっくり魚でも釣りましょう。まだ日は高いのよ」

時間は分からないが空を見上げれば太陽は高く昇っており、朝ごはんも食べてきたばかりだ。

サティアがつれてってくれるという場所には大いに興味はあるが急ぐ必要もないだろう。

「うん……まあ、……自分の釣りテクを見せてやるぜ！」

ササっと、サティアから離れながら釣竿に道具袋からミミズ型のルアーを取り出し、それをつける。

ルアー自体を見るのが初めてなのか、ルアーに対して興味津々の様子で顔を近づけてみている。

「これって……偽者よね？」

「生きてないって言うのなら偽者だよ。これは流石に商会に頼んだものだけど、

本物そっくりのミミズに釣り針が付いていて、切れたり壊れたりもしない限りは何度も使えるエサなんだよ。

エサを買ったり一々捕まえたりするよりはずっとラクだけど、その代わりに一つ一つの値段が高いんだけどね。

まあ、疑似餌とかとも呼ばれたりするよ」

まだルアーの概念はなかったので版權は取った。商会から売れるごとに1%もらえることになっている。

お金自体は魔物を倒せば手に入るのでもそれほど困ることはないため、実はそこまで必要としてなかったりする。

サティアが横に座ってくるのを認識しながらも意識しないようにしてルアーをつけた釣竿を振るい奥へと飛ばす。

ポチャンと、軽い音を立てながら川の中へと沈んで行き、それをゆつくりとリールを回しながら引き寄せる。

「おおー。釣りの事はよく分らないけど、何か凄そうね」

「ぶっちゃけると少し進んだ技術だからね」

少しの閃きがあればすぐにでも作れそうなものだが、とそのあとに付ける。

釣竿を軽く、リズミカルに揺らしながらリールを巻いてルアーを引き寄せてゆく。

水面に映る魚の影が生き物のように動くミミズのルアーに引き寄せられる様に近づいて行く。

その様子にサティアが感嘆の声を上げる。

「上手なのね」

「ここ最近は何日の様に釣りしてたからね」

「毎日？」

「うん、……っかつた！」

水面をすれすれで上下していたルアーが急激に重くなり、糸とルアーが引つ張られるように水面の中へと沈む。

だがそれを玖楼が許すこともなく、力を入れすぎて糸が切れないように気をつけながらも魚の勢いが弱まった瞬間、即座にリールを回転させ魚を此方へと引き寄せる。

「よ、く、っほ！」

興奮からかサティアが立ち上がり応援をする。

「お、がんばって！そこ！」

サティアの声を頼もしく思い、決して竿を握る手の力を緩めずに魚を決して焦らずに少しずつ少しずつ、

自分の下へとその姿を手繰り寄せてゆく。だが魚も負けじと必死にルアーに食いついたまま逆方向へと泳ぐと、

水面から飛び上がりその姿を晒しながら生命力の強さを表す。

見た目30cmほどの大きさ、色鮮やかな体色、太陽の光が当たりその鱗に反射して輝くその姿。

「レインボーかつ！」

此方の世界独特の魚であり食べれば美味しいと、実経験から分かる保障がある。

体力はまあある魚ではあるが……、

「自分の敵じゃねえ！」

再び飛び上がった瞬間に一瞬だけ力を入れて大きく魚を近くへと大きく引き寄せる。

水の中へと戻ったレインボーが再び逃げようとするが、既に岸への距離は僅か2mたらず。

玖楼がレインボーが完全に復帰できる前にリールを巻く速度を一段と早く回し、一気にレインボーを岸へと引き上げる。

「捕った！」

川から引き上げた魚の口の部分を親指を入れるように掴みルアーを抜く。捕まえた魚をサテアへと向け、

「どーんなもんだい！」

満面の笑みを浮かべてサテアへと見せ付ける。

サテアもサテアですごいと拍手を送りながら自分の事のように喜ぶ。

「凄い！私ではあんなふうに上手にできないわ」

「うーん、まあ、自分はそれなりに慣れてるし……それに」

「それに？」

「もっとスゲエの釣ったから」

その言葉でサテアの顔が少しだけ、ほんの少しだけ引きつる。

「そ、それって……まさか……」

「うん。冥き途だよ」

冥き途にも川があるが、死者の通る川とは別に『外』と繋がっているのか生きた魚のいる水溜りのような場所があり、そこで食事のためにも修行の合間をぬっては釣りでご飯の種と心を癒していた。

「普通の魚は結構連れたよ。レインボーとかイwanaとかヤマメとか。外の川と繋がってたんだろうね。」

でも流石に全長7mを超える化け物には驚いたよ」

うん。流石にアレには驚いた。

「全身が毒々しい紫色に染まったアンコウ？っぽい魚でさ……からだから骨が六本突き出てる、それが足のようにちよくちよく動いてて、足を見た瞬間食べる気がなくなったわ」

「足を見る前は食べる気があったの?!」

うん。一応ありました。食えるものは何でも食べます。だってひもじいもん。

「結局吊り上げた瞬間こつちに敵意丸出しで襲い掛かってきて、自分と一緒に釣りを見てたりツチで倒したよその魚」

ポツポツとそのときの事をサティアに向かって話し始める。

ここで玖楼はかなり説明をある程度軽くしているが、その実はかなりひどかった。

玖楼一人では吊り上げられないほどの重量の魚をまずリツチの魔術で竿を強化して、

ついでに体も魔術で強化して吊り上げたまではよかったが、その着地先はリツチがいたために、

何百キロもある巨体がりツチを踏み潰すと防御力はきわめて低いリツチの体が散骨され、

剣は持たずに釣竿だけの玖楼はりツチが復活するまでは釣竿を武器

に巨大な魚を相手に戦っていた。

結局、途中でリッチがわざと復活していない事に気がついてリッチの頭蓋骨を盾に使い始めてからリッチが復活し、盾に使われると言う状況から脱出するために即行で巨大魚を退治した。もちろん玖楼を巻き込んで。

多少話を軽くしたとは言え、玖楼の尋常ならざる生活の一部を耳にして純粹に驚き、玖楼を見つめるサティア。そしてその様子を見て苦笑する玖楼。

「やっぱり……引くよなあ」

「ううん。別にそういうわけじゃないの。話してた玖楼が楽しそうだったからね」

「楽しそう？」

「玖楼は気がついてない？玖楼が自分や周りの事を話すときはすごく楽しそうだよ？」

「楽しそう……そう……楽しんでるのかあ、自分……」

何か感じ入ることがあるらしいのか、小さく呟くと。視線を釣竿へと移す。それを再び構える。

「……もうちよい釣ってくか」

「そうね」

サティアは玖楼が釣りするのを見たり、釣りを玖楼から習ったりして、二人は時間を過ごした。

●

二人が釣りを止めて目的へと向かうのは昼頃へと差し掛かってからであった。

予想外に長く時間をすごし、そして同じく大量の魚を連れたために、必要分だけを道具袋にしまつと残りを川に流し、

出していた道具を片付けると川に囲まれた釣り場からサティアの先導にしたがつて離れてゆく。

釣り場のあつた場所のさらにおく、林の間にある僅かに整備された道を通ると今までの林や森があつた場所とは違い、

中央にある一本の大樹を中心に広がる丘へと到着する。なだらかな丘には色取り取りの花が咲き乱れており巨大な大樹とあわせ、他者を圧倒するような光景がそこにあつた。

しばし景色に圧倒されていた玖楼だが、サティアが腕を引っ張り丘の中央にある大樹の麓にまで行くとそこで手を離し、

大樹とは逆の方向へと、今まで通つてきた道のほうへと無言で指を挿す。

「これは……」

「ふふ、どう？すごい景色でしょ？」

ただただ美しかった。底からは今まで通つて来た道だけのみならず、

釣り場や牧場、

そして北華鏡の集落全体を見渡すことの出来る場所であった。

釣り場は誰もおらず静かに魚が泳ぎ、

牧場では大量の羊達が放牧されそこから草を食べており、

教会の中へと誰かが入ってくるのが見えれば、

宿から馬車が動き出すのも見える。

村の外へと目を向ければ魔物が優雅に空を飛んでいる姿が見え、
少し離れた場所には遺跡のような建物も見えてくる。

そう、ここからはこの田舎のような美しい風景がまるで一つの絵の
ように見えてくるのだ。

「すごい……なあ……」

玖楼が長らくこういう普通の自然を見たことはなかったために、普
通にこの光景に感動していた。

その横でサティアは大樹の元で座り込むと何処からともなくバスケ
ットをとりだしそれを開く。

そこから漂ってくる食べ物の匂いにつられそちらへと視線を向ける
と、

「さ、お昼にしましょう?」

バスケットの中には丁寧に切りそろえられたサンドイッチが並べら
れており、

未だに焼きたてのような香ばしい匂いを発していた。

考えるのに1秒、思考を即決しよう死してくれたサティアのために
も座り込み、サンドイッチを一つ受け取る。

見たところ挟んである物はトマトとレタスに何らかの肉。

明らかに買ってきた物ではなく作って用意したものだというのは見た目でわかる。

「これは……？」

「今朝、玖楼が混乱している間にちよつとね」

つまり玖楼が完全に復帰するまでの1時間の間にそろえた、と言うわけだ。

受け渡されたサンドイッチ口の中へと運び味わいながらそれを食べる。

その様子をサティアが不安そうに見つめながら玖楼のリアクションを待ち……二カ、つと玖楼が笑みを浮かべる。

「んまいっ！」

そのまま手の中のサンドイッチを口の中に詰め込むと、次のをバスケットから取り出す。

その様子をサティアが小さく笑いながら見ると、自分にもサンドイッチを取り、それを食べ始める。

そのまま、景色を見ながらサンドイッチを食べてゆく。

絶景と言つべき景色を見ながら食べる昼食と言つのはかなり豪華なことである。

だが、それでも、

サティアの表情には一点の陰りが挿していた。

それは嫌悪や憎悪と言った負の感情ではなく、悲しみ。

「サティア……？大丈夫か？自分がなんかしたのか？」

心配する玖楼を他所に、サティアはううんと首を横にフリただ、と言葉を出す。

「ただ……ただ、何で……何で玖楼は」

次の言葉で玖楼の動きが完全に固まった。

「何で玖楼がそんなに悲しそうに笑つか分からないの」

気持ちよかったはずの風が何処となく涼しく感じた。

●

サティアの言葉が放たれてたつぷり数秒、玖楼とサティアが無言でお互いを見つめていた。

サティアは悲しそうに真っ直ぐ玖楼を見つめ、そんなサティアを玖楼が信じられないように見ていた。

だがそれもそれだけ。そのあと驚愕の表情が玖楼の顔から抜け落ちると、

だれにでも分かるような悲しそうな笑みを浮かべる。

「……なあサティア」

「…………ええ」

「自分さ……………こつちへ来てから年をとったんだ。
こつちへ来て七ヶ月しかまだ経ってないけどさ、1歳年をとっちゃ
まったんだ」

玖楼の儂げな印象が強まる。

「言つたよな…………自分つてもとは別の世界っぽい所から来たつ
て。自分からすれば未来なんだよなあ。」

魔法なんてものは存在しないけどすごく便利な世の中でさ。動かな
くても何でも手に入るような世界なんだぜ？」

サティアの悲しげな表情は変わらなく、静かに玖楼の言葉に耳を傾
けている。

先ほどまで吹いていた風もどこか力が弱々しく感じる。

「この世界に来たときさ、真っ先に帰らなきゃって思つたんだよ。
だって自分は生きてるしさ。親だって生きてるんだ。」

心配したのなら警察に連絡して自分の搜索を頼むはずだ。友達とだ
ってまた逢う約束をしていたさ。一人が消えたところで社会の歯
車は狂わないが、

それでも自分を心配する人や自分が逢いたい人ってのはいっぱい
いるんだ。それに自分の世界はすごいんだぜ？

この世界じゃ水が欲しかったら毎日井戸まで行って一日分の水を水
がめに集めなきゃいけないんだけどさ、自分の世界じゃ違うんだ。
家から出なくても台所へ行けば蛇口一つ捻ればすぐに水が出てくる
んだ。飲んでも大丈夫なほど綺麗なやつが。

便利だろ？家具だってパソコンを使えば家から出ずに注文して翌日

には届くんだ。料理もそうだ。

家から3分も歩けばコンビニがある。材料なんてなくても。料理なんて出来なくても。コンビニへ行けば既に完成したものが売られている」

サティアはパソコンもコンビニも知らない。だが言葉からその利便性を理解していた。

そして同時に、玖楼の言葉が悲痛なものへと変わってゆくのも感じていた。

「自分さ、……この世界へ来て帰れないって言われたときは正直シヨクだったし、

幽霊や今まで本やゲームの中でしか見たことのないような世界が広がっててさ、すごく戸惑ったし大変だった。

でもリタやナベリウスに救われて、リッチと語り合って、少尉と理解しあって、自分が来たこの世界が好きになってったんだ。

リタは少し心配のしすぎだけどやさしいのは分かっている。

ナベリウスも無口だけど、言葉に出さないだけで実は感情的だということを知ってる。

リッチもあんな姿になったのはものすごい経歴があったはずなのに、それを乗り越えて普通でいた。

少尉も流れ着いたはずなのに自分を同郷の友と呼んでくれた。

ギユンギユスカーのメイドはノルマと金に関してはうるさいけどとても信用の置ける人間だ。

そして……」

サティアの目を見る。

「……そしてサティアの事は正直好きだ。

そして皆のいるこの世界が自分は好きだ。好きになれた。まだまだ

この世界の本の一部しか知らないけど、
その一部を自分は好きだと断言できる。だからさ……だからさ――
「怖いんだよ」

玖楼の様子が豹変する。僅かに体を震わせながらまるで自分の体を
抱くように手を回し、
自分の身を護ろうとするように体を縮める。

「だって、だっていきなりこの世界に現れたんだぞ？リッチやナベ
リウスでも俺が現れた原因も方法も分からない。
だから何時だって消えることはあるかもしれないんだ。いやだ、消
えたくない。消えたくない！」

まだ、この世界に着たばかりなのに、好きになり始めたのに、戻れ
ても戻りたくない！

緩やかに腐ってゆくあんな世界より、ここで地位も金も名誉も社会
も何のしがらみもなく世界を見て生きたい！

消えたくない！消えたくないんだ……！考え出したら今にも消えそ
うで怖いんだよ……！」

それは、玖楼が始めて胸のうちから出して感情の全てなのだろう。
リッチにもリタにもナベリウスにもこれは分かっていたことなのだ。
サティアが気づけて彼らが気づかないはずがない。

だが、彼らには何も出来ない、何もしてやれない。だから何も言わ
ず、そのままにしていた。

だがサティアは違う。

もし資格があるとしたら、それは『踏み込む』資格。

そしてサティアには――

「玖楼」

「自分は……自分は……ンッ！」

——踏み込む勇気があった。

玖楼の唇にやわらかい感触がした。甘い匂いが鼻孔をくすぐり頭を痺らすように満たすと同時に、

暖かい物が体を抱いていた。玖楼の中であふれていた恐怖が少しずつだがその感触により消えて行く。

定まってなかった玖楼の焦点が段々と落ち着き目の前の現実を受け入れ始める。

つまりサティアにキスされ、その腕の中に抱かれていると言う事実を。

抱擁から逃げる事とは敵わず、唇を離れた隙に戸惑いの表情でサティアを見つめる。

「な、あ、サティ——?!」

戸惑う玖楼に対してサティアはただ優しく玖楼を抱き包み、

「——大丈夫よ、玖楼。玖楼は……ここにいるよ」

「ッ！」

「感じるよ。暖かく、壊れそうで、寂しそうな玖楼の事を、誰よりもすぐ傍に……強く……強く感じるよ」

「さ、サティアあ……」

「玖楼は夢でも幻でもないよ……ここに、私の腕の中にちゃんと存在している。『ここに』いるわ。
だから迷わなくても悲しまなくてもいいの。玖楼はここに存在しているの」

「それでも、俺の存在は……！」

「居場所がないならなるわ」

「サティア……？」

その丘にいるのは二人だけ。村からの距離は遠く、辺りに人の気配はなく、感じられるのはお互いのぬくもりと風の感触。

日差しから二人を隠すように大樹の陰が二人を護り、太陽の光から二人を遠ざける。

「私が、玖楼の居場所になるから——」

その言葉が玖楼を、そしてサティアの両者を何よりも縛る呪いを得るきっかけとなった言葉であり、
それと同時に両者を結びつける最愛の祝福と化す言葉でもあった。

「もげる」

「急になんですか」

「いいえ、私が出た新たな知識によるとこついつ場合はそついつのが正しいらしいから言つたまですよ」

「その知識は何処から」

「トモダチからよ——お、凄いわねえ……あら、本当に初めてなのかしら」

「……マリーチ？人に書類を押し付けておいて何をしてるか聞いてもよろしいでしょうか？」

「何つて、くすくす。うふふつ。私がする事と言つたら……あら、すごい。やるわね」

「……いいです。もう聞きません。あまり人のプライバシーを侵害するのもどうかと思いますよ」

「いいのよ。『トモダチ』だから」

「友達、ですか」

「ええ、そうよ」

「ならもう片方のお友達にもどうぞ一声かけてください。もうすぐそこまで来てますよ」

「あら、もう来てたのかしら？」

「ええ」

「……そう、来たのね——食欲魔人」

第六話 告白（後書き）

名前：黒川玖楼

レベル：71

称号：居場所を見つけた異邦人

主武器：パラディウム

予備1：リッチ製作の釣竿

予備2：なし

防具：

ドレスシャツ（魔導皮膜処置）

ダメージジーンズ（魔導皮膜処置）

旅人の衣（魔導皮膜処置）

装備：マルウエンの腕輪

戦闘スキル：

必殺・飛燕——Rank E

必殺・我流——Rank D

中型剣——Rank D

魚釣り——Rank B

状態：混乱3 魅了3

HP：380 / 380

MP：0 / 0

TP：64 / 64

FS：50 / 100

攻撃力：193

攻撃回数：5

防御力：108

防御回数：15

魔法攻撃：0
魔法防御：98
肉体速度：20
精神速度：9
攻撃属性：万能
防御属性：万能

発動スキル：

努力家？——迷宮時は1歩毎に経験値獲得。戦闘時は獲得経験値が上昇する。

見切り？——攻撃を受ける際に、確率で発動。敵の攻撃を完全回避する。

先手？——戦闘開始時に確率で発動。開始時の硬直フレームを0にする。

釣り？——ミニゲーム『釣り』で魚が釣れやすくなる。

サティアが好き——戦闘メンバーに『サティア』がいる場合、攻撃力と防御力が5%上昇する。

ステータス異常と釣り関係と称号が変わっただけです。

釣りスキルが高いのはそれが趣味なのと冥き途でひたすら食料調達にがんばってたからです。

今回のお話を読んで某PSゲームを連想したのなら咲夜と何時かのみに行きましょう。

作者はBOFの大ファンです。世界観が好きです。ちょこつとネタが混ざるかもしれません。

名前：サティア・セイルーン
レベル：69
称号：放浪の探求者
主武器：戦意喪失の投石紐
予備1：なし
予備2：なし
防具：麻の衣服
装備：なし
戦闘スキル：
魔術・戦意——Rank A
魔術・強化——Rank C
魔術・治癒——Rank A
魔術・召還——Rank B
HP：460 / 460
MP：150 / 150
TP：60 / 60
FS：50 / 100
攻撃力：79
攻撃回数：5
防御力：69
防御回数：10
魔法攻撃：126
魔法防御：80
肉体速度：13
精神速度：19
攻撃属性：万能
防御属性：万能

発動スキル：

MP再生？——戦闘時は一定フレーム毎に、移動時は一定歩数毎にMPが回復する。

賢者の魔力？——消費MPが10%軽減。習得レベルで軽減量が高くなる。

神力遮断？——神の力が遮られ、能力全般が25%低下。

玖楼が好き——戦闘メンバーに『玖楼』がいる場合、攻撃力と防御力が5%上昇する。

サティアにも恋慕関係スキル追加です。ついでにレベルを少し上昇させましたね。

さて、戦女神の原作を知る人でしたらこれが明らかな悲劇の始まりだと分かるものなのでしょうが、

この物語ではどうやって進むかは今のところは内緒です。ただ、一筋縄ではないでしょう。

とりあえず数話以内にはこの1章は終わりそうですので、本格的なバトルなどをお待ちの方はもう少しだけこの空気に耐えてください。

たぶん次回は軽いバトルですから。たぶん。

そしてついに一線越えちゃった。そして覗き魔マリーチ。食欲魔人の登場。

色々と加速してゆく1章ですが、あくまでもお・り・が・みベースなので全体的に戦女神のシリアスが、

お・り・が・みのギャグに侵食されている感じです。ネタもなんとか投下しています。

アンケートはまだ一応続行中です。まだの方はご協力下さい。

さて、ではそろそろ話すことのネタがないので、さよならさよなら。

第七話 幕を開ける舞台（前書き）

アンケートは大体終了ですね。

第七話 幕を開ける舞台

1週間も滞在すれば大抵の事には順応し、周りのものとは顔見知りにもなれる。

北華鏡の村はそれほど大きくはない。故に知りえる人間もそう多くはない。

宿屋に泊まっている人間の大半は1日や2日休む程度に泊まる冒険者や旅人か、羊毛の買い付けに来た商人。

それを抜けば宿屋の従業員ぐらいなので顔や名前を覚えるのに時間はそう要らなかった。

集落の方でもそうだ。

住民は割と冒険者との距離と近い暮らしているために警戒心は無く、子供達も積極的に旅の話进行せがんでくる。

農家の者は作物をあまったときには分けてくれたり、世間話をしてくれる程度には仲もいい。

村全体が一つの家族のように機能している、『優しい』場所だと思える。

この1週間の玖楼の生活は簡単なものであった。

『あの』日以来、玖楼はサテアと同じ部屋に泊まる事に文句を言わぬ様になる、逆に常に共にあることがよく見られるようになる。朝食のときも、散歩のときも、鍛錬のときもほぼ四六時中一緒に居るように見られる二人は、

完全にバカップル認定されていた。

別に見せ付けるようにしているわけではなく、ただただ自然体な

ただだが、それでも他者を魅了してやまない容姿のサティアと、そして珍しい黒髪の青年と言う組み合わせはやけによく目に映る。だからこそ特に目立つ行動をとるまでもなく二人が一緒にいる姿はよく目撃されていた。

ただ、玖楼としてはイチヤイチヤしていたばかりではない。

日々の鍛錬はマルウエンの腕輪をつけてちゃんと続け、街道に出る魔物と戦って戦闘経験も増やしている。

まだ強くなる感じはしないものの毎日の積み重ねが大事だということを知っているために決して手は抜かない。

教会にだって何度か訪れて『現神』と『古神』の関係を聞いたり、リッチやナベリウスが教えてくれなかった外の世界の常識についても色々知った。

たとえば、大昔に三神戦争と言う戦争が起きた。

この世界には機工女神、現神、古神の三つの神々が昔はいて、その三者が世界の行く末をかけて戦い、人々の信仰を得た現神は『邪神』である古神を打ち砕き、見事世界に安寧と平和をもたらした……との事である。

機工女神の事は深くは言及されていないが、古神の『邪神』扱いに関しては若干悩むところもあった。

何せ、ナベリウスが『タルちゃん』と呼ぶ古神が冥き途には居り、話を聞いた分には『タルちゃん』が悪を象徴するような神だとは到底思えなかったのだ。

やっぱり勝者は汚いなあ、とか思ったりもする玖楼ではあったが、それだけでは世界については決められない。

玖楼が冥き途を出た理由はサティアと逢うためと世界を見るためである。

最初は数ヶ月ほど滞在する予定ではあったが、サティアの勧めもあって数日後には出る腹積もりであった。

だからその前に出来ることをするためにと、玖楼はここ最近宿屋で魔物の被害報告を受けては討伐に乗り出していた。

北華鏡の集落のような小さい辺境の村では冒険者ギルドの支部なんてものは存在しない。

ギリギリで騎士が一人いるかないかだろう。そのため、この辺りの安全を図るために玖楼は危険な魔物を倒そうとしていた。

●

場所は北華鏡の集落の宿屋1階、朝食の時間を少し外れたために今ではがらんとしていて人の気配は少ない。

酒場や食事どころとなっている1階の奥、店主がカウンター裏でせつせと仕事をしている場所の前に玖楼の姿がある。

ここ最近ずっと横にいるはずの女性の姿は無いのが若干珍しくも感じられるはずだが、

それとは関係なしに店主は玖楼と会話を続けていた。

「それでおっさん、確か近くに強いのがいるんだよね？」

「まあ、そうなんだが。頼んじまってるのか？」

「旅なんだし出る前に出来ることはしておきたいからな」

「そうかい。まあ、冒険者とかにやあ普通に渡してるような類の情報だけれども、

相手は平気にこっちを襲ってくる化け物だって忘れないでくれよ？」

「んな事わかってるって……ボソ（もっと化け物っぽいのと暮らしてたし）」

「何か言ったか？」

「いんやなにも」

「……っとほれ、これが情報だ」

カウンターの向こう側、掲示板に貼り付けられた紙のひとつをはがすとそれを玖楼へと渡してくる。

受け取ったそれを玖楼が覗き情報を頭の中に書き込んでゆく。

『目標：木精の討伐
ドライアド』

場所：北華鏡の集落の外れ周辺

状況：最近村の外れで人を頻繁に襲う木精が報告されている。

木精は本来大人しい気性の筈だが、気が立っているのか頻繁に襲ってくるのが分かった。

理性があるのか無いのかはわからないが、戦意を奪っても再び襲ってきて正直きりが無い。

罰当たりではあるがそろそろ討伐して欲しい』

「木精って言えば立派に精霊だよな？」

「種族としてはユイチリ（木精の一種）ほど理性は無いが豊かな自

然の象徴ではあるな。

温厚な性格をしているのが大半なのだが何故だかこの『一団』は人を襲って来るんだよ。

本来なら自然を汚したりする者や魔物相手に戦ってくれるはずの存在だがどうも様子がおかしくてなあ。

幾ら戦意を奪って森の中へ帰しても再び現れては見つけた人間を襲うんだ。

農家の人間が二人ほど、まだまだ未熟な冒険者が数人襲われて今も上の部屋で寝込んでるよ」

「木精ねえ……うん。この程度だったら何とかなるはずだ」

「お、本当か？ここらは自衛手段が少ないうえに騎士は一人しかないから村から離れることも出来ない。

ここらに来る冒険者はそう強くは無いし、お前のようなやつがいると助かるぞ。

無事討伐できたら証拠になりそうなものを持って帰れば報酬をだすぞ」

「了解。んじゃ早速行って来るよ」

貰った紙を道具袋にしまいながら背を向けて歩き出そうとする玖楼の背中に最後にと、言葉が投げかけられる。

「嫁さんには言わなくていいのか？」

「ブッ」

その言葉に思わず噴出してしまった。

「誰が嫁だよ?!」

「いやいや、隠さなくていいんだぞ?正直サティアちゃんはこの村へ来てから競争率が凄まじい子だったから、皆どうやってお前が落としたか気にしてるんだぜ?」

同時に恨まれもしてるよ。襲われたし。

「大体お前らの存在は村公認だ」

マジか。

と、そこでやっと自分を持ち直す。

「サティアさ……戦うの嫌いなんだよ」

「……あー。なるほどな」

「武器も投石紐で相手を傷つけずに戦意だけ奪って戦いを収めようとするんだよ。そこらの魔物ならいいけど、こういう手配書がまわってるようなやつ相手だと……な?」

「ふむふむ。なるほどそれはよく分かった」

わざとらしくうんうんと店主が頷く。そのコミカルな動きにどこか悪寒を感じる。

勘と言う物は結構馬鹿にできないものだ。なのにそれが嫌な感じを予感させている。

ふと、背後に誰かの気配を感じる。

「……だそうだが、若奥さん？」

「……へえ」

ここ最近になって聞きなれた声。いつもなら嬉々として受け入れる声だが、今この瞬間だけは受け入れがたかった。

ゆっくりと、ギギギと言う音を鳴らすように首を回すとその背後に今だけは会いたくなかった人物がそこにいた。

燃えるように赤い髪に白と青の服装。ニツコリと浮かべる笑みは美しいが……この時だけは凄まじい威圧感を感じる。

「おっとお、たいさーん」

店主が逃亡した。まで、逃げるな。俺も逃がせ。つか逃げる。

「何処へ行くのかしら？」

しかし まわりこまれた！

サティアのてがやんわりとした動作で肩へと置かれるが、

そのての握力は見た目と裏腹にメキメキと骨を軋ませるほどの力で玖楼の肩を締め付けていた。

カウンターの奥の厨房から覗き見している店主が修羅場とか言いながら顔を青ざめさせているが、

お前は絶対に許さない。後で覚えてろよ。だけど今はお前の身より我が身が超ピンチ。

助けて神様。今ならどんな神様でも信仰しちゃう。いや、マジで。別に無神論者でもないしいけるよね？

たすけてナベリウス！リタ！リツチイイイ！少尉イイイ！マリ
ーちゃああああああん！！！！

『うふふふつ。くすくすくす。い・や・よ』

マリーちゃああああああん？！返事予想外だったけども
つといいのだと嬉しいなあ！

肩の圧力がさらに増す。微妙にだがサティアが段々と般若に見えて
きて激しく寒気を感じる。

「……今、別の女性を、しかも美女の事を考えなかったかしら……
？」

「か、神頼みしただけつすよサティアさん！極東には八百万の神の
考えがありましてですね」

「あら……おかしいわね………信仰している神はいないんじゃないな
かったかしら？」

中々直視しにくい状況ではあるが瞳を覗いてみれば瞳の色からハ
イライトが完全に消えている。

恋人のまさかの属性に若干と言うよりもかなり戦慄するも神頼みさ
えも封じられ完全に逃げ場の無いこの状況、

頭の中に行く通りものパターンが浮かぶがすぐさまサティアには通
じなさそうと否定する。

人生で一番ピンチかもしれないと思った瞬間に、圧力が消えた。

やれやれとため息を吐くサティアが何時もどおりの雰囲気へと戻っ

ていた。

「玖楼？……あまり私を心配させないでね。玖楼が私のことを心配してくれているのはわかるけど、

私だって玖楼の足手まといになんかならない……なりたくないの。だからこんな風にこそそしないでね？

じゃないと私、のけ者にされているようで寂しいから……」

「な、別にのけ者にしてるわけじゃないぞ？！ただほら、サティアって無駄に傷つくのを見るの嫌いだろ？

だからさ、お前が気づかないうちにパッと行って終わらせようとか考えてたんだけど……」

「それでも……それでも私はなるべく離れたくないわ。戦えなくても治療魔法ぐらいはできるのよ？」

サティアが玖楼の瞳を捨てられた子犬のようなうるうるした表情で見つめてくる。

流石に罪悪感に耐え切れなかったのか、わかった、わかったと言い、

「俺が戦うから後ろにいるんだぞ？」

「わかってる。それに私はそこまで弱くは無いわよ？」

「そりゃあ……わかってるさ」

何よりも玖楼自身が、彼女が守られるだけの存在ではないということを知っている。

仲直り……のようなものをした二人をこっそりと伺っていた店主がおくから現れてきて、

「うんうん……若いつていいなあ」

「オメーは許されねえから」

「えっ」

「終わったら待ってるよ……？」

「……ほ、報酬はたっぷり用意するぜ！」

「分かればよろしい」

お金は魔物を倒せば手に入るので実際はかなり財政には余裕があるが、それを決して口にはしない。
お金というものは幾ら有っても装備や食料を整えたりするので消えてしまう。

と、そんな思考をしながら店主に背を向けて宿の外へと向かう。

「あ、待つて」

早足で追いついてくるサティアを気にしながらも情報のかいてある紙を懐にしまう。

情報に書いてある限りの強さによれば自分には敵わないものだろうからそこまで気負う必要は無い。

宿入り口のドアを押し開けて外へ出ると、まず空を見上げる。

普段は澄み渡った蒼穹が映るそれではあるが、全体に雲がかかり灰色の空を見せていた。

空気も肌で感じる限りは湿っており、湿気を感じる。

「……これは」

空を見上げながら声をこぼす。

「一雨来そうだなあ」

早く終わらせて、宿でサティアと一緒にお茶でも飲もうと、そう思いながら追いついてきたサティアと並んで歩き、
書かれていた木精の出没エリアまで少し早めの歩で向かい始めた。

●

やはり村の人が襲われたという報告があっただけに、現場自体は
そう遠くなかった。玖楼とサティアの足で歩いて1時間ほどの距離
であった。

木精が生まれやすいと言える、綺麗な川が流れる雑木林の中、その
姿は目撃できた。

人間に木の根が絡み付いたような姿であり、秘部と胸の突起以外は
完全に裸であり見ているほうが赤面しそうな格好である。

とは言え、完全に凶暴化し本来は緑のはずの瞳の色が警戒色の赤に
変貌しており、

何時も見かける能天気さからは考えられない凶暴性を感じる。

こつちからは見えて相手からは見えないようにギリギリの距離まで
接近したところから玖楼とサティアは様子を伺っていた。

「二……四……六……八、って予想外にいっぱいいるな。他にはい

るのか？」

「ちよつと待つてて……パズモ、お願い」

体を隠せるような茂みの中、サティアが両手を突き出すようにして軽く念じる。

突き出した両手の中に風の動きが生まれそれが小さなつむじ風を生む。段々とその風が強まってゆき、

最終的にはリング大の大きさの風の塊になったところで……弾けた。そこから緑髪、白いローブ、風の塊と変わらぬ大きさを持った、妖精のような少女が現れた。

パズモ・ネメシス。

サティアが言うには昔からサティアを守ってきてくれた小さな友達で、使い魔であるとの事。

こついう使い魔は普段主の体の中に潜み、召喚にしたがつて現界するわけだが、

このパズモは付き合いが長いのかサティアの許しもなくたまに現れては好物のリングを食べてるところが目撃されている。

ちなみにこのパズモ、天使族と言う妖精の中でも非常に珍しい種族であったりする。

サティアの掌の上に召喚されたパズモをサティアが顔の近くまで持つてくる。

「お願い。ここら辺で暴れている木精の数を知りたいの」

「……………！！」

パズモには人語を喋れないが、その動作と操れる風の動作で了承をサティアに伝える。

それを見てた玖楼がパズモへと向けて小さな声で、

「しっかりやったら、帰ったらリンゴ奢ってやるぜ」

その言葉にパズモの目が輝いた。

ブンブンと擬音が見えてきそうなほどに頭を振るとサティアと玖楼の周りを1周してからうつそうと茂った雑木林の中へと飛んでいた。

姿が小さく気配も小さいために素早く木の合間を縫って飛び回り素早く数えながら動き回る。

やがてその役目を終えたパズモがサティアの元へと戻るとブンブンと、妖精の小さな羽根を鳴らしながら情報を伝える。

「……………！！……………！！」

「えっと……………全部で16体？」

「なにその数こわい。これは宿屋のおっさんフルボッコ確定だな」

もしくは追加報酬。

「多くても六体ほどって考えてただけ……………やはり土地が関係しているのかしら」

「たしか精霊種は自然が豊富で美しい土地に現れるんだよね？」

特に木精は木々が力強く育ちなおかつ綺麗な水が傍にあると増えやすいつて」

「ここは条件としてはうってつけね。村の中自体は神の加護で安全なはずではあるし」

「そうだな……と」

パズモが玖楼の肩に止まり、リンゴの事を忘れないようにと催促するように耳を引っ張る。

それを小さく苦笑しながら分かった分かったと答え、腰に挿してある剣を抜く。

姿勢を低くした状態で何時でも前へ出れるように体勢を整える。

「行くの？」

「ああ」

「……勇者の付術！」

玖楼の体が一瞬淡い光に包まれると、体に力が漲るを感じる。サティアが申し訳なさそうに玖楼を見る。

「今回は回復以外にはこれしか出来ないから」

「それで十分……君がいるだけで十分、十分強くなれるさ！」

玖楼の体が茂みから飛び出し、肩に乗っていたパズモが玖楼から離れサティアの元へと止まる。

「先手必勝！身妖舞！」

先手を取らんとばかりに木精を横から斬撃で真つ二つに切り裂く。この一撃で自分の攻撃なら十分オーバーキルだと確信し、身妖舞の使用を控える事を頭に入れる。玖楼はこの世界へ来て強くなりはしたが、その体のベースは現代の日本人。魔力は持つてない上に闘気を使ってもその上限はこの世界の戦士と比べれば平均よりは低い。玖楼はこの世界の人間と違って、魔物と戦えるような体では生まれていないため、それは絶対的に仕方無いことなのである。

だからこそ、考えて戦わなければいけないと、そう教わりもした。

身妖舞で木精を一体倒すも、まだ他の木精は急なことで玖楼の奇襲には対処し切れていない。

この隙に玖楼が一番近かった木精3体に切りかかる。左斜めに切り裂き木精を軽々と両断したままその横の木精を胴薙ぎで両断、3体目を剣で心臓部を突き刺す。死んだ木精が次々と一気に歳をとるように枯れ始めて行く。

この時点でやっと状況へと追いついたのか木精たちが戦闘態勢へと入る。それを崩すように先頭の木精に、

剣に突き刺さった木精を蹴りで押し出しながらぶつける。仲間の死骸をぶつけられ倒れはせずともよろめきはし僅かに動きが鈍る。

そしてすぐ後ろにいたもう1体の木精と密着する。

「身妖舞！」

本来は1体を切り裂くほどの力しかない身妖舞ではあるが、通常よりは多めの闘気を詰め込み切り裂く。

発せられた斬撃が木精を2体とも両断する。

「これで6体！」

サティアが施してくれた強化魔法は命中力、攻撃回数、そして攻撃力を強化する簡単な強化魔法である。

だがそれは前衛にとつては必要な要素の揃った適切なサポート。それを受けている玖楼の攻撃はいつもより若干鋭くなっており、接近してきた木精にたいして臆す事無く踏み込んだ。

なによりも、かつこ悪いところを見せて不安にしたいくないという気持ちがあつた。

当初いた16体の木精も6体が瞬く間にやられ10体へと減る。だがここで戦闘の準備が完全に整つたために、木精達も陣形を整えて玖楼へと接近した。

それを玖楼は先頭にいる4体の木精を視界に入れつつ認識し、剣を振るつた。真つ二つに両断するように放たれた一撃が僅かに避けられ、

先頭にいた木精の右半身をズタズタにする程度で収まる。本来なら穏やかな緑色の目は怒りの赤色に染まり、

玖楼へ向けて容赦の無い一撃が振られてきた。だが玖楼はそれをよけることも無く、再び剣を振るつた。

木精への一撃と玖楼への攻撃があつたのは同時であつた。その結果は対照的であり魔導皮膜に護られた服装の玖楼には傷一つ無く、それに対して木精はその体を縦に真つ二つに両断され、その存在を散らした。

次へと移ろうとすると、玖楼の動きを阻害するものが現れた。足元を覗けば足首に木の根が絡み付いているのが見えた。

「チ」

軽く舌打ちし、一瞬でも体の動きを止めたことに悪態をはきそうになって……やめる。過ぎたことは過ぎたことだと言いつけ、足を縛られたままに剣を振るう。3体同時に襲ってきた木精のうち2体の攻撃を剣を握っていない左手で受け止め、最後の1撃を剣で受け止める。爪の様に尖った木の根が服へと突き刺さる。だが魔導皮膜を超えることは無く玖楼に大きなダメージは無い。

根を両手で吹き飛ばすと両手で剣を上段に構え、軸足とは逆の攻撃に使う右足と、手の中の剣に持っている闘気を注ぐ。

「超完璧にたぶんオリジナル技1号！」

そして攻撃のためによってきた1体の木精を射程に入れながら剣を地面へと叩きつける。

地面へと叩きつけた弾みに闘気が溢れ出し爆発を起こす。その衝撃で足を縛っていた根ははじけ、周りにいた木精も爆発により体がボロボロにはじける。

「エクスプロージョン！！」

遅めに接近してきたために唯一体が持っていた木精の体に1回転からの回転蹴りを胴に叩き込む。

蹴った先から闘気が爆ぜ、胴を中心に木精の体がバラバラに弾け飛ぶ。

遠心力で加速したからだの動きをそのまま止める事無く、愛剣であるパラディウムを手槍の様にもち、

「追加持ってけえ！」

それを木精に投げつけ心臓を貫いて木に串刺しにする。

今の一連の動作で5体を倒し、残り5体。

残っているのは詠唱にはいつている木精が3体と、木の根で動きを妨害したのが2体。

体を止めないことこそが勝利への道と、教わったことを反復するよううに攻撃の動作から動きを止めずに前へ出る。

そこで、大地が割れる。

玖楼の足元で局地的な地割れが発生する。人一人を軽く飲み込める程度には大きな裂け目。

「落ちるかよ！」

走り、飛び、着地する寸前とはかく、地に足がついている間に地割れを起こしても回避は簡単だ。

軽く飛び越えながら大地へと着地すると、その地面が裂ける。

……狙ってたのはこれが！

同時に四方八方から木の根が襲ってくる。ここで終わらすつもりなのだろう、その意図が見えるコンビネーションだ。

だが、玖楼はここで、こんな簡単に負けるつもりはない。昔の彼ならまだしも、今の玖楼に『この程度』で負ける理由はない。

迫ってきた木の根の一本をつかむと、それをつかむ腕の力だけで体を前へと投げる。

「お、っらあああ！」

前へと飛びながら足を突き出し、とび蹴りを1体に食らわせ、その頭を吹き飛ばす。
頭を蹴り飛ばした反動を利用しそのまま体を木のほうへ——剣が刺さった方向へ向ける。

ここで初めて勝機など最初から無かったことに気がついたのか、木精達が背中を玖楼へと向けて逃げ出そうとする。

それに気がついた玖楼が即座に木から剣を抜き、前へと体を飛び出しながら剣を振るう。

剣から2発の斬撃の塊が振るわれ、二つとも別の方向へと……違う木精に吸い込まれその存在を散らす。

地面を蹴り、体を大きく飛びあがらせ、再び剣を槍のように投げつけて木精を貫き地面へと縫い付ける。

残り1体。

道具袋に手を入れると、そこから細長いものを取り出す。

——釣竿である。

「いよつとお！」

それを1回後ろへ引くと、大きく前へ振るう。釣竿から飛ばされた釣り針が木精の喉に引っかかり、

木精が後ろへと倒れこむ。それを逃す玖楼ではなく、そのまま1回強く竿を引くとそのまま体を前に出す。

竿の糸が切れるのと引き換えに木精の体が大きく浮かび上がり、玖楼のほうへと飛んでくる。

その体へと向けて残った僅かな闘気を足に込め、前に踏み出しつつ回転蹴りを準備し——

「大人しく、死んどけ！」

爆発と共に最後の木精を散らした。

●

——しまったあ！戦闘のテンションで何か激しく恥ずかしいセリフ言いまくったあ！

剣と釣竿をしまった時には既に遅く、戦闘中の自分の言動を思い返して若干ブルーになる。

絶対リッチやナベリウスの様に技を使うたびに名前を叫ばないようにならばるとか考えてたのに、

それがまったく無駄で、意味が無かったことを認識する。鬱になりそう。

そんな頂垂れる玖楼へとサティアが寄ってくる。パズモは帰ったのかそこにその姿は見えない。

「あ、頬切れてるわよ」

「え？」

指を頬に当てると確かに頬に血が付着していた。木精は木で体が出来ているために斬られたりしても、

決して血は流さないために、必然的にこれは返り血ではなく自分の傷から出た血だ。それを手の平でふき取る。

たぶんだが、地割れから脱出したときか囲まれたときについたものだろう。

「これぐらいは問題ないよ」

「悪化したら大変よ！」

サティアがきれた頬に手を当てると、頬に当てた手にわずかばかり光輝く

数秒後サティアが手を離すと玖楼の頬の傷が綺麗に消えていた。治した箇所から手を放すと一歩後ろへと下がり、

なるべく傷がつかないように、と玖楼を心配する言葉を放つ。それを玖楼は苦笑しながら受け取ると、再び周りを見渡す。周りの光景をよく見ながら思案に耽る。

——一体何があっただろう、と。

木精という種族が非常に大人しい自然の精だということは既にわかっていてことでありこうやって人を襲うケースは非常に稀だということとは知っている。

だから最初から木精の気が立っているように目が警戒色に染まっているのは珍しい。人に襲われればそうなるかもしれないが、書いてあるには初めてあったときからこの状態であつたらしい。ならばこそ何かがおかしい。

……ここまで木精が警戒すべき事とは一体なんだろう……？

それを考えれば考えるほどどんどん泥沼にはまるように考えから抜け出せなくなってゆく。

木精が恐れるものは限られており、自然を滅ぼすような災厄、強大

な力を持った魔物、その程度である。

そしてどちらの気配も報告も村の長の動きからしてないということ
はわかる。

トン、と額に軽い衝撃が走る。

何かと面白いつの間にか下がっていた視線を上げると、目の前にサ
ティアの顔があった。

「うお?!」

「心配しすぎよ、もうちょっと気を抜きましょう……ね?」

彼女の言葉で自分がやや強張っていた事に気づく。彼女には勝てな
いな、と思いつつ表情を崩す。

「そうだな。釣り糸も切れちゃったし、張り直さないといけないな」

「そう、もっと楽しいことを考えて行きましょ?」

「ああ」

空を見上げる。遠くで雷鳴が鳴り響くのが聞こえる。大雨が降り
出すのにはそう時間はかかりそうにない。

ここは素早く帰ったほうがいいと思い、サティアを近くに抱き寄せ
て首飾りを握る。

手の中に握られた飛翔の首飾りが僅かに光を帯びる。

「それじゃさっさとかえって、ゆっくりするか」

「そうね」

次の瞬間、二人の姿が閃光に包まれ消えた。

だがこの後サティアと玖楼はこの日ほど、村から出ていたことを後悔する日が来るとは思わなかった。

玖楼とサティア、二人の人生を徹底的に狂わす歴史的な大事件が彼らを待っているとは、まだ知らない……。

●

——同日、玖楼とサティアが北華鏡の集落を出てすぐの事。

その日は珍しく朝から曇ってはいたが雨は降らないでいた。

空気の中の湿気をかんじつつもどうする事も出来ず、朝から嫌な天気に若干辟易しつつも、

若き騎士——フェヴナンド・ミスカトルは一日の仕事に勤しんでいた。

と言っても護衛みたいな役割を持つフェヴのやる仕事とは結構少ない。

村の中を見回り、魔物が寄ってくればそれを退治し、あとは困った村人を助ける程度の事ぐらいしかない。

そのため、フェヴは毎日飽きもせずただひたすら村の中を歩き回るうちに村人にそれなりに覚えられていた。

一番の仕事である魔物の退治は玖楼が訓練と称して倒してしまつために玖楼がいる間はあまりやることはない。

実際、若干困った状態ではあつた。

だがそれもすべては平和だと言う証拠として認めていた。

「嫌な天気ですね……」

ただ、今日の天気だけではどこか気に入らない。今朝、教会で朝の祈りをささげた時もどこか嫌な予感がし、何処となくシスター共々そわそわしている感じなのだ。だからと言ってそれを表には見せない。

若く、見習いと言ってもフェヴは騎士だ。その心得は熟知している。守るべき人々に不安などはみせはしない。

だが……やっぱり気にいらぬ天気だ。

どこか空気を重く感じると同時に、『まるで何かの来訪を待っている』ように雨が降らないのだ。

これだけの湿気を含んだ空気、重そうな雲なのに、まだ降らないでいるのが考えを後押しするようで……。

「もし、そのもの」

そこでフェヴの思考が引つ張られる。何時も通り村の見回りをして、村の入り口付近を歩いているときに、

見たこともない人物に呼び止められたのだ。その服装もまた不思議な服装で見たこともない形をしていた。

玖楼から話で聞いた『ワフク』と言う種類の服装に思い当たるが、それを頭からどける。

黒い長髪に、同じく黒の『ワフク』を着た女性は中々の美女と言えるものだが、生憎無欲に生きるフェヴにはなんら問題はなかった。

「えっと、なんでしょうか？」

「ここは、北華鏡の集落と呼ばれる場所でもいいのかの？」

「ええ、まあ、名前も存在しない村ですがここはそう呼ばれていますね」

世界は広く、村や集落も多い。ある程度の流通が通っている村ならまだしも、

ここのような小さな村では名前なんて早々つかない。せいぜい場所か、村長の名前がつく程度である。

ここもその『小さな』村の例に漏れず、名前はなく単純に北華鏡に存在する集落と言うことで、

『北華鏡の集落』と呼ばれているに過ぎない。同じ名前を持つ場所は他にも存在するであろうが、おそらくこのことであろう。

「そうか……ならば始めるかの」

「始める？」

『美女』の無表情だった顔にニンマリと、嫌な笑みが浮かぶ。

「うむ。始めるのじゃよ。——神々の黄昏を、のう」

悲劇の第一幕が開けた。

第七話 幕を開ける舞台（後書き）

名前：黒川玖楼

レベル：71

称号：居場所を見つけた異邦人

主武器：パラディウム

予備1：リッチ製作の釣竿

予備2：なし

防具：

ドレスシャツ（魔導皮膜処置）

ダメージジーンズ（魔導皮膜処置）

旅人の衣（魔導皮膜処置）

装備：マルウエンの腕輪

戦闘スキル：

必殺・飛燕——Rank E

必殺・我流——Rank D

中型剣——Rank D

魚釣り——Rank B

状態：命中1 攻回1 防回1

HP：364 / 380

MP：0 / 0

TP：4 / 64

FS：50 / 100

攻撃力：193

攻撃回数：5

防御力：108

防御回数：15

魔法攻撃：0
魔法防御：98
肉体速度：20
精神速度：9
攻撃属性：万能
防御属性：万能

発動スキル：

努力家？——迷宮時は1歩毎に経験値獲得。戦闘時は獲得経験値が上昇する。

見切り？——攻撃を受ける際に、確率で発動。敵の攻撃を完全回避する。

先手？——戦闘開始時に確率で発動。開始時の硬直フレームを0にする。

釣り？——ミニゲーム『釣り』で魚が釣れやすくなる。

サテアが好き——戦闘メンバーに『サテア』がいる場合、攻撃力と防御力が5%上昇する。

必殺・飛燕

E：身妖舞 └ D：????? | C：?????
S：????? |
「 C：????? └ B：?????
? M：?????
??? | S：?????
「 B：????? | |

必殺・我流

D : エクスプロージョン | B : ? ? ? ? ? | A : ? ? ? ? ?
| S : ? ? ? ? ? | M : ? ? ? ? ?

使用魔法 / 技 スペック リスト

ランク 名称 効果 消費

E 身妖舞 物理攻撃 + 30 攻撃回数 + 2 命中 + 30 TP 14

D エクスプロージョン 物理攻撃 + 80 攻撃回数 - 2 命中 -

10 TP 10 近接専用

名前 : ドライアド

レベル : 36

主武器 : とがった木の根

防具 : なし

装備 : なし

戦闘スキル :

魔術・地脈 | Rank E

備考 :

姿が何処となくエロイ木の精。ここらとしてはそれなりの高レベル。
人を襲う理由は不明。玖楼無双の餌食に。これがセリ力だったら精
魔術で仲間イベントに。
やっぱりエロゲはエロゲ。

最近遊んだゲーム。

ブレスオブファイア3 英雄伝説零の軌跡 Dies Irae

BALDR SKY DIVE2

マリイかわいいよマリイ。マリイをヒロインに何か書きたくなってきましたね。モチベがんばって！

そういうわけで玖楼の無双回でした。

このss自体チートスペックはたくさんできてきてもチート同士の戦いが多そうなので、

純粋な無双はあまりない予感だったり。

今回ついにまともなバトル描写ですが、細かく表現しすぎですか？もうちょい緩やかに表現にしたほうがいいですか？そこらへんは色々勉強ながら進めたいです。

今回初登場のオリジナル技、エクスプロージョンは機神飛翔デモンベインからのパクリです。

具体的に言えばデモンベインはバルザイでのモーションですね。回転蹴りの部分です。

っとまあ、やっぱり動きは他所からインスパイアせざるを得ないな、とか思ってたたり。

そして釣竿は武器だった。

今回で大体今後の展開がわかってきたりもしますが、次回が玖楼の人生においての最大最悪のイベント、とでも言っておきましょう。

それ以上はネタバレになるのであしからず。

それにしても最近いろんなネタを思いつきます。
と言ってもこのssが大事ですから新しく始めることはめったにな
いと思いますけど。

それでは次回までお待ちしていただけると嬉しいです。
それではさようならさようなら。

第八話 神々の黄昏とは（前書き）

もう気がついていないかもしれませんがタイトル関係修正しました。
第1章もクライマックスですね。

第八話 神々の黄昏とは

——その光景を言葉として表現するのであれば、『悪夢』としか言いようがなかった。

「なっ……あ……」

「なに……これ……」

飛翔の首飾りを使用して帰ってきた玖楼とサティアの目の前に広がっていた光景は、大量の家がボロボロに破壊され道路は虫食いのような大穴がそこらかしこに開き、

そして今も尚巨大な蛇のような生物に蹂躪されている北華鏡の集落の姿だった。辺りでは悲鳴と怒号が飛び交い、

多くの人々が逃げ惑う姿が見えた。それを見た玖楼とサティアの行動は素早かった。

「サティア、あのクソ爬虫類は自分だ殺る！村人を……！」

「任せて！」

サティアが村人へと向かうのを見ると、自分も即座に蛇の化け物へと向けて足を速める。

村の奥、教会の近くで何かと戦うように暴れまわる化け物の姿が見える。その傍で跳ねる様に飛び回り、

剣を振るう見知った姿が見えてくる。騎士の服装に防御を中心とした動き、フェヴだ。

地を蹴る速度をさらに上げながら剣を抜き、もう片手を道具袋の中に入れる。走りながら取り出すのは小さな石。だがその石はただの石ではなく、闘気石と呼ばれる闘気の回復の道具であり砕くことによって使用者に闘気を与え、再び闘気を使用しての戦闘を許す闘気しか使えない玖楼の戦闘におけるライフラインである。

すばやく闘気石を砕くとほぼ空になっていた闘気が玖楼の中にあふれ出し始める。小さい闘気石ではあったが、それでも常人よりは闘気の総量が低い玖楼には十分の回復量であった。

ダメージらしいダメージは自分には存在しない。だからこそ、地を蹴る足にさらに力を入れ、体を加速させる。

肉が鉄に中る様な音がする。

目を凝らしよく見ればフェヴの体には無数の生傷が刻まれているのがよくわかる。

その様子からして本人が決定打を打ち込めずにしばらくの間戦っていたことがわかる。装備はまだ大丈夫そうだが、フェヴ自身は回復する暇もなかったのだろう。足に闘気を込めながらも、剣に闘気を込め剣を化け物とフェヴの間に投げつける。

「！」「——ッ！？」

剣が突き刺さった大地が爆発を起こし小規模なクレーターを生むが、フェヴと化け物の間に距離を作る。

そのまま真っ直ぐ、横へ回転しながら飛び込み化け物の横へと到達すると同時に蹴りを放つ。

「エクスポロオオジョンッ!!」

横から蹴り穿たれた化け物の体が闘気の爆発と共に横へ大きく飛ばされる。

——— っちい、まるでゴムで出来たダンプカーを蹴り飛ばすような感覚だ……!!

蹴り飛ばしたモノの感触、重量からして、実際に蹴った経験はないがそんな感じだと表現する。

土煙を上げながら横転する姿を確認するまでもなく剣を地面から引き抜くと道具袋から治療の水・小を取り出し、それをフェヴに振り掛ける。近くからすれば満身創痍だったとわかる姿も傷が治って行き、

疲れが溜まっていた体から疲労が抜けてゆくのが目に見えてわかる。

「クロウ! 助かった!」

「礼はいらない! あ、やっぱ欲しい。でもそれよりアレは何だ!」

土煙の中から化け物がのそりと、起き上がり玖楼の方を見る。

今になって玖楼はやつとその姿を把握した。蛇と表現したが、顔があるべき場所には巨大な口しかなく、

ぎっしりと詰められた鋭い歯はおそらくだが肉を裂くためのものであろう。全体的に黒い体であり、

小さな家一軒ほどありそうなその巨体から繰り出される体当たりも殺人的な威力を誇るだろう。

結論：存在そのものが害悪。

「アレは召喚されたんだ」

フェヴが自身に活を入れなおい盾を前面に出すように構える。完全に回復できたかどうかはわからないが、それでも今のフェヴは戦えるというのは確実にわかる。

「召喚？　つーことはこの騒ぎを始めやがったクソ野郎がいるってことだな……！」

普段ならもう少し言葉遣いに気を使うところではあるが、流石の玖楼もこの恐々には怒りで滾っていた。
なによりもこの悲劇を生み出した者が、人間が存在すると言っ話だ。怒らない訳がない。

「ええ、確かあの怪物は『野鎚』と呼ばれてました！」

「『野鎚』だと？！」

それはこの世界ではなく——完全に自分の世界の空想の化け物じゃないか。

「ッ、来ます！」

そう思つのも束の間。玖楼の思考はすぐさまで中断され、名前だけ分かったのは僥倖と捉え剣を構える。

今やるべきことは怒りを燃料として燃やし、目の前の化け物を打倒し、この村を救うことだ。

その為には一秒でも早く、あの化け物を切り倒さないといけない。

「行くぞっ！」

「行きます！」

●

野鎚がその巨体には合わせぬ速さで玖楼とフェヴへと向けて突進してくる。それをフェヴと玖楼がバラバラに別れ、

その間を通すように回避する。だがその先で突進した野鎚が頭から教会へと突っ込み教会を大破させる。そのことにフェヴが怒りを向ける。

「神の家に何て事を！」

「口あける前に手を動かセツ！」

玖楼の剣に闘気が乗り、それが斬撃と共に放たれる。玖楼の放たれた技 身妖舞 が高速で飛来し野鎚の体に一線の傷を生み出し、そこから赤い血液があふれ出す。予想ほどのダメージがないことに玖楼が内心舌打ちすると、
フェヴの方から光が発せられ玖楼を包み込む。

「防護の光盾！」

「ありがたい！」

防護の光盾、受けたものの打たれ強さを大幅に強化する神聖魔法でも低ランクながら簡単に覚えられ、
多くのマーズテリア騎士が重宝する魔法だ。それを受け玖楼頭の中

で少しだけなら無茶が聞くと判断し前へと出る。
フェヴはその様子を見ながらも再び詠唱へと戻る。

「っらぁ！」

前へと踏み出しながら愛剣のパラディウムを振るう。素早く振るわれた剣が綺麗な弧を描きながら切り裂き傷を増やす。だがその程度のダメージではまだまだ平気なのか野鎚は方向転換と攻撃を含めた全身のなぎ払いを行う。

それを玖楼は大きく後ろへ飛び下がりながら回避すると再びパラディムに闘気を注ぐ。

「身妖舞！」

叫ぶようにして発した一撃がゴムの様な弾力性を持った野鎚の体に引き込まれ切り裂く。

目もない口だけの顔を玖楼へと向けると大きく口を開き玖楼を威嚇するように叫び声を発す。

「旋回自体はそんな早くない……スピードがあるのは直線だけか！」

そうあたりをつけると同時に野鎚の直線に立たないように横へと回り込む。

フェヴの方も防護を自分にかけ終わったのか、玖楼の発言が聞こえての行動を取り始める。

——即ち玖楼とは逆側に回り込むことだ。

素早く接近すると野鎚の体に切りかかりながらその体に飛び上がる。

「しっかり味わえよッ！」

未だに木精退治の時の強化魔法の効果が残っているのか、玖楼の体には力が漲っていた。

パラディウムを力任せに乗り移った野鎚の背に突き刺すと、パラディウムを突き刺したままそれを頭頂部目掛けて引っ張り出す。

「おおおおおおおおおおおおあああああ！！！！！！」

雄たけびを上げながら剣を引っ張り、頭頂部まで到着したところで剣を引き抜きつつ足に闘気を込め前転するように遠心力をつける
と、

それを迷いなく自分の敵の頭上へと振り落とした。

「エクスプロージョンッ！」

「グ■ッオ■■！！！！」

獣めいた声で鳴く野鎚の声が響く。流石にこれは効くのか野鎚の頭が勢い良く大地へと打ち付けられ、

その巨体が苦しそうに呻く。フェヴもこの隙を逃すわけなく、即座に近寄ると剣で野鎚の体を切り裂き始める。

我流の玖楼の剣技とは違い、ちゃんとした訓練を受けているフェヴの剣技は一つ一つの動きが隙なく連動している。

その綺麗な動きに若干嫉妬しつつも玖楼も我流で生み出した一番実践的な動きを使い、倒れた野鎚を切り裂く。

「グオオオオオオオオオ！！！！！！」

「があ」「くっ」

咆哮を挙げた野鎚の体が突如跳ねるように周囲をなぎ払う。

攻撃の最中だった玖楼とフェヴも避けきれずその旋回する巨体からの攻撃を受けて大きく吹き飛ぶ。

だがそのままでは気が済まないようで、素早く玖楼の方へと向くと巨体を数メートル中から飛ばしながら玖楼へと飛びかかる。

「おいおい、マジかよっ!」

「玖楼!」

「避けるに決まってるだろうがぁ!」

地面を力の限り蹴り飛ばし横へと体を飛ばすとほんの一瞬前まで立っていた場所を巨体が通り過ぎる。

防御をすることを選んでいれば間違いなく野鎚の鋭い歯の餌食になっていたことを考える背中を嫌な汗が流れる。

すぐさま振り返り野鎚を切り裂こうとするが、後ろを降りかえるとそこには野鎚の姿が消えていた。

「なっ?!」

「何もない空間に潜り込むように消えました!」

玖楼は避けていたために見えなかったことをフェヴが玖楼の横へ場所を移しながら説明する。

その説明を受けて玖楼が舌打ちをする。何もない空間へ消えることができると言うのなら、また現れるのも自由なはずだ。

突発力が異常に高いあの生物を真正面から相手をするのはかなりの骨だ。だから出来たら横から殴るのがベスト。

だがもし『隔離世』に潜ったとされたのならば――

「動け！」

「っ！」

フェヴと玖楼が横の地面へと転んだ瞬間、何もない空間から野鎚が玖楼たちに食いつくように姿を現す。

ギリギリ避けた玖楼に対し、フェヴは回避が送れたために僅かに腕が攻撃に引っかけかり、痛みに顔をゆがめながら転がる。

突如現れた野鎚はそのまま現れたように空の仲へと潜り、また消え去る。

「ツチイ、また『隔離世』に潜ったか！」

「隔離世？」

「東方での魔や精霊、妖物が暮らす世界の事だよ！」

きつちりとリッチから習っていたためにそこらへんの知識に関しては事欠かない。

だが幾ら知識があっても対処法まであるとは限らない。

「簡単に言うが、人間は隔離世を見れても潜れない！見れても高位の術者ぐらいだ！」

そう、リッチやナベリウスと言った魔術専門の、高位の魔術師ぐらいだろう。

それを抜けば妖物や魔物と言った生物は割りと自由に行ったりきたりしてるのが腹立たい。

「だったらどうします？このままでは……！」

「分かってる……考えるんだ……考える……手札を再確認しろ……！」

フェヴと全方位からの攻撃が対応できるように背中を合わせて周りを警戒する。

詠唱中に襲われたらひとたまりもないために、フェヴも腕へのダメージを回復せずに警戒したままにいる。

見たところ怪我しているのは剣を握る手とは逆側の腕、盾を持った腕だ。攻撃には問題ないが、防御は出来ないだろう。

実力を計算するに今まで自分なしてフェヴが戦っていたのは盾を前面に出して守る戦いをしてきたから。

なら、なるべく次の動きで相手をしとめたい。

使える手札は——自分が飛燕剣にオリジナル技、絵札が数枚、まだある程度ある体力に回復アイテム。

それに対してフェヴの場合は神聖魔法と治療魔法、あとは騎士としての戦闘技能。

足りない。戦力としてはたりなすぎる。戦うには心細すぎるが——
——これだけあれば十分だ。

「フェヴ」

警戒をしたまま背中合わせに警戒するフェヴに声をかける。

「何か思いつきましたか」

「ああ、『アレ』をやるぞ」

「『アレ』？……——『アレ』ってまさか『アレ』ですか？！」

思わずフェヴが振り返り玖楼の方へと向くが、慌てて背中合わせの警戒状態へと戻る。

その声には若干の呆れが感じられるが、同時にどこか苦笑めいたものが感じられる。

「そうだ、お前がまさかと思う『アレ』だ！」

玖楼が左手を道具袋へと進ませ、必要なものを取り出しそれを握る。それは暗に自分の覚悟は出来ているとの合図。

それを見たフェヴがやはり軽いため息を吐くと、体に力を入れて魔力を溜め始める。それは了承の意。

「自分が動きを止めてみせる。……そしたらやるぜ」

「任せて下さい」

それ以上の言葉は必要ない。必要なのは実行することのみ。故に、全身に活力を漲らせながら、周りに気を張る。

全身の神経を集中させ、周りのほんの少しの変化でも感じ取れるように警戒をする。

一秒……二秒……三秒と、無言ですこす時間が增えるにつれて緊張感が高まってゆく。

……まだか。

五秒……六秒……七秒。

……まだか……。

八秒……九秒……十秒。

……まだか――。

瞬間、僅かにだが空気が揺らぐのを感じる。ほんの、ほんの少しの揺らぎだが、

それでも冥き途で、隔離世と現世の狭間と言える死にもっとも近い世界で生活していた玖楼は敏感にそれを察知した。

それは区間の揺らめき、隔離世と現世が揺らめく瞬間。

「そこかあああああああ！！」

自分から見て左側へと、口を大きく開けて此方を飲み込まんとする野鎚が現れた方向へと自ら飛び込む。

同時にフェヴが後ろへとワンステップバックステップを取り、魔力を高める詠唱を始める。

だがその間にも玖楼と野鎚は進む。お互いにほぼ真正面に立つような距離にまで接近すると、玖楼が道具袋から取り出したものを取り出す。

「そんなに食いたいんだつたら、食わせてやるよ！氷乙女の絵札！放電の絵札！」

玖楼の左手に握られているもの、それは二枚の絵札である。だが、ただの絵札ではなくナベリウスとリタの魔力が込めてある、

低コストで数枚だけ作ることに成功した絵札である。自分が本当にピンチのときだけ使用しろと言われた代物ではあるが、

この状況で使用したのなら一切の文句は言われなだろうと思ひ、

それを野鎚の口の中に自分の身よりも早く投げ入れる。
投げ入れられた絵札は全部で二枚。それぞれが黄色と青に輝くとそれに秘められた魔力が解放される。

「■■■■■■■■■■ アアアアア！！！」

野鎚を内側から轟音と共に超高压の電流と冷気の波が襲う。絵札には完全には全ての魔力は込められなくても、それでも野鎚を悶絶させその動きを束縛するほどに強力なダメージを与えるには十分なアイテムであった。
なによりも、魔力が存在しない玖楼が使ってもダメージを与える辺りが絵札が優秀な証拠だ。

悶える野鎚を置いて、バックステップで一気にフェヴの前へまでと下がった玖楼が剣を改めて構えなおす。
フェヴもフェヴ自身で詠唱がほぼ完了したのか、最後の詠唱を唱え始める。

「我神の使徒正義と平和を守りし魔の殲滅者——今ここに神に仇名す愚者に裁きの力を」

野鎚の下に白い魔方陣が現れそこから発せられる魔力光が野鎚の動きを完全に捉え拘束する。

麻痺、凍結による束縛、そして神の光による束縛によって完全に動きを封じられた野鎚はなすすべもなく地面に打ち付けられる。

だがこの程度で二人が許すわけもなく、フェヴと玖楼が剣を掲げる。そこに天から細い光が降り立ち剣が輝きだす。

「来た来たあ！行くぞおおお！！」

「行きますっ!!」

白く輝く剣を前に構え突進するように剣を野鎚に突き刺す。剣が強化されたためか思いのほか深く刺さった剣で引き裂きながら二手に分かれると、

お互いに逆側に立ちながらもしっかりと野鎚を真っ直ぐ見つめ剣を構える。

「行くぞ！これで決める！」

「合わせます！」

そのまま野鎚の同体をXの字に切り裂くように剣を振るい野鎚の体を切り抜ける。

「クロスパニツシャアアアアアアア!!」

Xの字に斬られた箇所から雨のように血が降り注ぐ。だが声も上げられず、確実に野鎚は絶命した。それだけは確かだった。

体はもう動く事無く魔方阵も消失した。残ったのは血溜まりと殺した野鎚の死骸。そう、勝利したのだ。

「や、やっぱり技の名前叫ぶのはちょっと……」

「そこはテンションで何とか乗り切るんだよ……思い出すと恥ずかしいし」

剣を振るい剣に付着した血を振り払うと片膝を地面につく。フェヴも同様に今の一撃で体力を使い切ったのか、苦しそうな表情をしながら片膝を地面についていた。軽く乱れた呼

吸を何とか整えながらも、
道具袋から治療の水を取り出しそれを自分にふりかけた後、同じも
のをフェヴへと渡す。

「すみません」

「そう思うのなら教会が直ったら使った分だけくれればいいよ」

「いや、それはちょっと……」

「おい」

くくく、ふふふ、ははは、とそろえて声を上げて笑う。何よりも
協力して二人で強敵に打ち勝ったと言う喜びがあった。

このまま倒れてサティアが来るまで眠っていたい。そんな考えが頭
をよぎった瞬間、すぐさま立ち上がる。

まだだ。あんな化け物を召喚した外道がいた。いや、いるはずだ。
こんな辺境の農村を襲う意味なんてないはずだ。

愉快犯にしてもどこからかこの様子を眺めているに違いない。だか
ら立ち上がる。

自分の行動に気づいたフェヴもすぐさま立ち上がる。

「まだ、いるはずだ」

「ええ。そうです。すぐさま探し出しましょう。クロウならすぐに
分かるはずです」

「はあ？」

「いえ、その者の姿と言うのが――」

「探す必要はいらんよ」

『何時』いたというのを語るとすれば、そこに『いた』としか表現の出来ようがない登場であった。

先ほどまでは存在していた野鎚の死骸は綺麗さっぱり消え去り血溜まりの中央に一人の女が立っていた。

黒衣着物を着た黒髪長髪の女。その姿はどこかゆつたりと、楽にしている感じはするが決して侮れない『何か』を同時に感じる事が出来る。

間違はなくコイツが犯人。そう思わせる『何か』をコイツから感じる。

すぐさまパラディウムを構えるとフェヴもロングソードを女へと向けて構える。

全身から汗が噴出すのを自覚する。脳内で警報がガンガン鳴り響いて頭痛がしてくるがそれを押さえつける。

目の前にいるこいつは本気になった時のナベリウスやリタと同じ気配がする。つまり、純粋な人間じゃない。

そう、明らかに人間じゃない。こんな人間いてたまるか。

「テメエ……一体『何なんだ』よ！」

「その言い方はいささか酷いのではないかの」

「テメエの様な得体の知れないモンはそれで十分だ……！」

「ふ、ふふ、そうか。そうじゃの。確かにその認識は正しい。『正しすぎる』かの」

瞬間、着物の女から物凄い量の殺意が放たれる。それこそ一瞬、殺されたと幻視できるぐらいには。

幸い自分にはあの人外魔境での生活経験がある。だからまだ自分を保っていられる。横へ向くと剣を握ったまま硬直し、体をガクガク揺らすフェヴの姿が目に入る。

「フェヴ！」

「あ、あ、か、体の振るえが……」

詰まらそうな目をフェヴへと女が向ける。それはフェヴには全くの価値がないと語っている。

怒りがこみ上げて来るが、それでも体を動かさない。この女が自分の感じるとおりならば、

自分のような存在ならば一瞬で塵にも変えられるほどの実力者だ。それだけは確実である。

「——人の体とは素直よのう？どんなに頭で理解しようと、

『本能』がそれを阻止するのではどんなに止めようとしても無駄だよ。主には相対する資格もなかっただけじゃ」

意識が切れたのかフェヴが剣を握ったまま地面に倒れこむ。動いた何をされるかが分からないため、

駆け寄って支えることも出来ないことに歯がゆく感じる。今は、何も出来ない。

「まあ、そう警戒する必要はないよ。わしはただお主に会いに来ただけじゃからのう」

「……自分に？アンタみたいな美人には悪いが自分には既に愛し合う恋人がいるんだ。」

正直これ以上の美人さんに詰め寄られるのは困るんだが？」

「ふふ、面白いことを言うのう。じゃが安心せい。わしはただ会って見たかっただけじゃよ」

「自分に？」

色々ききたいことはある。何故襲った。何故人を食った。何故着物を着ている。何故日本語で話す。

この世界にも日本は存在しているのか。だがそんな言葉が届く前に

「うむ。神々の黄昏を始める事となった元凶にのう」

その言葉に凍った。

「神……々……の。たそ、がれ？」

僅かに搾り出すようにつむがれた言葉ではあったが、それを女は聞こえたのか愉快そうな笑みを浮かべ、笑顔を此方に向けたまま喋りだす。

「うむ。お主の言葉がマリーチの考えを後押しすることになったのう？」

その結果マリーチが『天』の神々に未来を見せたのじゃ」

「み、らい？」

「うむ。そうじゃ。マリーチには未来視の能力があつてのう。
その結果『視えて』しまったのじゃ……そのうち人間が信仰を忘れ
神々を必要としない時代が来ることを」

それは確かにそうだ。今は魔法が復旧しているがそれは『信仰』
と言う対価の下になつてゐる。

魔法は確かに万能の可能性ではあるが、それでもそれは神への信仰
を引き換えにしている。

特定の神を信仰することによつて特定の魔法が使えるこのシステム
には一つ大きな欠点が存在する。

それは、他の魔法が使えないことだ。

マーズテリアを信仰すればマーズテリアの与える恩恵、神聖魔法
と治療魔法が使えるようになる。

だがその代わりに他の神を信仰することは許されずに、バリハルト
を信仰することで得られる風の魔法は使えない。

他の神々にもいえることだが、基本的に信仰が許される神は一柱の
みであり、それ以上は許されない。

つまり魔神か魔人であり、秘印術で自らの力で魔術が使えない限り
は、それ以上の魔法の習得は出来ない。

だが科学の与える恩恵は違ふ。水の関する神々を信仰しなくても
簡単に家から新鮮な水を飲むことが出来たり、
火の魔法が使えなくとも夜中、部屋を灯すための蝋燭に火をつける
必要もない。

科学とはあらゆる所で魔法とも負けぬ劣らぬ利便性を見せるのだ。
だからこそ、信仰が薄れても仕方がない。

「だからのう、多くの神々は人間に呆れてしまったのじゃよ——
どうにかしようと考える前にの」

一呼吸置いて、再び語りだす。

「それでのう、多くの神々があきれ果てる中『天』は複数のグルー
プに分かれたのじゃよ。

一つ、今まで通り人間を支え人間と共に生きて行こうとする神々じ
やのう。主にマーステリアやマリーチ、水の巫女と言った神々が有
名じゃのう。

二つ目は完全に人間に愛想を尽かし人間と関わるのをやめた神々じ
やのう。で、最後のが……」

ニヤ、っと笑みが嫌なものへと変わる。

「わしのように『天』からくんだり、人の世で好き勝手しようと考え
ているものじゃのう。国を作ろうとするものもいれば、

人間を根絶やしにしようと思えるやつもおる。思想は様々じゃがど
れもかれも自身に素直に、快楽や悦楽のまま、本能のままに行こう
とするものじゃのう。

魔人と名乗る者もおれば、魔神とも呼ばれる者もおるのう。と、簡
単に言うなれば——わしらが好き勝手に暴れるだけじゃよ。

言うなれば主は我々に好き勝手暴れる理由をくれた、そんな所じゃ」

それこそが神々の黄昏の内容。名称自体はかなり物々しいがその
内容はとてつもなく簡単で、『天』から降りてきた神々が好き勝手
するだけ。

ただそれだけの事であるが、ただそれだけにとてつもなく最悪だった。

想像しろ。

もし、降りてきた神が目の中の女のように虐殺を好んだら？

その考えに一気に肝が冷えてゆく。自分がマリーチに対して言ったことの意味がやっと分かった。

安易な言葉で、考えずに簡単な言葉を使ってマリーチへ薄っぺらい希望を与えたのだ。

その薄っぺらい言葉が原因でこの目の前の女が降りてきたのだ。自分が原因でこの女はこの村を襲ったのだ。

何もなかったが、平和で優しく、本当に何も無いこの村を……襲ったのだ。

その責任は何処にある……？

「ぐっ、う」

そこへ考えが至って一気に吐き気を催す。だがそれを目の前の女に悟られないためにも一線で踏ん張り、飲み込む。

目の前の女が自分に会いに来た。たったそれだけの理由で『ついでに』村を襲ったのだ。

そんな愉快犯が、落胆するような、興ざめするような行動を見せたらどうする？

「ふむ……存外普通だったのう。マリーチがこれになを見出したのか分からぬが、わしには分からぬのう」

未だ頭の中を先ほどの情報がグルグルと笑みそうするように彷徨っている。上手く女の言葉が頭へ入ってこない。

自分の責任。自分のせいで村が襲われた。マリーチを知っている。

マリーチの引き金。マリーチは友達。

力が足りない。神々の黄昏。神々は人を守るもの。神々は敵。女は強い。女が暴れる。

グルグルグルグルとひたすら言葉が残響するように頭の中で響き続ける。

段々とだが耳鳴りするほどに頭が思考で痛くなってゆく。

だが次の言葉でその全てが吹き飛ぶ。

「——ふむ。まあ、分からぬが問題なかつ。適当に食い荒らして帰るとするかのう」

食い荒らす？誰を？村人を？サティアを？

『私が玖楼の居場所になるから——』

残響する罪悪感などよりも、それが心へと響く。その声を、言葉を覚えてるのなら、それで十分。

「おおおおおおおおあああああああああああああ——！！」

咆哮。天に向かいあらん限りの力で腹の底から全てを吐き出すように声を出す。

その様子に驚いたのか女が驚いた表情を浮かべ、そして珍しいものを見たと言わんばかりの表情で見てくる。

だがそんなことは関係ない。

やらせない。やらせはなしない。

右手に握る剣の感触を確かめながらも体に活力を漲らせる。今までにないほど全身には力で漲っている。

だがこれは別に秘めたる力があつたわけでも、特別な力がひょんなところで覚醒したご都合主義でもなんでもない。

「やらせるか、やらせるかよ！」

「ほう、戦うつもりかの？まあ、よい。これもまたよい余興だのう」

そう、これ自体は誰にでもある力。ただ誰も使おうとしない類の力。

「——生命良くを力に変えて戦う、確か 戦咆 と言われる技術だったの」

体を軽い虚脱感を襲うが、それを体に漲るほどあふれている闘気で誤魔化す。今だけはこの力に身を流す。

普段なら数発撃てたところで切れてしまう闘気も、この瞬間だけなら何発打ち込んでも切れる気がしない。

……だがその代わり、一撃でも衝撃受ければ二度と立つことはできないだろう。

「やらせねえ……絶対にやらせねえ……！」

「よいよい、それでこそ人であろうよ」

剣を握り締め、全力で前へと飛び出す。

相手が神？知ったことが。

実力の差？関係ない。

一撃でもくらえばそれで死ぬかもしれない？そんなのは承知だ。

そんなことよりも、彼女を失う方が何倍も

怖い――

「おおおおおおおおおおおおおおお！！！！」

獣のような咆哮を挙げながら、剣に全力の闘気を漲らせ、前進する。一撃。たった一撃だけでいい。

一撃、それだけでもいいからこのクソ女に一撃をぶち込みたい。心がそう叫ぶ。だから走りながら剣を振るう。

剣から発せられた斬撃が女へと放たれ、それを片手で握りつぶされる。

「ふむ、珍しいものを見たのう」

やはり、と思うと同時にそれでもまだ諦めたくない、認めたくない自分がいることを認識する。

明らかにリタやナベリウスクラスに論外な生き物だが、傷つかないわけではない。だから一步一步踏み出す。
今は届かなくても数秒後には届くと信じて、踏み出す。

斬、一撃の身妖舞に込められる最大の闘気を込めて斬撃が飛ばされる。大地を抉り飛翔するその斬撃も、ただ立っているだけの女は無造作にそれを掌で弾き、霧散させる。結果は見えていても攻撃は止められない。接近しつつ連続で身妖舞を放てるだけ放つ。連続としてはなつた斬撃の対価に腕が熱を持ち痛みが響く。
だがその痛みも目の前の女を殺すこと、ただそれだけのために無視して進む。

「かかってくるがよいよ」

「つつらあああああああああああ！！！」

まともな言葉を発していない自覚はある。だがこの劇場を感情のままに発しないと頭がおかしくなりそう。

それだけは感情でたぎっている脳でも理解はできた。激情に任せたままの剣を女に振るう。

それを風に揺れる柳の如く避けると、詰まらそうな視線を此方へと向けてくる。

「なんじゃこの太刀筋は。先程の野鎚を相手していた時の方がまだ見られたぞ」

——んな事は分かっている！

空振りした剣の動きをそのまま、あらん限りの闘気を足へと込め

ながらそのまま回転蹴りへと移す。

最初の一撃は最初から外しての狙い。むしろ外すことを前提に放つ。必要なのは二撃目を確実に当てること。

身妖舞も今の一撃も全ては足からの一撃を思考から外すことが目的。

「エクスプロオオオオジョオオオオンッ！！！」

零距离から放たれた回転蹴りが遠心力を受けて加速された速度を持って女へと命中する。

今までにないほどの轟音と爆発音を発しながら中った蹴りは女を大きく吹き飛ばすだけではなく、

同時に玖楼の存在も大きく吹き飛ばす。間違いなく人生最大最高の一撃。フェヴとの連携の時よりも威力は出たはず。

だが、何事にも代償はつく。

吹き飛ばされた衝撃により地面に打ち付けられ、それによって玖楼にあふれていた闘気が霧散すると同時に、

今のダメージが完全に最後の体力を奪って玖楼の体から自由を奪う。うつ伏せに、顔だけ女の方を向けるようにすると、小さく笑う。

「は、はは、どーよ。心は、熱く、頭は、冷静に、ってやつさ」

蹴りの感触からして確実に一撃は入ったと確信する。これで一時行動不能に出来ればよし、

もしくは村人が村から逃げるだけの時間を稼げればそれでいいと考える。

倒せるとは、決して思ってもいない。

何よりナベリウスやリタ、リッチやマクレガー、そしてマリーチ。彼らを人間と区別するのは圧倒的な力。

人間では絶対に届かない、倒しようのない圧倒的な絶望の塊。だから倒せるとは思えないし希望もしない。

だから自分は捨て駒。サティアだけでも逃げてくれればそれでいい。彼女は自分の心を守ってくれた。

あの一言だけで自分の心は完全に救われていた。だから守る。そのためなら自分の死を厭わない。

だから、女が吹き飛ばされた土煙の中から無傷で出てきたときは絶望が身を包むよりも早く、ああ、やっぱり。

そんな考えが頭をよぎるのは早かった。そして同時に自分の行動がいかに無駄だったかを悟る。

やっぱりその強さは届きようもないほどに遠く揺るがず………常識から外れていると。

「ちく、しょう……」

分かっていた結果でも、やはり悔しさは残る。だからと言って涙を流すような恥はしない。

「主は良くがんばったよ。その程度の力でようがんばったよ」

その『程度』。人が築き上げた努力をその『程度』と片付ける傲慢。

だが、玖楼は何も言い返せない。ただただ悔しさで自らの唇をかむ。強くかみ締めた唇から血が流れるが、

それを無視して唇をかむ。ただ、何も出来ない歯がゆさを感じながら迫ってくる女の姿を見る。

流石に服までは無事とは行かず、来ていた着物はボロボロになり大

きく肌蹴ていた。

冷静なときに見ればかなり『そそる』姿ではあるうが、そんなことを考える余裕は玖楼にはなかった。

玖楼の前まで来ると、女が片手を上げる。その手の中にはゲートボールスティックにも似た、

潇洒な銀色の鎚が握られていた。すぐさまそれがその女の武器だと理解すると、相手が自分にトドメをさす気だというのが分かった。

「何か言い残すことはないか？」

「先に地獄で待つてるぞクソ女」

そう、女を見上げながら吐きだす。

「悪いのう。わしが堕ちる先は地獄ではなく煉獄じゃろうから、待つても無駄じゃろうよ」

迫ってくる鎚。それを玖楼は防ぐことは出来ない。だから目を閉じ、サティアの無事だけを案じ迫る時を待った。

一秒二秒と過ぎてゆく中、目を閉じた玖楼へとその鎚は振り落とされなかった。

何事か、そう思い閉じた目を開いた先に。

そこに彼女はいた。

見間違えるはずもない。赤い髪。青と白のツートンの服装。髪を隠すように被る帽子。

その姿、匂い、仕草、声、その全てを忘れるはずがない。

「サティ、ア……？」

玖楼へと振り下ろされるべきだった鎚は横からサティアの腕によつてつかまれ、完全に振り下ろされることはなかった。

サティアによつて完全に固定されているのか、鎚は完全に動く事無く微動だにせずいた。

いきなりの登場に玖楼が驚く中女の方も相当驚いたようだった。

「……まさかこんな辺境でこんな者に会えるとはのう——正義と裁きの古神アストライア？」

今度こそ、玖楼の脳が理解することを拒否した。

●

「貴女には関係のないことよ」

「それはそうじゃろう。わしとて別に古神に興味がないからのう」

「だったら今すぐ帰っていただければ嬉しいのだけれど？」

「それはいかんよ。『ソレ』はわしが負かしたんじゃ。わしが生かそうとも殺そうともわしの自由じゃろ」

「玖楼は貴女のものじゃないわ。玖楼を傷つけると言つのなら——」

「許さぬか？殺生を禁じ剣を握ることを封じた女神になにができる」

「盾になる程度は出来るわ」

「その程度の力でかのう？三神戦争で敗れて信仰を多く失って、それでも守るといふのか？」

「ええ、彼を守るわ」

「何じゃ、その男に惚れでもしたのか？」

「それがいけないかしら？」

「——ふむ。それを聞いたら余計に殺したくなってきたのう」

「……貴女」

やっと脳が理解し始めたのか玖楼にも会話の意味が入り始めてくる。

つまりサティアはアストライアと言う古神。であり、ずっとその正体を自分へと隠していたこと。

それ自体に問題はない。古神は存在が悪ではないことを自分は知っている。だから問題はないのだ。

秘密にされていたことだって許す。恐れるのは誰にだってある感情だ。それは仕方がないことだ。

だがそんなことよりも、

「サティア……逃げ、ろ……！」

女の話聞く限りサティアでは確実に勝てない。それでも自分を

守ろうと、女に対抗している。

剣を封じ殺生も禁じられた戦い。勝敗は戦う前からして決定している。だからこそ、

「逃げ……て、くれ……！」

懇願するように声を出す。段々と意識がかすんでゆくを感じる。唇をさらに強く噛み、痛みで自我を持たせる。

だがそれも永遠に続くわけではない。早くサティアを、サティアだけでも逃がさないといけない。

その意識だけが今の、自分の原動力。

だがサティアは動かない。

鎚が消え、女が数歩後ろへ下がるとサティアが玖楼の前に立つ。

「……ふむ、どうしても邪魔をするんじゃない？」

「……玖楼は私の大事な人。絶対に、これ以上傷つけはさせないわ」

睨むような視線を女へと向ける。だがその視線にひるむ様子もなく女はただ一度ため息を吐くと、

小さな声で仕方がないと呟き、右手を持ち上げる。

「なら、二人共々仲良く喰ろうとくれるわ」

瞬間、世界が黒く染まった。曇っていた空が黒く塗りつぶされ、大地も黒く染まる。

全ての方向全ての角度、見える限りの闇が広がる。ただ女とサティアと玖楼。その三人を抜いて闇が広がる。

それを認識した途端、サティアが玖楼を庇う様に胸の中へと抱き込む。サティアの背の向こうから玖楼には見えた。

世界を埋め尽くす野鎚の口だけの世界が。

「まあ、それなりに面白い余興ではあったよ。神と人が結ばれるなんて話もいい酒の肴になるじゃろう」

サティアには攻撃する手段がない。

玖楼には戦う力がない。

二人を囲み、襲うのは百をも超える野鎚の大軍。フェヴと玖楼が苦勞し、やっと倒した野鎚の大群。

玖楼とサティアにはこの戦局をひっくり返す術なぞ存在しない。だからこそ、この先に待ち受けるのは必然的に――

――死。終焉。終わりのみ。

ご都合主義なんと言うものは世の中には存在しない。だから、この終わりは絶対不可避。

それが『普通』の認識だろう。そう、それは『普通』であるならと言っ場合の結果のみ。

生憎、黒川玖楼という一人の青年の人生は、あまりにも『普通』からは逸脱していた。否、しすぎていたのだ。

「――玖楼を……………殺すの……………絶対許さない……」

どこか聞きなれた声が聞こえた所で、玖楼の意識は完全に闇の底へ落ちた。

第八話 神々の黄昏とは（後書き）

名前：黒川玖楼

レベル：72

称号：居場所を見つけた異邦人

主武器：パラディウム

予備1：リッチ製作の釣竿

予備2：なし

防具：

ドレスシャツ（魔導皮膜処置）

ダメージジーンズ（魔導皮膜処置）

旅人の衣（魔導皮膜処置）

装備：マルウエンの腕輪

戦闘スキル：

必殺・飛燕——Rank D

必殺・我流——Rank D

必殺・強化——Rank —

必殺・連携——Rank D

中型剣——Rank D

魚釣り——Rank B

状態：瀕死

HP：0 / 390

MP：0 / 0

TP：72 / 72

FS：50 / 100

攻撃力：209

攻撃回数：6

防御力：118
防御回数：15
魔法攻撃：0
魔法防御：102
肉体速度：20
精神速度：9
攻撃属性：万能
防御属性：万能

発動スキル：

努力家？——迷宮時は1歩毎に経験値獲得。戦闘時は獲得経験値が上昇する。

連携？——味方の攻撃に続けて攻撃すると、ダメージが増加する。さらに続けば、増加効果は累積する。

見切り？——攻撃を受ける際に、確率で発動。敵の攻撃を完全回避する。

先手？——戦闘開始時に確率で発動。開始時の硬直フレームを0にする。

釣り？——ミニゲーム『釣り』で魚が釣れやすくなる。

サテアが大好き——戦闘メンバーに『サテア』がいる場合、攻撃力と防御力が10%上昇する。

決死？——HPが一定以下の場合、攻撃力と防御力が上昇する。『HP』が低いほど上昇効果が高くなる。

必殺・強化

E：戦咆——C：?????——B：?????——S：?????
?——M：?????

必殺・連携

――：クロスパニッシャー

使用魔法／技スペックリスト

ランク 名称 効果 消費

E 戦咆 TPを100回復 物理系2付与 HPを40%消費

―― クロスパニッシャー 物理攻撃+200 TP30 フェヴが

パーティーにいる時のみ発動可能

名前：フェヴナンド・ミスカトル

レベル：55

称号：神殿教会の見習い騎士

主武器：祝福済みロングソード

予備1：なし

予備2：なし

防具：神殿騎士の鎧

盾：神殿騎士の盾

装備：聖典

戦闘スキル：

魔術・神聖 RankD

魔術・治癒 RankD

中型剣 RankD

状態：瀕死

HP：0 / 362

M P : 0 / 8 0
 T P : 3 0 / 3 0
 F S : 5 0 / 1 0 0
 攻撃力 : 1 3 9
 攻撃回数 : 5
 防御力 : 9 2
 防御回数 : 1 0
 魔法攻撃 : 7 8
 魔法防御 : 8 9
 肉体速度 : 1 4
 精神速度 : 1 2
 攻撃属性 : 神聖
 防御属性 : 神聖 +

発動スキル :

神聖の守護者? —— 防具の属性に左右されず、常に『神聖+』の
 防御属性になる。

復活? —— 戦闘不能になった際に、確率で発動。HP & amp; ;
 FS が一定の状態で復活する。

連携? —— 味方の攻撃に続けて攻撃すると、ダメージが増加する。
 悪魔殺し? —— 敵が『暗黒』属性の場合、攻撃力が上昇する。

魔術・神聖

E : 光霞 | C : ? ? ? ? ? | A : ? ? ? ? ? | S : ? ?
 ? ?

E : 防護の祈り | D : 防護の光盾
 「 C : ? ? ? ? ? | B : ? ? ? ? ?

使用魔法／技スペックリスト

ランク 名称 効果 消費

D 防護の光盾 物防3、魔防3、回避3付与 MP24

名前：アストライア？

レベル：219

称号：正義と裁きの古神？

主武器：戦意喪失の投石紐

予備1：なし

予備2：なし

防具：麻の衣服

装備：なし

戦闘スキル：

魔術・戦意 Rank A

魔術・強化 Rank C

魔術・治癒 Rank A

魔術・召還 Rank B

HP：460 / 460

MP：150 / 150

TP：60 / 60

FS：50 / 100

攻撃力：79

攻撃回数：5

防御力：69

防御回数：10
魔法攻撃：126
魔法防御：80
肉体速度：13
精神速度：19
攻撃属性：万能
防御属性：神格＋

発動スキル：

MP再生？——戦闘時は一定フレーム毎に、移動時は一定歩数毎にMPが回復する。

賢者の魔力？——消費MPが10％軽減。習得レベルで軽減量が高くなる。

神力遮断？——神の力が遮られ、能力全般が25％低下。

玖楼が大好き——戦闘メンバーに『玖楼』がいる場合、攻撃力と防御力が10％上昇する。

神格の守護者？——防具の属性に左右されず、常に『神格＋』の防御属性になる。

名前：黒い着物の女

レベル：387

称号：野鎚を従える災厄

主武器：崩壊の鐘を鳴らすもの

予備1：なし

予備2：なし

防具：着物

装備：なし

戦闘スキル：

魔術・召還——R a n k S
鎚——R a n k M

HP：3867/3890

MP：870/870

TP：640/640

FS：50/100

攻撃力：792

攻撃回数：90

防御力：399

防御回数：70

魔法攻撃：826

魔法防御：710

肉体速度：60

精神速度：60

攻撃属性：万能

防御属性：神格＋

発動スキル：

TP再生？——戦闘時は一定フレーム毎に、移動時は一定歩数毎にTPが回復する。

MP再生？——戦闘時は一定フレーム毎に、移動時は一定歩数毎にMPが回復する。

賢者の魔力？——消費MPが10%軽減。習得レベルで軽減量が高くなる。

神格の守護者？——防具の属性に左右されず、常に『神格＋』の防御属性になる。

オーバークル——攻撃時に常に発動し、ダメージMAX桁が一桁上昇。

そんなわけで第1章のクライマックス部分の終了です。見て分かるかもしれませんが、

玖楼とフェヴには野鎚撃破と言うことでレベルが上昇しました。

野鎚のレベルは大体75程度を予想していました。フェヴにはオーバーですが、

常に自分よりも強い敵と戦い訓練してきた玖楼には丁度よかった……のかな？

ついでにいろんなスキルと技の導入です。今はスキル関係ごちゃごちゃしていますが、

スキルとかはそのうち纏められたり修正したりする予定です。

サティアのステータスにまったくの変動がないのは神力遮断でステータスがそのままからです。

……と思つてください。いつかちゃんとした解放状態のアストライアがあるので、それまでお待ち下さい。

着物の女は正体バレバレなんだろうが、名前はまだ一言も出てないので一応名前は出しませんが、

ステータスはアムドさんのステータスを参考に製作してみました。

これからさらにキャラが増えてステータスも考えるのが増えると思うと若干鬱になりそうです。

まあ、楽しいからいいんですけど。

さて、今回で色々と話がぶっ飛びましたが、分かりやすく要約しますと、

- ・ マリーチが未来視で神々が必要とされない未来を見た。
- ・ 何とかするために未来の人間である玖楼と話した。
- ・ 結果、未来を見た神々は人間に呆れた。
- ・ 一部の神々は人間に愛想をつかして好き勝手することにした。
- ・ 着物の女はマリーチの知り合いで、玖楼を見に来たついでに村を滅ぼした。
- ・ フェヴと玖楼が恥ずかしいセリフを我慢できるようになった。

大体こんなところですよ。

ツツコミ所満載でしょうが、要約すれば、です。

さて、第1章一番の盛り上がりだったと思いますが、どうでしたでしょうか？

最近遊んだゲームに影響された部分が如実に現れたような気もしますが、

おおむね満足な出来だとは思ってますよ……？

さて、もう1章は終わりで、もうすぐ2章が始まります。

残り少ない1章ですが、楽しんでいただけたのならば幸いです。
てます。

それではさようならさようなら。

第九話 始まる場所は終わる場所（前書き）

今までシリアスばかりだったので、

久しぶりに軽くギャグを挟もうかと考えたらいつの間にかお・りが・みインストールされてた。

自分の予想以上に皆がお・り・が・みマインドに洗脳されていて、なぜか凄いギャグ臭になってた。

それでもまあ、これで第1章は終わりです。

次回に短いエピソードを挟んでその次は第2章の1話からです。

[illegible]

前を見ても上を見ても下を見ても後ろを見ても口、口、口。見れば見るほど気が狂いそうになる光景だが、それでも彼女だけは守らないといけないという思いが自分の正気を最後の一線で保たせてくれている。

手を伝わって感じる温もりが何よりも自分の心を勇気付けてくれる。もし、この温もりが消えてしまったら、

自分は確実に壊れるだろう。

いや、誰かに頼らないと心が保てない時点で確実に『玖楼』と言う『地球』にいた男の人格は壊れているのだらう。

始まりは…… たぶん…… そう、流れ着いたその時から。冥き途へ流れ着いてから。ナベリウスとであってから。

リタと触れ合ってから。リツチに教わってから。マクレガーと語り合ってから。

彼女に依存してから。

そう、これは完全な依存。何かに依存しなければいけないほどに自分の心は弱く、壊れてしまったのだらう。

だけどいい。それでいい。卑怯かもしれない。汚いかもしれない。純粹で真っ直ぐじゃないかもしれない。

だけでも、自分の守りたいという気持ちだけは本当だ。本当であつてほしいのだ。だから守る。

彼女の正体が大昔の戦争で負けた神だとしても、彼女が多くの神々から姿を隠して逃げていても関係ない。

彼女は、サティアは、自分がこの世で生まれて一番愛している女性なのだ。依存も守る理由もそれだけで十分。

十分すぎるのだ。

サティアの手を強く握って引つ張る。

依然、一寸先も見えない暗闇の中だが不気味に輝く白い歯だけが何故か見える。

周りを囲む口のない方向へとひたすら逃げ続けるが、その方向にだけ口がないことからまるで追い込まれるような気がし、

最初から最後まで誰かの掌の上で踊らされているような錯覚をする。いや、それは間違つてないのだろう。

なぜならあの『女』は全知全能とは行かずとも、恐るべき力を持つ『女』は確実に神だ。

神だからといって全てが許されるわけではないが、神の責務を捨て、その役割をなくしたあの『魔人』は強い。

そしてこの時代、強者こそが全てを得、敗者が全てを失う。

自分が18年を生きた世界とは違い、この世界には明確な法は存在しない。

自分が生きた時代でも完全な人間の管理は出来ていないのに、モラルや論理観倫理観。

そんなものだけで律せられるこの時代において力と暴力こそが最上の力である。

権力なんて暴力の前ではクソ程の力しかないってことだ。

「——だからじゃろう？主が力を欲したのは」

走るっているのにその女はいつの間にか横にいた。走り過ぎると同時に言われた言葉が心に突き刺さる。

「違う。俺は力なんて求めてない」

走りすぎたはずの女がまた横に現れる。

「違う。お主は最初は嫌がったも途中からは楽しそうにしたりたぞ。

相手を倒す時も興奮したじゃろ？返り血を浴びる瞬間はよかったじやろう？」

「楽しんでなんかいない！」

叫びながら走りぬく。だが女は再び現れる。それも一人ではなく今度は何人でも。

「違う。ないさ」

「お主は楽しんでおったよ」

「女をダシに使うのはやめぬか」

「大丈夫です。玖楼はここに、ちゃんとここにいますから。安心して下さい。消えたりなんかしませんから。ちゃんと私の腕の中で生きて、呼吸していますから。もう、怖がらなくてもいいですから、ね」

荒い息を何とか落ち着かせようと必死に深呼吸を繰り返す。腕に抱かれたまま深呼吸を繰り返すうちに段々と落ち着き、

状況が飲み込めるようになってくる。肩越しに周りを見るとそこは少し前までは見慣れていた場所、冥き途にある自分の部屋だ。

小さく帰ってきたのか、と呟きながら自分の体を抱いていた腕を緩め、体の震えが止まってゆくを感じる。ここへ来て安心してゐる事に気がつく。

「戻、って……来たのか……？——そうだ！そんなことよりも！」

そんなことよりも、もっと大事なことがある！彼女だ！彼女は無事か？無事なのか？！彼女はいるのか？！

「リタ、彼女は、彼女は無事なのか？無事なんだよな？！」

リタの両肩を抑えるとその体をがくがく揺らしながら彼女の事を聞きだそうとする。

「ぶ、ぶ、ぶ、無事ですから、ら、ら、ら、ゆ、ゆ、ゆ、揺らすの、やめてください！」

がくがく揺らすリタを解放すると同時にほ、つとため息を吐く吐く。彼女が無事だったと、その安堵感が体を包む。

同時に体にまだ気だるさを感じるのを自覚してベッドへと再び倒れ

こむ。はあ、と再び安堵の息を漏らすと頭だけを動かし、ベッドへと腰掛けるリタの方向へと顔を向ける。何よりも知りたい事を聞く。

「それで、サティアは何処にいるんだ？無事なんですよ？」

ベッドに腰掛、背中を向けるリタへと言葉を投げかけるが返事は返ってこない。

「なあ、一緒に連れてきたんだろ？外でナベリウスと話してるのか？仲良かったもんな」

リタは背を向けたまま動かない。

「なあ、リタ……？」

背を向けたまま身じろぎもせず、リタは動かない。ただ静かにベッドに腰掛けるだけ。そして……

「サティアなら、ここにいないわよ」

一瞬、何を言ってるのか完全に理解できなかった。

彼女が……いない？それはおかしな冗談だ。助かったんだろ？無事なんだろ？だったら、何でいないんだ？

あ、分かった。少し外を歩いてるんだろ？治療の水がなくなつて傷薬の材料を採取に行ったとか？

もしくは……ほら、村の様子を見に行ったとか。そういうことだよな。ああ、そうに違いない。

だからさ、

「何とか言えよ、言ってくれよリタぁ……！」

肯定でも否定でも、どちらでもいい。ただ、何か言葉がほしかった。だがそれすらリタからはない。

背中からはまったく感情が見られず、どこか冷たい印象を受け取れもするそれからはどんな情報も見取れない。

ひたすら喚く様に仮説を立ててゆく。少し散歩に行つたと。

材料を探しに行つたと。

誰かとおしゃべりしてると。

村の怪我人の様子を見に行つたと。

途中から思いつけず同じことを何度も言っていることに気がついても止められない。

とにかく『ここ』にいないという事を否定したくてただただ叫ぶように仮説を投げつけてゆく。

整っていた息は荒くなり、ただひたすら絶叫するかのごとくいないという事を否定してゆく。

だが否定してゆくたびに自分が惨めに、そして彼女の存在を感じないことが明白に分かってくる。

やがて、息も絶え絶えになってリタの背にしがみつくと、ゆっくりとだがしつかりと、

はつきりと聞こえる声で言った。

「『隠しててごめん。さようなら』。それだけを言って去ってったわ」

それが、黒川玖楼がサティア・セイルーンから貰った最後の言葉だった。

そして意識は再び闇に落ちる。

●

玖楼が倒れてからの話は簡単なものであった。

あの時、最後に聞こえた声はナベリウスのものであった。元々玖楼が野鎚との戦闘中に使った絵札、もしアレが発動された場合はそれを俗座にナベリウスとリタへと伝える仕様になっており、それを感じ取った二人が転移魔法でやってきた。ただそれだけである。

だが、そのおかげで玖楼は助かった。

すぐさま『女』の攻撃を妨害するとナベリウスが交渉し玖楼たち三人の命を見逃させ、そして女を追い返すことにしたのだ。そう、三人……つまりはフェヴもあの惨劇から逃げ延びたのだ。

ただ、玖楼、サティア、フェヴを除いて村は完全に消え去った。

ただ帰るのもつまらない、そういう理由で野鎚に残りの村人と村を完全に食べさせると、

これで十分暴れたといって帰る。そして残った三人のうち二人を連れて帰ろうとし、一人がそれを断り消える。

これが、事の顛末であった。

若き騎士に屈折を与え、

古い神に悲しみを与え、

そして青年の心を砕いた。

まさに悲劇としか言いようのない終わり。

だが、それでも生き残った。生き残ってしまった。その罪悪感、喪失感、無力感。

玖楼の中で様々な感情やものがせめぎあいぶつかり合い、そして蝕んでいた。

リタより事の結末を聞いて以来玖楼は無気力になり日々、何もせずにごすようになっていた。

一日をずっと自分の部屋の中で済まし、食事も最低限のものしかとらなくなった。そのため体は段々と細くなり、

筋肉も目に見えて落ちてった。健康的だった体は段々と不健康に、髪も伸ばしっぱなしになり、

たった3週間と言う時間で玖楼の姿はまるで別人に、若干病的な姿へと変わっていた。

もちろん同じ冥き途の住人も心配し、何度も話しかけるが、返事が生返事ばかりでまともな返事がない。

そのためどんな風に接せばいいのか分からない結果、しばらくそのままにしてみようと、

その結果が現在の状況であった。

そしてやはり、どうにかできないかと再び話し合いが行われていた。

「そんなわけで第45回玖楼を蘇らせましょう会議」

どんどんぱふぱふと、リタが口で言うがついてくるのは静かにいえーいと言うナベリウスぐらいで、

リッチもマクレガーもケルベロスも何かまだやるのかという視線を向けてくる。

「もう既に1日2回のペースで会議が開かれているのだが……」

「気にしない方向でお願いします」

「既にしばたく放置するって方針で決まったのだと思うのがね……」

「忘れました」

「がう。がう……ぐるるるう」

「黙ってる犬」

「クウーン……」

「こつち……………おいで」

犬扱いされた地獄の番犬が頂垂れて丸まりながらナベリウスによしよしと頭を撫でられ慰められる。

その光景に対して生ぬるい視線を向ける元人間が二名ほどいるが、それを無視してリタが話を進める。

「この3週間玖楼を見てたけどこのままではいけません！」

「3週間どころか半日しか持たなかったな。こういうのをブラコンと言っのか。……………む、義姉弟モノか？」

ザクリ。ブス。ドカ。バカ。バコーン。

「リッチイイイイイイイイイイ！……！」

リッチ、会議本格開始前から脱落。無念。

「リッチ……………自重」

玖楼と出会う前のリッチとナベリウスが今の自分を見ればかなり驚くほどの変化ではあるが、唯一突っ込める立場のマクレガーはわが身可愛さにツッコミなど入れはしない。

リタのツッコミを喰らって散骨されたリッチの骨が冥き途の湖に落ちてどこかへと流されてゆく。

「さあ、反対者がいなくなった所で会議を始めます。では『どうやって玖楼をあ部屋から出すか』、もしくは『どうやって玖楼を元氣付けるか』、というのをテーマに

今日の会議も勧めたいと思います」

周りを見渡し、

「はい、それではマクレガー少尉から」

「私か?! 考える暇も与えないとは容赦ないな君も!」

「いいからさっさと適当に提案して下さい」

「リタ……………若干…やさぐれた?」

「玖楼分が圧倒的に足りませんから」

「ついに認めたな。っと仕方がない。ここは最終兵器を出す時が来たようだな……………」

「さ、最終兵器……………?」

・作戦その1: マクレガーの最終兵器

玖楼の無気力で暗いテンションとは違って冥き途の人外達は既にキャラ崩壊が大いに進み、

原型が見る影もない彼らは確実に悩んでいながら状況を楽しんでいた。

そんなマクレガーがラメ入りペ。シマンのような姿をしておきながら何処からともなくと、
薄い本を一枚取り出す。

「男が元気を出すと言うなればこれしかない！」

薄い本を持ったままマクレガー死者の門がある広間の隅、玖楼の家へと向かおうとする。

「では、私はこれを玖楼君へ進呈——」

「——はい、アウトー」

高速で振るわれたリタの魔槍がマクレガーの腕と足を同時に斬り飛ばすと、その腕に握られていた薄い本が宙を舞い、ナベリウスの前に落ちてくる。それをナベリウスが拾い、そして開く。

「あ、待ちたまえそれは……」

マクレガーの静止を無視してナベリウスが開いたページを見ながらページをめくり次のページを見る。
リタも槍をマクレガーに突き刺して地面に縫い付けるとナベリウスの横へと回りこみ一緒に薄い本を観賞する。

「……………おお……………」

「こ、こんな格好するんですか？」

「あ、あれ……………お嬢さんたちー？」

「……………なるほど……………」

「出来たら散骨されるのはアレで最後にしてもらいたい」

閑話休題

「この（将来）大魔導師と呼ばれるリッチが見事に玖楼を絶望の底から引き上げて見せよう！」

作戦その2：リッチの秘策

カタカタ骨の音を鳴らしながらチツリが骨しか存在しない胸を張って自慢げに宣言する。

だがその存在自体に既に信用がないのかリタはリッチに疑いのまなざしを向ける。

それを見て自分の信用のレベルの低さに気がついたのだろうか再びカタカタ笑い出す。

「は、は、は！このリッチには秘策がある！」

「「な、なんだってー（棒）」」

「いや、流石にそこまで期待されてないと思うと私でもいささか傷つくのだが。」

というよりも目立ったミスや失敗はしてないのに何故私がこんな扱いを受けるのだね」

ナベリウスが一瞬考え込むような仕草を取ると頭を可愛く傾けながらリッチを見やり、

「……………若い…から？」

「まさか年齢を話しに出してくるとは私も予想できなかった」

「節穴ですね」

「目玉はないからな」

骸骨ジョーク。

そんなことよりも、とリッチがステッキを取り出す。とんとんと地面を叩き、魔方阵を砂地に描き始める。

魔方阵を高速で砂地に描き終わると再びとんと叩く。一歩下がると輝く魔方阵から木材など様々な物資が現れる。

それを眺めるとステッキを数振りし、木材を切り裂き細長い形へと変える。そこで三人を見渡すと、いいかね、と言葉を始める

「玖楼は——釣り馬鹿だ」

ふたたび、いいかね、と言葉を始める。

「玖楼は食事のためといって浅い階層の魔物を皆殺しにして釣り場を確保するほどの釣り馬鹿だ。そう、釣りをこよなく愛するのだ。ルアーと言う新しい釣り餌を用意させてまで釣りをしようとするほどの釣り馬鹿である。」

だからこそ！必然的に！玖楼をあそこから引つ張り出す方法は……釣りであると私は言おう！」

「「「おおおお！！！！」」」

今度は先ほどまでのような棒読みの様ないい方ではなく、ちゃんと驚きと感嘆の声が混じった声を挙げていた。

テンションが上がってきたのかリッチの声も上がってき、そして行動も大振りになってゆく。

「玖楼だけではない！私も日々成長……いや、進化しているのだ！最初は完全には発音できなかった、玖楼の正しい名前の言い方も練習した今ではちゃんと言えるだけではなく、料理だって覚えたぞ！」

実を言えば玖楼の名前に関しては冥き途の住人なら誰でもいえるようになっていた。

「一度美味しいものを食べると中々忘れられませんよねー」

「そう！私！（将来の）大魔導師リッチは！日々進化しているのだ！玖楼のアイデアで始まった竿作りも最初は粗末だった！

だがそれでも私は諦めなかった！玖楼がでて行った後でも私は自分への鍛錬を怠らなかった！」

「負けず……………嫌いなだけ？」

「コレを見るがいい！」

リッチがステッキを振るうと魔方陣から現れた材料がドンドンと勝手に加工されて行き、

その姿かたちを変えてゆくと融合して行き一つの形へと、新たな釣

竿へとその姿を変貌してゆく。

マクレガーがボソッと努力の無駄遣いと呟くがハイテンションに入
ったリッチにはそれも聞こえず、

カタカタ笑い声を上げながら完成した釣竿を掲げる。

「見よ！これこそ一級の素材を使い完成したリッチスペシャルZ
X
！」

「名前が激しくダサイです」

リッチのテンションはこの時点で最高潮だった。脳みそなんても
う既にとうの前に腐ってなくなっていたが、

それでも脳内麻薬が全力分泌されている状態に近かった。そのため、
リッチの思考は現在進行形でやばかった。

そう、そのためリッチは自らの言動の影響を殆ど考えずに喋ってし
まった。

「成長や進化をやめた年寄りとは違う！私はまだ若いのだ！伸び幅
はまだある！」

「……………かつちーん」

「言ってはいけないことを言いましたね」

「さよなら友よ……………」

「あ」

リッチが自分の発言の軽率さに気づいた時には既に遅く、リタもナ
ベリウスも準備万端だった。

「は、はは、話し合おうじゃない——」

「死角の投槍」 「ルカーナの轟炎」

作戦その2：リッチの秘策。アホな発言により自爆

●

「……男達……使えない」

「……私の場合どちらかと言うと邪魔されたのだが」

「……あんなもので元気になるのなら………もう既に元気」

「ふむ、そういうのならば、もちろん何か秘策があるのだろうね？」

「リッチ……生きてたのか」

「今度ばかりは流石に死者の門をくぐりかけた」

「人を年寄り扱いする骸骨よりは……いける」

「………結構根に持つのだな」

「ぷん………ぷん」

作戦その3：ナベリウス式テンションの上げ方

玖楼の家の前には大小さまざまな楽器が置かれていた。古今東西その種類は問わず、

いろんな文化が入り乱れ混じる、小さな万国楽器博覧会な状況が出来上がっていた。

その楽器群の前でナベリウスはケルベロスから降りた状態で胸を張りながらえっへんと言ひ、

「昔を……参考にする……ことはよくある………こと」

「ほう」

「昔………一人の神が死者の門を通って………天岩戸でヒツキーを始めた」

なんだかとてもない話が始まった気がするが誰もつつこまない為にナベリウスのゆつくりとした口調での、
玖楼を引き出す作戦の概要が説明される。

「引きこもったせいで世界が真っ暗になって………皆困ってヤケになって………
お祭り初めてたら………寂しそうなヒツキーが………出てきて捕獲」

「……私の知っている神話と何かが違う。これは深く考えてしまつたらダメなのか」

「だめ」

「了解した」

リッチのような結末を迎えたくないがために自分を無理矢理納得させる。

ナベリウスのほうも準備が完了したのか、太鼓つばい楽器の前に立つと、リッチへと視線を向ける。

「眷属……………貸して」

「ふむ、コレだけいれば大丈夫かね？」

一つの楽器に一体という配分でリッチが何体もの眷属を召喚し始める。

リッチはまだ若いながら不死王と呼ばれるだけの死霊術師。必然的に召喚される眷属はゾンビやスケルトンしか存在せず楽器に死体が群がっている、

そんな楽しいからはかけ離れた地獄絵図がこの時点で出来上がっているが誰もそれに突っ込みはしない。

周りを見渡して満足いったのか、ナベリウスがこくこくと頷くと、ドラムスティックを手に取り構える。

「これから……………やるから…パターン覚えて。玖楼の記憶を見た時に……………一番印象が強かったの……………やる」

言い終わってから一呼吸をおくと、小さな手で握ったドラムスティックで太鼓つばい楽器を叩く。

本来この大きさの人間なら1回で疲れ、手が痺れるものだが魔神であるナベリウスには関係なく、

リズムよくどんどんと音を奏でてゆく。一ループし始めたところ

作戦その4：リタの最終手段

玖楼の家の前にはリッチ、マクレガー、ナベリウスと揃っており、その前に立ちはだかるようにリタが立っていた。

何時もは付いてくる魔槍も今ばかりは死者の門近くで寂しく浮かんでいる。うんうんとリタが頷くと、

人差し指を上げ、それを三人へと見せ付ける。

「そう、玖楼が何故ここまで落ち込んでいる原因を改めて考えるのです」

「原因……」

「やっぱり……女に逃げられたことか？」

「そう！そこです！」

ビシ、っと正解を言い当てたマクレガーへと指の先を突きつけるとマクレガーの薄い本を取り出す。

「あ、私の秘蔵」

「そんなわけで」

シユタ、っとリタが本を持った手とは逆の手を持ち上げ、『さらば』とバックに見えてきそうなポーズをとる。

「——私の体で前の女を忘れさせればいいと思いました」

「少し頭を冷やそうか、リタ君」

即座にリッチの眷属が現れたリタを羽交い絞めにして玖楼の家の前から引つ張り降ろす。

それに抵抗して眷属を物理的にちぎっては投げるのを繰り返すが眷属の召喚速度の方が速く、

リタが完全に開放される前に四肢を拘束され、どんどんと現れてくる眷属の山に溺れてゆく。

「リタ……………勇者……………つぽ」

「はいそこ、想像して顔を赤らめない」

「は、放してください！私には！私には玖楼を慰める仕事があるのです！」

「現実に戻ってくるんだリタ君！そんないかがわしい仕事はここにはない！」

作戦その4：リタの最終手段。色々間違っていると判断され中止。

●

結局、玖楼を元気付ける方法が4人には思いつけなかった。こうやって囲んで考えれば考えるほど、

自分達が戦うこと以外は殆ど何も出来ないことに気づき、あまり気になりはしないが少し残念には思う。

結局は、本人が自らの意思で出てきてくれる事を待つしかない。そ

う結論づいてしまった。

「はあ……。結局、できることは少ないですね」

「そうだろうな。我々のように人をやめてしまった者には分からない傷や痛みなのだろう、それは。

だからこそ我々では力にはなれない。唯一心の支えとなっていた女性が消えて行ったのではやはり辛だろう。

せめて玖楼のような存在があと一人でもいれば、それだけでも心の支えになっただろう……」

「歯痒くは感じるが、信じるしかないのだろう」

「……今からでも遅くはないです。私が――」

「それはもういい」

こうやって4人で集まりやはり何か出来ないかと話しあっている中、家のある方角から久しぶりの新しい音が聞こえてくる。

それは木で出来ている床がきい、と重みで軋む音。ここ1週間、ベツドからまったくといっていいほど降りなかった玖楼の家から聞こえる、

本当に珍しい音である。ゆっくりと、ゆっくりときい、きい、と音が小さく鳴りながらそれが近づいてくる。

そう、扉の方へと近づいてくるのだ。

それが聞こえた4人全員が声を殺し、視線を家の扉の方へと向ける。

玖楼の家。それは玖楼がやってきた最初の数日でリッチに頼み作

られた玖楼の冥き途での住処。

最初は岩でできていた家だが、それでは住み辛いという話で木が手に入り次第すぐさま木の家へと変わり、

それから壊さないように大切に住んでいた玖楼の家。

玖楼が冥き途を出た短い間でもちゃんと手入れをされて綺麗に保たれていた家。

その扉がゆっくりとだが、開いた。

まず最初に見えたのは手だった。それから腕、肩、顔と、そこから見える玖楼の姿は痩せていた。

全体的に体の筋力が落ちていくように姿が見え、そしてその姿からは病人を連想できた。

今、この瞬間も、立っているのがまるで億劫そうに扉にしがみつきのながら家の外へと出ようとしていた。

「あ」

扉から手を放し前へと進もうとする。だが扉から離れて数歩で躓き……砂地に顔から倒れこむ。

リタが助け起こそうと動こうとするが、それをナベリウスが手の動きで静止する。頭を横へふるふるとふり、

リタへと見ているようにと視線で促すと再び玖楼へと視線を向ける。

「っ、っはあ、っはあ」

玖楼は両手で体を地面から押し上げ、何とか再び立ち上がるとナベリウス達4人へと向けて歩き始める。

歩くことを覚えたことばかりの子供のような遅い速度ではあるが、それでも一歩、一歩、確実に前進していた。

砂地と浅い湖、その境へと到達しても躊躇する事無く足を入れて進もうとし……そして倒れる。

だが立ち上がる。

再び立ち上がるとずぶ濡れの全身を気にせずともゆっくりと4人へと近づいてゆく。

その姿には鬼気迫るものを感じられた。だが誰も何も言わない。何もいえない。

この玖楼には、この3週間前からの玖楼にはなかったものが今、存在していた。

それは覇気。生きることへの渴望、圧倒的な生命力。

その行動一つ一つからは死ねない、死にたくない、やることがある。そんなことを感じさせる必死さがあった。

だからこそ、ナベリウスはリタを止めた。今玖楼を助けてはならない。この行動には意味がある。

ただ吹っ切れただけではなく、玖楼は何かを見ている。

一歩一歩歩き辛い水の中を転びながら倒れながら滑りながら水底の砂に足を囚われながら、

何度も何度も倒れようともしその度に立ち上がって進み……そしてたどり着く。

死者の門の前、2人の常識の外側とその雛形。^{アウト}将来確実に常識の範疇を超えるであろう2人の前に。

その前で跪くように倒れると、上半身だけを持ち上げて4人を暗闇の見上げた。

「リッチ、ナベリウス、リタ、マクレガー……！」

4人の名前を確かめるように言うと、再び言った。

「頼む、自分を――殺してくれ」

後戻りすることの出来ない言葉を。

一章　く流れ着いた先にく　完

第

第九話 始まる場所は終わる場所（後書き）

はい、そんなわけでついに第1章を完了しました。

まだエピソードが残っていますが、それは軽いまとめと第1章の第2章、

その間に起きる数年か十数年、その間の時代の動きを軽く説明するだけなので、

せいぜい2000文字ぐらいになる予定ですので、第1章はここで終わります。

第1章自体がプロローグの様なものなので、本格始動は第2章です。

そう、お・り・が・みサーガはまだ始まったばかりなんですよ！！

第1章がシリアスばかりでしたが、第2章からは本格的にバトル＆ギャグを心がける予定です。

これ以上はネタバレになりそうな木がするので喋りませんが、あえてヒントを出すのであれば、

お・り・が・み、

幻燐の姫将軍、

そして戦女神ZEROからのキャラが登場予定です。

なんとか地球に戦女神キャラを投入しつつお・り・が・みっぽいバカっぱさを演出するのにな、

色々と四苦八苦していますが、これからもよろしくしていただけると作者としては嬉しいところです。

すみませんが今回はステータスはなしです。

総合評価も228と予想外に高くなっていたり、
総合PVも34,092と、皆様のおかげで数字が高くなってきます。

といつても作者は数字よりは感想が増えて楽しんでもらえていることさえわかればうれしいので、
細々と読者と楽しく勧めてゆきたいと思ってます。

それではエピソードを挟みまして第2章でお会いしましょう。

さようならさようなら。

〜 Epilogue 〜 (前書き)

ゆっくり書こうと思ったたら既に書き終わっていた。ど、どっいづいとなんだ。

ゆっくりできないよ！

～ Epilogue ～

——ある日の朝、教会に光の軍神、マーズテリアより言葉があった。

その言葉はとても短く、完結的ではあった。

『天に乱れあり。これより人の世に戦乱と時代来る。我が信者よ、心せよ。』

これよりこの世に魔の神と魔を宿す人による神々の黄昏訪れる。武を磨け。知を高めよ。守りを固めよ。災厄に備えるべし』

これを受け、各国の動きはさらに活発化した。多くの国々が魔神等の強襲に備え軍事力を強化し、フリーの傭兵を国の兵士として矢と入れるなどの行動を起こし、世界が動き始めていた。

だが、災厄の到来を伝えたのは決してマーズテリアだけではなかった。

小国に存在し、人々に助言を与え見守る、精霊から成長したといわれる神、『水の巫女』。

彼女も世界に向けて言葉を発していた。

『東方より災厄の種来たる。その災厄力をつけやがて神々のあり方を壊すであろう』、と。

——神々の黄昏は不可避だった。

人の世に神々の言葉が伝わってから1年。次の年には既に多くの魔物が凶暴化し人を襲っていた。

だがそれだけではなく、魔神級の力を持った者が単独で国を攻めては国を落とし、己の国とする。

そんな魔物や魔人が現れ始めていた。神殿教会もそれに対応するべく保持する神格者や多くの騎士を出すが、

それでも魔物の被害や魔神達による凶行は減る所ではなく増えていった。

光の勢力が教会だけでは、圧倒的に暴力に対する力が足りなかったのだ。

それからだろうか、各国の軍事力が上昇し始めたのは。

否、それは国が力を増したのではなく、未曾有をの危機を前に、人が進化を、成長を始めたのだ。

今までは限界だったといわれるレベルまで到達しても、さらに成長を続ける者が段々と現れ始める。

人間が、理不尽な力に対するための、対抗するための種族としての進化だった。

凶暴化する魔物にそれに対抗するために強くなる人間。

光の勢力対闇の勢力、世界全土に広がった神々の黄昏はまだ始まったばかりである。

その争いに関われないものなんて存在しない。誰もが奪おうとし、奪われまいとしようと抗っている。

——そしてそれは『彼』も変わらない。

世界は動く。神々は動く。そして人も動く。

その中でやはり、『彼』も動く。

流転し続ける世界で人々は休む事無く日常と非日常を繰り返すように
に行き続ける。

この世界の神話はまだ始まったばかり。

『彼』もまた、世界と共に流転し続ける……。

♪ Epilogue ♪ (後書き)

たぶん加筆が入る可能性が大ですが、
一応ここでエピローグ(仮)完成としておきます。

第一話 小国（前書き）

遅れましてこんにちわー。やっとできました。それではどうぞ。

第一話 小国

「兄貴！朝だよ！早く起きて！」

「ああ……分かつてる……分かつてるから顔をたたくのは止めてくれ……」

赤毛の少年がベッドで半分だけ意識を覚醒させた青年の顔を叩いたり体をゆすつたりしたりし、
なんとか兄と呼ぶ青年を起こそうとする。それを鬱陶しく思いながらも、蠅を退けるように手を動かしながら体を起き上がらせる。
上半身だけ起き上がると既にオーバーオール姿に着替えてある赤毛の少年が青年へと笑顔を向ける。

「おはよう兄貴！」

「ああ、おはようレイ……」

「早く起きてよ！もう義姉さんが朝ごはんを作ってるよ！早く来ないと作り立てで食べられないよ」

「ああ、分かつた分かつた。起きてる。俺は起きてるって」

赤毛の青年が促されるように完全に覚醒し、足をベッドから下ろすと赤毛の少年、

レイと呼ばれた少年が満足そうに頷き部屋の入り口へと向かい、ドアを開けて半分出たところで振り返る。

「二度目はダメだぜ？」

「かつこつけなくても分かつてるよ……」

ふわあと、軽い欠伸を上げながらのそりとベッドから起き上がると、部屋から出てゆく弟を見ながらも、

ベッドの横のクローゼットをあけて、ハンガーにかけてある自分の今日一日の服を取り出し、

それを手に持ちながら窓から見える町の光景を見る。日はまだ昇ったばかりで町を霧が包むが、

どこか近くから鶏の鳴き声や、店を開けようとする店主や店員の声、他には夜更かししていた冒険者の声も聞こえてくる。

雲があまりかかってないことを見ると今日一日もどうやら晴れになりそうだ。

「兄貴朝ごはんできたぞー！」

下、1階から兄を急かす弟の音がする。着替えすぐさま下へと向かう前にもう一度窓の外の景色を見る。

「今日も一日、世界が平和でありすように」

そう呟くとまた怒鳴られないうちに着替え始めた。

●

2階から1階へと降りてくるとそこには多くのテーブルや椅子が置かれている空間があった。

その一角にカウンターが設置されており、奥に厨房が見える。既に

カウンターのの上には3人前の食事が用意されており、
レイと呼ばれたおかげの少年と緑色の髪をした女がカウンターを挟
むように座っていた。

「遅いわよ」

「悪い悪い」

「それじゃ3人揃ったしもういいでしょ？」

「ダメだろこら。ほら、早く手を合わせろ」

「はぁーい」

「っはぁ……」

ため息を吐きつつも三人揃って両手を合わせ、俯き、祈る体制を
とる。

そこから小さな声で、赤毛の青年が声を出す。

「セーナル様、今日もこうやって我々が食事につけるのは貴方のお
かげです。

今日も我らの食卓と懷に少しばかりにお恵みをお分け下さい……」

日々の神への感謝は忘れない。忘れてはならないのだ。

こうやって毎日商売してられるのは神の恵みであり、自分達の力
に銜えて神の加護がある。

自分達の生活は神に支えられていることを忘れず感謝し……祈りを
終える。

「よし、食っていいぞ」

「よっしゃああー!!」

苦笑を漏らしつつも自分も皿の横に置かれているフォークとナイフを手に取り、皿の上の料理へと手を進める。

朝ごはんにはたってはシンプルにソーセージとザワークラフト、パンとサラダという、

この地方では割と普通の朝ごはん。ナイフでソーセージを切るとザワークラフトを乗せて口へと運ぶ。

何時も食べる朝ごはんではあるが、一種の習慣のようなもので飽きると言うことはない。

今度はサラダをフォークで刺しながら野菜を食べる。横目で弟の様子を確認すれば嫌そうな顔をしながらサラダを食べている

残そうとしないだけ感心だな、と思いつつさつと食べ物を口へと運ぶ。

「兄貴兄貴」

「お前……口の中の物を飲み込んでからしゃべろよ」

「んぐっ……ごくん……兄貴！今日はどうするの?！」

「どうするって……何時も通り店を開いて料理して、酒を出して、そしてちゃんと商売をする……ってぐらいかな、リシア」

「ええ、そうね」

リシアと呼ばれた女性は笑顔を青年へと向け、それを受けた青年

を恥じらいを隠すように朝食を食べる。

それをからかおうとレイが何かを口に出そうとするが、その前に青年の拳骨が頭へと落ち、

レイの口を閉ざす。痛そうに頭を擦るが、その顔に恨みなどの負の感情は一切存在してなかった。

三人は家族として、平和な朝食を楽しんでいる。都会の何処でもあふれかえる一風景。

レイはまだ話したりないのか、食べ物素早く飲み込みつつまた新たな言葉を放つ。

「兄貴兄貴！」

「お前さ、もう少し落ち着いて食べよ……」

「いやだってさ。食ってるのだけってつまらないじゃん」

「おま……食べられることに感謝しろよ？」

ここは他のところと違って戦争なんてしてないし王様のおかげで豊かなんだからな。

他のところは撤兵とか兵役とか結構酷いところもあるらしいぞ？」

「んー。なんかよく分らないーい」

「はあ……まあ、そうだよなあ。っと、サラダおかわり」

「はいはい。よく食べるわねえ」

「朝食は大事だからな」

皿を私、サラダの代わりが来るまで最近の情勢について考え直す。

この十と数年で世界は大きく変わった。今までは姿を殆ど現さなかった魔神がその姿を現すと、

まるで欲望の赴くままに行動を初め、多くの国が滅んだ。幸い、自分がいる国『グルーノ』の王は賢かった。

他の国みたく検討もせず、即座に兵力の増強、教会の介入を恐れずに教会の人員を緩し、

そして近隣諸国との繋がりを強化することに乗り出した。魔物は凶悪化し、世界は大いに乱れている。

だがそれでも人は力強く生きている。それを証明するかのように冒険者も兵士も、力が上昇している。

今までは到達不可能といわれるレベルにまで到達するような人間も風の噂では現れているらしい。

「はい、おかわり」

「ありがとう」

皿いっぱいに盛られたサラダを受け取るとそれにフォークを刺し、口に運び始める。

ドレッシングが変わったのか、先ほどとは少し違うサラダの味を楽しみつつ今日の業務に関して頭を向ける。

たった三人で切り盛りしている小さな酒場だが、それなりに常連も来ていて生活に困らない程度には繁盛している。

今日も、やることはいっぱいある。ここ数年で活発化した冒険者のおかげで酒場や武具を売る店は繁盛している。

まず朝ごはんを食べ終わったら仕込を始め、レイには掃除をさせて、リシアにも手伝ってもらって……。

「兄貴兄貴！」

「もう頼むから静かに食わせてくれよ……」

「兄貴！いや……むしろロイ！」

「何がいやむしろだ！兄を呼び捨てにしてるんじゃない！」

「痛っ！頭を叩くなよぉ」

「これから親愛と尊敬を込めてロイ兄か、ロイ様か、もしくはお兄様と呼べ」

「おにいさまぁ〜ん」

「よし、拳骨10発で済ませてやる」

「潰れる！俺の頭が潰れるよ兄貴！やめて！」

「朝から仲がいいわね」

朝から軽い笑いを笑顔を起こしながらも朝食を食べる。

先月は先週と変わらず、先週は機能とは変わらない。平和な、平和な日だった。

だから、今日も機能と変わらない平和な日である。そうなって欲しくて、笑顔でいて欲しくてそう祈る。

「ご馳走様」

「お粗末さまでした。やっぱりロイ君には敵わないなあ」

「まあ、本職だからね。簡単に追い越されるようになったらそれこ

そ商売上がったりだよ。

そうならないためにも日々料理の腕を磨くことに勤しんでるからな」

そういいながら立ち上がり、自分の皿をカウンターの裏の厨房へと持って行く。

バケツの中に溜めてある水を使って皿とナイフにフォークを洗うと、乾かすためにそれをラックに乗せる。

店に出すための食器と家族で食事するための食器は別に使い保存してあるためにこれが出店に入る心配はない。

濡れた手を布で拭くと厨房から出て、店の入り口の方へと歩く。レイもリシアも食べ終わったのか食器を厨房へと運び始めた。

「そんじゃレイは中の掃除を始めてくれ。リシアは制服に着替えてきて厨房の方をよろしく」

「はい」

「おーす」

「お前その変な返事の仕方誰から習った……」

「スタリアのおっさん！」

「……………今度ウチの弟に変な言葉を教えないように言っておくか」

城の門番をしている気さくな兵士の事を思い出しいい人ではあるが、

少々困った存在でもあることを思い出すとため息を吐き、店の扉を開ける。未だに朝として時間が早い、

それでも町は徐々に賑わいを見せている。視界を遮る様な霧も朝日

に照らされ大分薄くなってきた。

入り口近くにおいてある箒を手にとると、開店前に入り口周りを掃除しようとして前へと踏み出したところで……

ぐにい

……何かを踏んづけた。硬くない何かを。足にちょっとだけ力を込めて踏む。

ぐにいん

間違いない。足元に何かがある。だが見えない。いや、見たくない。感触からしてアレだ。

絶対に人型のアレだ。間違いない。見なかったことにしよう。それがベストだ。うん。

自分を無理矢理納得させ、踏んでいた足をどけ、その横へ足を下ろすが……

ぐにいい

「むぎゅっ」

また何かを踏んづけた。流石に今回はかりは見えてないフリはできなかった。意を決し足を退け、下を見る。

さっきまで足を乗せていた2箇所、そこには二つの生物がいた。すみれ色の髪の人間と、金色の髪の少女。

少女にいたっては何か血文字に見えるもので『犯人はヤス』と書いている。意味が分からない。自分の名前はヤスじゃない。

だが、それよりも特徴的なものが目に入る。

すみれ色の髪の人間の頭には四つの角が、金髪の少女には蝙蝠のような羽根が。

明らかに、普通の人間には存在しない部位である。それを証明することは一つ。この二人は――

――魔人だ。

●

魔力を持つ人間の事を魔人と呼ぶ。

普通の魔人とは人間とさして変わらぬ姿をしているが一部力の強い魔人などはその魔力が肉体に作用し、

その肉体が変質、特徴的なものが生まれる。角や翼などはその最たる例であり、睡魔族サキユバスと言った人型の魔物は、

その先祖が元々は魔人だったという話であり魔人からそういう種族へと『変化』する事が多々ある。

こういう魔人を色んな意味を込めて『闇夜の眷属』と呼ぶものが多い。

だから、目の前の彼女達もそうなのだろう。

角や羽と言うのは変化した魔人としては割りとメジャーな部類だ。だがただ待っていれば変化するわけではなく、魔人としてそれなりに長い時間をかけて魔力を練り、

そしてその魔力が突然変異を起こして肉体的な変貌を起こすのだ。

魔人を外見から年齢を特定することが難しい。

幼い子供のような姿をしていて1000年以上生きたと言うのもい

るが、どうやらそれはこの金髪の子供には当てはまらないようだ。

「がつがつがつくん……んぐつ？！ごくごくごく！！」

「あらあら、もう少し落ち着いて食べても逃げないわよ」

「おかわりー！」

「はいはい。ふふ」

食べ物之急いで食べ、それを喉に詰まらす姿は何処からどう見ても姿相応の年齢だ。

おそらくだが、この羽の生えた子は魔人ではなく、睡魔族に生まれた少女なのだろう。

ならば、と視線を金髪の少女の横で黙々とひたすら食べ続ける角の生えた女性へと向ける。

此方は睡魔族の少女と違い成人女性ほどの体の大きさに身を包む冒険者のマントから見て、

それなりに冒険をして生きていることが分かる。たぶんだが姿以上の年齢をしているだろう。

これは一種の予感に近いものだ。働いて色んな人を見ているうちに磨いたスキルのようなものだ。

だが、

「がつがつがつ」

「がぶがぶがぶごくごくごくがつがつ」

「がりがりがりがり」

「おかわりー！」

「店主すまないけど私もおかわりを頼む」

「あらあら、私は店主じゃないわよ」

精神年齢はどう見ても睡魔族の少女と変わらない。と言うか食べる速度は少女よりも早いし多い。あのほっそりとした体系の何処に食べ物が入ってゆくのか心底疑問に思える。

「ロイ君、追加でお願いね」

「おう」

10人前は余裕で作ったはずだがまだまだ満足してないらしい。魔人の胃袋は化け物か。

そんなくだらないことを思いつつも、冷蔵庫から肉を取り出し、フライパンを火にかけ調理を始める。

調理自体は既に体に染み付いているために、一々プロセスを考えずとも勝手に進めるため、

料理を始める前に早朝からの客の二人を改めてみる。

金髪の少女の方は見た目大体10前後で青いロングスカートのワンピースのような服装を着ている。

よく見れば短いツインテールの少し前に、髪の中に隠れるように猫の形をした耳が存在している。

ネコミミに蝙蝠の羽、それは間違いなく睡魔族の証。さらに観察してみればスカートの下で何かもぞもぞと動いている。

おそらく尻尾でも隠しているのだろう。その主、もしくは保護者のすみれ色の髪の女を見る。

こっちの方は角以外には魔人を示すような特徴はなく、見えるのはくたびれた茶色のマントから覗く白い腕だ。

二の腕まで出ている腕だが一切の布地が見えないあたりおそらくだがノースリーブの服装なのだろう。

その手自体は冒険者にはさして珍しくなくオープンフィンガーのグローブを着用している。

睡魔族の少女に勝る速度と量を、それでも不快感を与えぬように食べる姿をもうどこか感嘆を受けざるをえない姿である。

うん……食い意地はそっくりだな。

「ロイ君、まだ？もうなくなっちゃったわよ？」

「今出来た。ちょい待っててくれ」

フライパンの上で焼けていた分厚い肉を皿の上へと載せて、近くに用意されていたすでに斬られた野菜を盛り、

そして作り置きしてあるドレッシングとソースをかけて完成。それを厨房からカウンター席にいる欠食主従に渡すと、

二人が手を揃えていただきますと、といった後に再びかぶりつく。

「いただきます？」

食べる前にも聞いたが、聞いた事のない使い方だ。ニュアンスは分かる。

疑問に思ったことを答えたのは金髪の欠食少女だった。フォークを肉に刺したまま顔を持ち上げると疑問に答えを出す。

「あのね、それはね、食べ物と、それを作った人、関わった人に対する感謝の言葉なの」

「作った人達や関わった人たちへの感謝……」

その考え方は結構珍しい、とロイは思う。何せ今の時代、神への感謝が一番大事なものとされ、神の加護と慈悲による恵みによって我々は今の生活を続けていられるから、と言う考えだ。

だからその恵みを分け与える神へ感謝せず料理人や作物を育てた人、そちらへと感謝を向ける考えは新しかった。

だがまあ、良く考えれば目の前の二人は魔人と魔族、神を信仰しない者が多いからそういう考えもあるか、と考える。そこでふと、本当にそうかと思い、

「お嬢ちゃんは神を信仰してないのかい？」

「お嬢ちゃんじゃないよ！リリイだよ！んー。何かめんどくさいし……いい！」

……うん。何も聞こえなかった。そうしておこう。

たぶんマーズテリアの神官戦士辺りが聞けば呆然とするか、もしくは憤慨するであろう話を、

とりあえずは精神に悪いので聞かなかったことにする。うん。それがいい。

話が終わってリリイと自らを呼ぶ睡魔族の少女が肉を食べようと視線をさらに戻すと、そこは既に何もなかった。

除けへと視線を移すと、角付きの女が口をもしやもしやと動かしていた。

「あー！！！」

「よそ見るからだ。戯け」

「ずるーい！おかわりー！」

「あ、私もおかわりだ」

どうやら、食事はまだ続きそうだと、そう思いながら再び厨房へと戻ってゆく。

●

「はあー、食った食った」

「ふぎゅうー。おなかいっぱいー」

カウンターには山盛りになった皿の前に満足そうにおなかを擦る姿が二つあった。

見るからして30人前ほどの量が平らげられたこともあり、営業時間になって人が増えた店内では、

地味に二つの存在を賞賛する声が出ていた。食事が終わって、今すみれ色の髪の女の前にはコーヒーが、

そしてリリーの前にはパフェが置かれていた。まだ食べるのかと呆れそうになるも、口いっぱいにはおぼつておいしそうに食べる姿は見てて気持ちがいい。

「在庫を荒らすように食べて悪かったな店主」

「いや、払ってくれるのならまったく問題ないよ。これで食い逃げだったら色んな意味で頭が上がらないよ」

「そこらへんは安心して欲しい」

すみれ色の髪の女がマントの内側から白い布袋を取り出す。

それをコーヒーの横、カウンターのの上に乗せるとそれを店主の方へ押す。

「必要な分だけ取ってくれ」

完結的な言葉で指示されたロイがその袋を持ち上げ、中を開けると驚いた。

「き、金貨ばかりじゃないか、これ……」

一般的に硬貨は三種類に分けられる。銅貨、銀貨、そして金貨である。

その中でも地方によって様々な種類が生まれ、その硬貨の純度により価値が大きく変わるのだが、

その中でも中々の純度を誇る金貨と、少量の銀貨が袋の中には大量に詰まっていた。

銀貨一枚でも十分におつりが出るほどの価値があり、そこで少し焦る。

ま、まさか……どっかの貴族？！

これだけの金額を持ち歩ける人間なんて数が知れている。貴族か

王族、

もしくは凄腕の傭兵や商人ぐらいしか思いつかないが、身なりからして王族や商人はなくて、

傭兵だとしてもこんな小さな少女を連れ歩くとは思えない。それなりに少女の身なりもいいし、

貴族の少女とそれを護衛する魔人……とも見えなくはない。だが口のその焦りを感じたのか、

「あ、いや。気にすることはないよ。別にそういう怪しいものではないし。」

おつりもいらなから適当に……んー……そうだな、シウ銀貨一枚もあれば十分か？」

シウとは山岳の神で、ドワーフを中心に信仰されている神だ。

シウを信仰するドワーフが作成する純度の高い銀貨のためシウ銀貨と呼ばれている、

その銀貨を一枚袋から取り出し、袋を女に返す。

「やったね兄貴！これもセーナル様の導きだな！」

会話を盗み聞きしてたのか、モップで床を掃除していたレイが親指を立てながらロイに声を出す。

その声が聞こえて自分がはっとなると同時に、店の中から他の脚からの笑い声上がる。

幸い、店の中にいる脚の殆どが顔見知りで常連ばかりで。少しばかりレイが怒鳴ったり暴れたりしても問題はない。

「仕事中だ馬鹿やろう！お小遣い削るぞ！」

「兄貴の鬼！悪魔！」

「酷いぜロイ！」

「もつと弟には優しくしろよ！」

「シヨタっ子ハアハア」

「お前ら……！あと最後のやつだけは今すぐ消える。ウチの悪ガキの情操教育に悪影響だ」

暖かい雰囲気の中、新たな笑い声が生まれる。カウンター前に座っているすみれ色の髪の女だ。

コーヒーを下に置いて軽く笑うと、またコーヒーを一口含み、

「いや、悪いな。まるでコントを見てるようだな」

「コントって……」

「いい兄弟じゃないか。君の事を心配して声をかけたのだから」

「……まだまだ子供ですよ」

弟を認めてもらえたようで、少しだけ心が暖くなる。

「おっと、自己紹介を忘れてたな。私の名前はネロ・ライバー。こっちの」

未だにパフェに夢中なリリイの頭に手を乗せる。

「小さいのが睡魔族のリリイだ。私の使い魔だ」

使い魔、それはつまり魔術的つながりによって双方への利益を基にした契約。

魔術と『何か』のつながりによって形成される絆のようなもの。

この魔人は使い魔を持てる程度には高位の術者、と言うことなのだろう。

リリイが頭に乗った手の感触が何なのかと視線を持ち上げると、ネ口はただ笑顔と共に頭を優しく撫でるだけだった。

「美味しいよ！」

「ああ、知ってる。少し食った」

「何時の間に?!」

「ふふふ……分からない? 分からないか? でも教えない。何時食べたか分からず悶々としてるが良い……!」

「うううう!ー!ー!ー、ごしゅじんさまやるう……!」

リリイが頭を考えに酷使してるのか両手で頭を押さえ、目を瞑りながら必死に考えるが、その隙に手から離れたパフェを強奪しそのパフェを食べ始める。

「まだまだだな……」

「そこまでして食いたいのか……」

「分かってないなあ……奪って食べるから美味しいのだぞ?」

「ああ！私のパフェ！」

「ほれ」

「半分になつてゐる？！」

「修行がたりん」

「つ、次は負けない……！」

既に次回があることに驚きだが、慣れた様子を見るとこれももう何度が繰り返しているのだろうと、そう思いながらも目の前の存在を再度確認する。魔人とその使い魔。それでいてそれなりに身なりがよく、加えてお金も余裕があるのに何故か今朝行き倒れていた。

うん。まったく分からん。

だがその詮索するような視線に気がついたのか、ネロがおや、と言葉を漏らす。

「——私に惚れたか」

「いいえ違います」

即答。からネロが体の動きを停止し、やっぱりか……と声を漏らす。

やっぱりと言うのならは何故聞いたと聞きたくなるが、相手はまだ初見の客、

また来る機会があつたら――

「傭兵だよ」

「え？」

「私は傭兵だよ。仕事を探しにこの国へ来たんだよ」

ロイの疑問はネロの言葉によって答えられた。

傭兵、それはつまり王国や軍団、戦闘をすることの出来る組織に属して報酬の代わりに戦う職業。

あの袋の中身が全て報酬で手に入れたものだとしたらそれなりの実力者だと言うことが伺える。

もしくは、かなりいい仕事を最近貰ったのだろう。だが、

「今ここへ来ても仕事は殆どないと思うぞ」

グルーノの周りは小国が多くあるが、横のつながりを強化することで凶悪化する魔物に対処してきた。

軍隊の練度も高く、近辺の魔物も粗方掃討されているために傭兵としては仕事がないはずだ。

特に隣国の『ユークリッド』は別国勇者の血縁者が来たりと戦力的には高い。

もし仕事を探しにこの国へ来たとしたら、ガセネタをつかまされたといかないようにない。

それを短くまとめて説明すると、

「うーん、そう言われてもねえ……匂うんだよ」

「匂う？」

「ああ、戦の匂いをかすかに、空気に感じるよ。

まだ始まる前の、まだまだ生まれる前のの……これは惨劇の匂いだ」

「……不吉なことを言うなよ。宰相が変わってこの国は豊かに、安定してきているんだから」

ほんの数年前だが、この国は宰相が変わった。

前の宰相もそれなりに凄かったが、この最初はさらに凄かった。魔物に対する脅威に対して適切な指示、

外交に対する腕前、政務に関してはもはやグルーノでは必須といわれるほどに人物となっている。

そんな政務の鬼とも呼ばれる人物がいるのに、戦争が起きるのはおかしい。

「ふーん……政務の鬼ねえ。こう見えてこういう予感とかは外した自信がないのだが。

……まあ、そこまで民の心を集めたって宰相の名前聞いたことがないのだがそれで、どんな名前なのだ？」

そこでロイは言った、この国、グルーノの新しい宰相の名前を。

「マニホルド・エステイ」

ネロの瞳が、妖しく輝いた。

第一話 小国（後書き）

名前：ネロ・ライバー

レベル：？？？

称号：腹ペコ魔人

主武器：？？？

予備1：？？？

予備2：なし

防具：旅人の衣

装備：？？？

戦闘スキル：

？？？・？？？

状態：満腹

HP：2800/2800

MP：360/360

TP：410/410

FS：100/200

攻撃力：639

攻撃回数：50

防御力：319

防御回数：50

魔法攻撃：331

魔法防御：327

肉体速度：37

精神速度：37

攻撃属性：？？？

防御属性：？？？

発動スキル：

連携？——味方の攻撃に続けて攻撃すると、ダメージが増加する。
さらに続けば、増加効果は累積する。

見切り？——攻撃を受ける際に、確率で発動。敵の攻撃を完全回避する。

先手？——戦闘開始時に確率で発動。開始時の硬直フレームを0にする。

主従の絆——パーティ内に『主従の絆』を所持しているユニットが複数いる場合、所持者の攻撃力と防御力が10%上昇

名前：リリイ

レベル：???

称号：腹ペコ使い魔

主武器：みけねこぐろーぶ

予備1：???

予備2：なし

防具：青いドレス

装備：???

戦闘スキル：

???.???

状態：満腹

HP：961/961

MP：226/226

TP：152/152

FS：100/200

攻撃力：269

攻撃回数：25

防御力：129
防御回数：25
魔法攻撃：201
魔法防御：189
肉体速度：23
精神速度：23
攻撃属性：???
防御属性：???

発動スキル：

即死？——攻撃時に確率で発動。敵を即死させる。ボスには無効。習得レベルで発動確率が高くなる。

努力家？——迷宮時は1歩毎に経験値獲得。戦闘時は獲得経験値がI：1・2ⅴV：2・0倍。

飛行能力——戦闘時に常に飛行状態になり、一部の攻撃に対する耐性が変化。

魅了無効——自身に対する効果パラメータ『魅了』を無効化。

主従の絆——パーティ内に『主従の絆』を所持しているユニットが複数いる場合、所持者の攻撃力と防御力が10%上昇

どうも、約2週間ぶりのアウターです。これをもって2章を開始したいと思います。

2章開始早々から新キャラのオンパレードですが、皆様どうでしょう？

何か一部世界を間違えたやつとか、出演する世界を間違えた国がありますか、
全力で気にしない方向でいてください。ええ。もはやエウシュリーとのクロス状態ですね。

さてさて、最後の最後で某クサレシャギーの名前が挙がりましたが、彼の目的とは、と。

色々話すとネタバレしてしまいそうで怖いですが、一つだけいうのであれば、
グルーノと言う国がこれからの展開一番のヒントである、と言っておきましょう。

さて、まだまだ謎に包まれたネロさんとリリィちゃん。
さして行き成り主人公ポジションの新キャラ達、この国の行く末とは？

第2章は激動と流転をテーマとしてますので、
結構荒れるかもしれないですね……。

さてさて、それでは次回の更新でまたお会いしましょう。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6514u/>

お・り・が・み ～神殺して戦女神な物語～

2011年10月9日10時11分発行